秋 田 城 跡

秋 田 市 教 育 委 員 会 秋田城跡発掘調査事務所 本報告書は、現状変更による緊急調査二件を含む第28次から第31次までの調査結果をまとめたものである。

今年度の調査のうち第29・31次調査は、住宅改築による緊急調査であったが、いずれも結果的に は多大な成果を得ることができた。

第29次調査は築地が検出され、これまで推定の域を出なかった南外郭線の東部があきらかにされた。また第31次調査では、外郭線においてのみ検出されていた築地が予期しなかった内域北部で発見されたことは大きな成果であったと同時に、今後の調査方針に課題を投げかけた調査とも言える。

なお昭和54年度第26次調査採取の花粉の分析結果を本書に掲載することができた。ご多忙のところ採取・分析そしてご執筆いただいた宮城県農業短期大学の日比野紘一郎先生には深く感謝の意を表するものである。

また文末に収録した「秋田城関係文献目録」は、これまで秋田城研究において切望されていた目録である。今後、広くご活用いただき、より一層の成果をあげられることを期待するものである。

本書を刊行するにあたり、常日頃ご指導、ご助言をいただいている文化庁、宮城県東北歴史資料 館、同多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会文化課、並びに地元作業員の方々に深く謝意を表す と同時に今後の調査研究にご活用いただければ幸いである。

昭和56年3月

秋田市教育委員会 教育長 佐 藤 博 之

次

I	訓	骨査の計	画.				 	 		 1
II	贫	528次発	掘詞	調査			 	 		 2
	1)	調査	経 i	過			 	 		 2
:	2)	検出遺	構	と出土	遺物		 	 		 5
	3)									
	4)									
III	穿									
	1)									
:	2)									
	3)									
	4)									
IV	穿									
	1)									
1	2)									
	3)									
٧	角									
	1)									
	2)									
	3)									
	4)	まと	. 2	め			 	 	,	 60
		付	音	т						
		利	出地	城跡内	泥炭層の	花粉分析	 	 		 1 (61)
		付	章	II						
		利	kШ	城関係	少献 日磊	ļ	 	 		 1 (67)

第1図 秋田城跡地形図および調査地域図

Ⅰ調査の計画

昭和55年度の発掘調査は、内域地域究明の第一歩として護国神社本殿西部と50年度から継続調査 を実施してきた鵜ノ木地区中央部の二ヶ所を設定した。

発掘事業費は、総事業費1,300万円のうち国庫補助額50%、県費負担額25%、市負担額25%である。 調査計画は次のように立案した(表1)。

調 査 次 数 調 査 地 区 発掘面積m^{*}(坪) 調 査 実 施 期 間 第 28 次 護国神社本殿北西部 (内城地区) 523m^{*} (158) 4 月 5 日 ~ 6 月15 日 第 29 次 鵜ノ木地区中央部 1,210m^{*} (366) 6 月15 日 ~ 10月31 日

表1 発掘調査計画

しかし年度内に入って住宅改築による現状変更申請が二件あり、いずれも調査終了後の結果によって処理する旨通知があったので急拠二件の緊急調査を計画に組み入れた。

第28次調査は、昭和34年~37年に実施された国営発掘調査の検出遺構と関連させる意味から一部 重複させ地区設定を行った。その結果調査地の北側半分は、後世の畑、旧招魂社参道、土取り等で 削平されており遺構はほとんど検出できなかった。第29次調査は、住宅改築に伴う緊急調査である。 検出遺構は築地と溝状遺構であるが、これまで不明確であった南外郭線の東部が確認されたことは 大きな成果であった。

第30次調査の鵜ノ木地区は、過去5年間継続調査が実施されており、特に大規模な掘立柱建物跡群が検出されている点で注目される。調査地は同地区の最も高所に位置し、これまでも国営調査において数棟の建物跡が検出されている。調査の結果は、新たに数棟の建物と竪穴住居跡が検出され、それぞれ数時期の変遷があることが判明した。しかし同地区調査の最大の課題である官衙、寺院跡等性格について積極的に言及できる成果は得られなかった。第31次調査は護国神社参籠所改築に伴う緊急調査である。調査地は、隣接する護国会館建設の際造成されているにもかかわらず、トレンチの東側において築地と溝状遺構が検出された。築地遺構はこれまで外郭線においてのみ検出されており、今次のように外郭推定線以外の地区で築地が確認されたことは大きな成果であった。

昭和55年度の発掘調査は次のとおりである (表 2)。

表 2 調 査 実 施 状 況

調	查次	数	調 査 地 区	発掘面積m²(坪)	調査実施期間
第	28	次	護国神社本殿西部 (内城地区)	1,008m² (305)	4月7日~6月4日
第	29	次	大小路東部(現状変更による緊急調査)	53m² (16)	6月5日~6月18日
第	30	次	鵜ノ木地区中央部	1,780m² (539)	6月16日~10月24日
第	31	次	護国神社東部(現状変更による緊急調査)	$102m^2$ (31)	7月29日~8月12日

なお各次調査の出土遺物は年間を通して整理作業を行った。

II 第28次発掘調査

1) 調査経過

第28次調査は、秋田市寺内字大畑の護国神社境内を対象に4月7日から6月4日まで実施し、発掘面積は約1,008㎡(約305坪)である。

調査地は、護国神社本殿の西側に位置する平担地であり、西方は比高にして約10m下に旧国道が通っている。また、調査地には、北西方向に、招魂社当時旧国道から登ってきていた参道の痕跡が認められる。

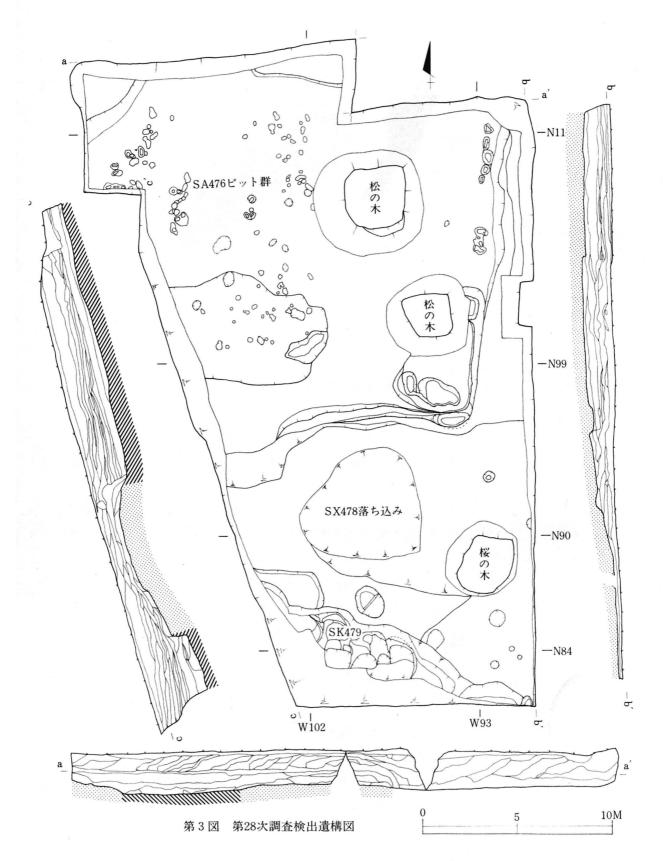
調査地一帯は、昭和34年から37年までの国営調査では推定内城跡の一部とされている地域に当り、 隣接する北側で東西に走る土塁跡、南側では建物跡が検出されている。以上のことをふまえて、今 次調査では主に建物跡の検出を主目的に調査を実施した。その結果、当初設定した調査区内の北側 では広範囲に地山砂層を貫きローム直上に至る新しい土取りがなされ、その後に大規模な盛土をし て整地していることが判明し、土取りのなされていない地区の地山砂層面で浅い落ち込み、土取り穴、 またローム直上面で小ピット群が検出された程度であった。以上のことからさらに継続して南側に 調査区を拡大し、一部国営調査の範囲を含めて調査を実施した。結果、国営調査時に検出した建物 跡の一部と土取り穴、さらに地山砂層面でピット群を検出した。

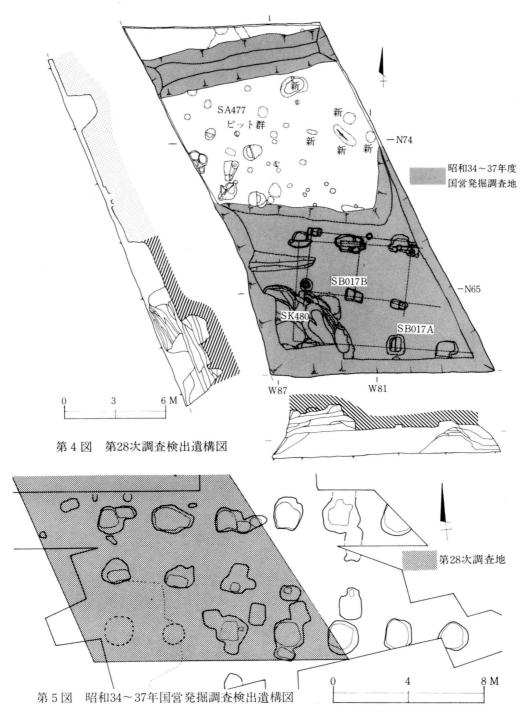
調査は、4月7日から開始し、測量基準点No.10より原点を移動し、X = -91.191m、Y = 115.106m、H = 48.241mに発掘基準点を設定した。

4月8日,飛砂が深いためバックホーにより、70cm~80cm程除去する。並行して遺構面の深いことが予想されるとともに、東側が道路で危険なため道路沿いにフェンスを張りめぐらす。4月9日にグリッドを設定し、翌10日から発掘作業に入る。PNラインに土層観察ベルトを残し、北半分のRN~PR−31~33大グリッドから除去作業を進め、順次南側に移動してゆく。随時精査を行い、最初に北西に通っていた旧道路(招魂社当時の参道)の全容を把握し、完掘する。また、この段階で広範囲に土盛りされていることが判明する。東側に3mグリッドを拡張する(16日)。4月17日からは、土盛りされた黒色砂、汚れた褐色砂を新しい順に西から東へ除去してゆく。その結果、盛土はいずれもローム直上の黒色土面で止っていることから、この黒色土まで土取りされていることが判明する(23日)。4月24日から南側PI~PM−30~33大グリッドの調査に移り、北側同様に盛土を除去して黒色土面まで掘り下げる。PI~PK−30~34グリッドは土取りによる攪乱が入っておらず表土から深いところで70cmで地山砂に至り、北東に傾斜していることが判明する。この段階で土取りの全容が明らかになり、南北約21m、東西約20m以上の範囲で「コ」の字型を呈することが判明する。PNラインの土層断面図を測り、一部ベルトを取りはずす。4月25日から4月30日までは、PI~PL−30~34グリッドの精査を行い、西・南側で確認していた地山砂を追求し、北東部の黒色砂、褐色砂を除去して地山砂層をあらわしてゆく。同時に南西隅の地区で落ち込みを確認、追求



した結果これまで秋田城跡で検出されているものと同様の土取り穴と判明し掘りあげる。並行して 4月30日からは、土取りされているPM~PS―30~37グリッドの精査に入り、黒色土面を剝いで ローム面をあらわす。黒色土内には染付等が混入し、PM・N-33~35では畑の「畝」が検出され、 この黒色土はある時期の旧表土と考えられる。5月1日以降ローム層の精査を行い,小ピットが多 数検出される。埋土には黒色土や攪乱の砂が入り、染付などが出土することから近世頃のものと思 われる。5月6日から13日までは、再度PR~PS一31、32グリッドの黒色砂を除去し、地山砂を 表しほば円形の落ち込み(SX478)を検出し完掘する。南壁際の埋土から赤褐色土器坏が多数出 土する。並行して南に3m程拡張し、土取り穴を追跡し完掘する。またPNラインの残りのベルトを 取りはずす。5月14日には全体を精査し、写真撮影を行う。写真終了後に西、北、東壁の土層断面 図を作成する。5月16日に遣り方を設定し、17日まで平面実測を行う。18日からは調査区の一部埋 め戻しを開始する。5月21日には、さらに南側に調査範囲を延長することとしグリッドを設定する。 グリッドは現在の地形を考慮し,平行四辺形状にPA~PG―24~31まで設定し,翌22日から表土 除去作業に入る。PP~PG-26~31グリッドは表土から約30cm程で地山砂層に至り、PA~PC -24~29では国営調査のトレンチが検出され掘り下げて行く。5月23日には地山砂層面の精査で新 たにPGラインに幅2mの東西にのびるトレンチを検出して完掘する。これら国営調査のトレンチ は地山砂層から約1mのローム層まで掘り込んでいることが28日までに判明する。その結果南側の トレンチで建物跡の一部掘り方を確認し完掘する。掘り方は形状が不整で重複が認められるものも あり、また、非常に浅く上層から掘り込まれていた可能性もある。さらに国営調査時には未調査の 土取り穴を確認し、完掘する。これらと並行して29日からPD~PF-27~30の地山砂層面の精査、 一部南側の褐色砂を掘り下げ地山砂をあらわし、全体を精査した結果、大小のピットが検出され掘





りあげたところ埋土の状況,出土遺物から近世頃のものと思われる。30,31日にはPD,PAライン,さらに西壁の写真撮影,土層断面図を作成する。6月2日には全景,部分写真撮影を実施し,遣り方設定後に平面実測を開始する。4日まで平面図,レベル実測などの作業を終了し,その後現場移動作業を行い全調査を完了する。

2) 検出遺構と出土遺物

第28次調査地区は、北側では近世頃の土取り、耕作、南側には国営調査のトレンチが確認された。 検出された遺構は、中世~近世頃の小ピット群、国営調査で発掘した建物跡、ローム採掘の土取り 穴、不明落ち込みなどである。

SB017A・B建物跡(第4図)

SB017A·B建物跡共に国営調査で検出されているもので、今次調査ではその一部を再発掘した。 国営発掘調査では、上・下層に3棟の建物跡を検出し、それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ建物跡としている。S B017AはⅠ、SB017BはⅢ、建物跡に対比できると思われる。

SB017A,すなわち国営調査でI建物跡としたものは梁行2間×桁行6間の東西棟の建物跡であり、今次調査では北桁西から3個、南桁西から3・4個目の掘り方を検出した。掘り方は、隅丸方形、不整方形を呈しており、大きさは約1m~1.2 m前後、深さは約25cm程のものが多い。桁行の柱間寸法は柱痕が認められないことから掘り方中心部から計測すると大体3m等間のようである。国営調査では梁行2間としているが、今次調査では梁の中柱は確認できなかった。掘り方は一部重複も認められ、あるいは上層で検出されたII建物跡の一部と思われる。また、一部の掘り方には小トレンチを切っている。

SB017B建物跡は、国営調査では上層で検出されたものでⅢ建物跡としたものと考えられる。梁行2間×桁行5間の総柱東西棟の建物跡であり、今次調査では、西側6個の掘り方が検出された。上層で検出された建物跡であるため掘り方の遺存は悪く、若干小さめになっていると思われ、掘り方規模は径40cm~80cm、深さ約20cm~30cmとばらつきがある。柱間寸法は柱痕が認められないことから明確でないが、掘り方中心で計測すると桁行は約3 m等間、梁行は約3 m60cm等間になる可能性がある。

S X 478不明落ち込み(第3図, 図版2)

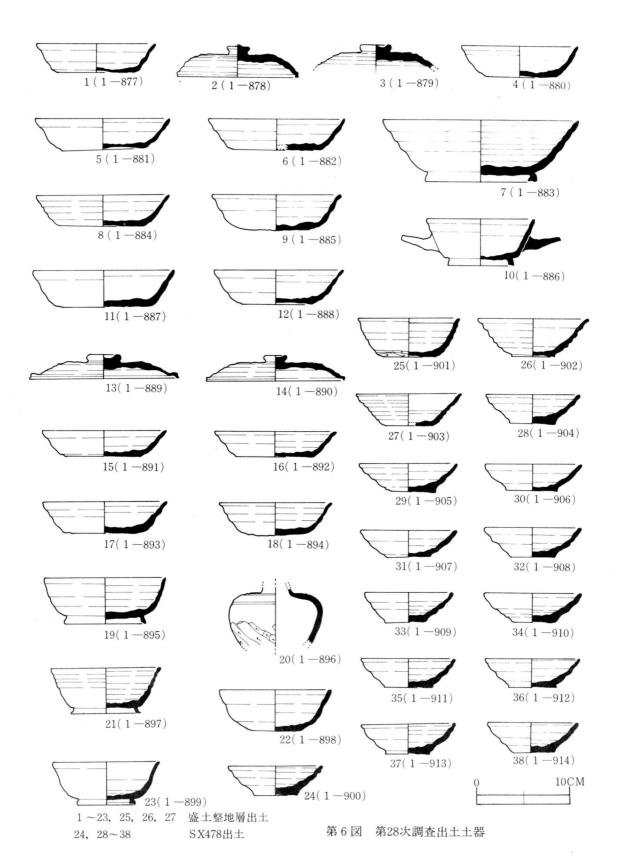
北側に緩く傾斜する地山砂層面で検出した。平面形は東西約6 m, 南北約6 mの不整円形を呈し、壁はゆるやかに傾斜して底部に至る。底部は鍋底状をなし深さは約40cm程である。埋土は全体に茶褐色砂が主体で、上部に若干黒褐色砂が堆積している。南壁際からは10数点の赤褐色土器坏が出土している。本遺構を確認した当初は住居跡とも考えられたが、形状、壁の状態、カマドが認められないことなどから住居跡とは考えにくく、不明の落ち込みとしてあつかった。

S X 478 不明 落ち込み出土遺物

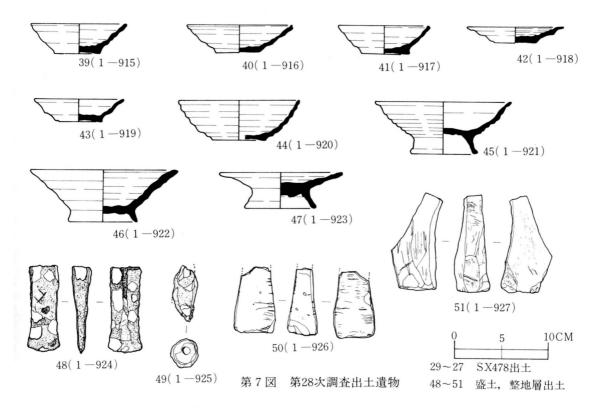
赤褐色土器 (第6, 7図, 図版22)

坏:いずれも底部切り離しは回転糸切りで再調整のない坏である。24,28~41,43はいずれも比較的器高が低く、口径1に対する底径比が0.5以下で皿形を呈する。胎土中には砂粒を含み、色調は灰白色、赤橙色を呈し、比較的軟弱である。32,35,36の体部には、輪積み(巻き上げ)痕と考えられる粘土紐痕跡がみられる。

■:42は底部切り離しが回転糸切りで、再調整はない。色調は黄灰白色を呈し、胎土中に小礫を



— 7 **—**



含んでいる。粘土紐輪積み (巻き上げ) 痕跡がみられる。

台付坏:45は底部切り離し不明である。高台を貼り付けた後に周縁にナデを施している。46,47 の底部切り離しは回転糸切りである。高台を貼り付けた後、中心を除き周縁にナデを施している。 いずれも色調は黄灰白色を呈し、焼成は良好である。

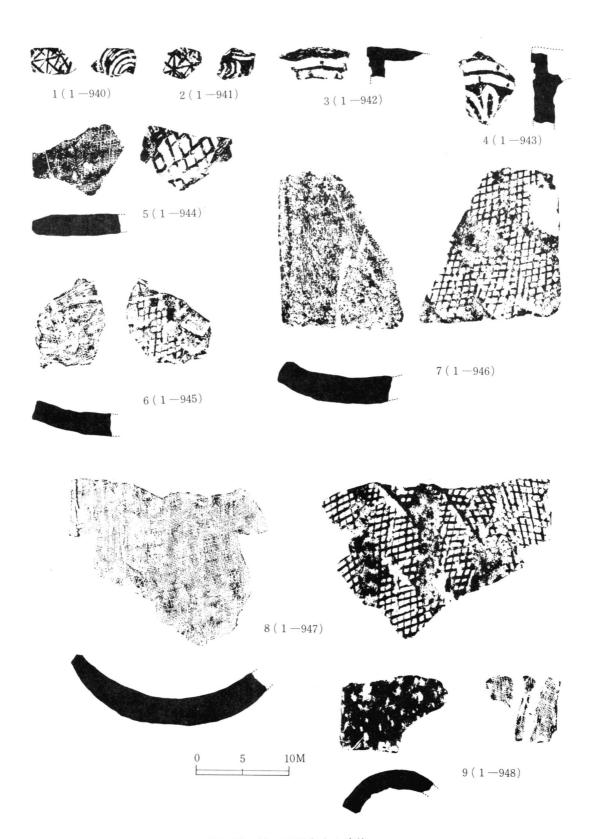
S K 479, 480土取り穴 (第3,4 図, 図版2, 3)

調査区の二ヶ所で検出した。S K 479は地山砂層面で検出したが、S K 480は国営調査の段階で地山砂が取りさられており、黒色粘質土面で検出されたが、本土取り穴については国営調査では未調査である。

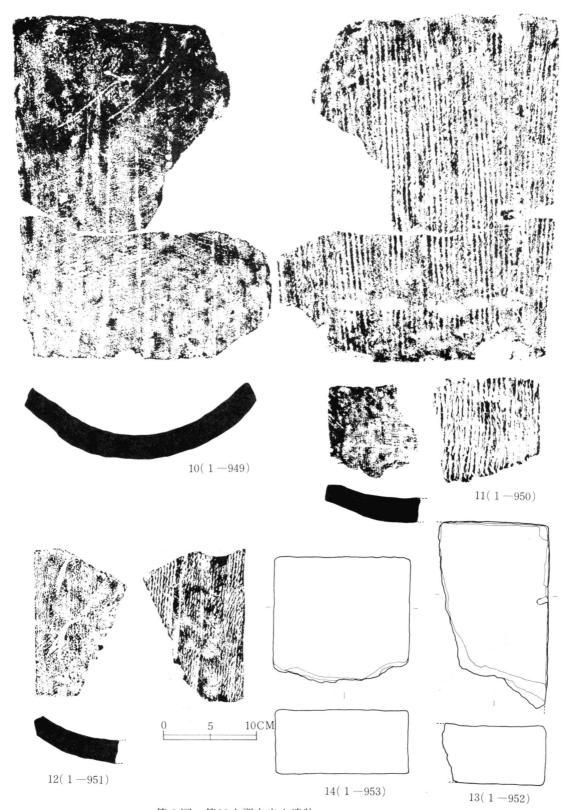
これらの土取り穴は、径1.7m~2.2mほどの土壙が複雑に重複したもので、北東部から南側に漸次掘り進んでおり、深さも深くなって行く。これは掘削後の足場を考慮したものと思われる。各壁面、底部には鋤先など掘削工具と考えられる痕跡が認められる。埋土は、S K 479、480ともに同様で、赤・黄褐色砂が主であり、赤・黄・黒色粘土ブロックが混入しており、特に黒色粘土ブロックは下層に多く含まれている。

SA476小ピット群 (第3図)

SA476小ピット群は近世頃の土取り、耕作がなされた範囲のローム面で検出された。ローム面の上部は約15cm~20cm程旧表土と思われる黒色土が堆積している。これらの小ピット群は、いずれも径20cm~40cm、深さ20cm~30cm程で黒色土や褐色砂が埋土である。埋土内から染付片が出土するピットもあることからこれらの小ピット群は近世頃のものと思われる。



第8図 第28次調査出土遺物



第9図 第28次調査出土遺物

SA477小ピット群 (第4図, 図版2)

地山砂層面で大小多数のピットが検出された。大きなものは径1 m~1.5 m, 深さは約30cm程あるが,総じて径約40cm,深さ約30~35cm内外のものが多い。埋土はいずれも褐色砂が入っている。3ヶ所のピット内から寛永通宝などの古銭が出土しており,近世頃のピット群と思われる。

3) 各層出土遺物

調査区内の層序は、北部上層が招魂社当時の旧道路や、近世以降の盛土などの攪乱によって明確には把握できない。基本的には地山砂層上の褐色砂や暗褐色砂、黒色土に大別される。

遺物は攪乱層である盛土内や整地層から土帥器坏・甕、須恵器坏・蓋・短頸壺、赤褐色土器坏、 鉄斧、砥石、土錘、瓦、塼等が出土している。

各層, 攪乱盛土内出土遺物

土 師 器 (第8図, 図版21, 22)

甕:いずれも小破片である。1,2ともに表面には花文状の叩き,裏面には同心円状のアテ板痕がみられる。赤褐色を呈し焼成は良好である。

須 恵 器(第6図, 図版21, 22)

坏: 1, $4 \sim 6$, 8, 9, 10, $15 \sim 18$ は底部切り離しが回転へラ切りで、15, 18を除き再調整はみられない。12は回転糸切りで再調整のない坏である。1, 4, 8, 12, 18の口縁部には重ね焼き痕跡が認められる。15は底部の中心部を残してナデを施し、18は底部全体にナデを施している。色調はいずれも類似し、灰白色、暗灰青色を呈している。

合付坏: 7 は復原口径22cm, 器高 7.5 cmを計る。底部切り離しは回転へラ切りで,高台を貼り付けた後,中心部を残してナデを施している。10は回転へラ切りによる底部切り離しで,高台を貼り付けた後,周縁にナデを施している。さらに体部外面中央部に取っ手を貼り付けた後,接合部周縁,取っ手部分を削っている。19,21,23は回転へラ切りによる底部切り離しで,いずれも高台を貼り付けた後周縁にナデを施している。

蓋: 2, 3, 14は回転へラ切りによる切り離しで, 13は切り離し不明である。 2 は偏平で中央が 擬宝珠状に盛上がる鈕, 3, 13, 14は偏平な鈕をもつ。 2, 3 はヘラ切り後鈕周辺にナデを施して いる。一方, 13, 14は鈕周辺に回転ヘラケズリを施している。とくに14は内面に墨が付着しており, 硯に転用されたと考えられる。

短頸壺:体部外面の頸部より約1cmの部分、また肩部分に二条を一単位とする平行沈線を、また 胴部下半から左上がりに下から上にかけての手持ちヘラケズリを施している。焼成は良好で暗灰青 色を呈し、胎土中に砂礫を多く含んでいる。

赤褐色土器 (第6図, 図版22, 25)

坏:口径10.8cm,器高4.2cmを計る。底部切り離しは回転糸切りで、体部下端から底部にかけて、幅約6mmの回転へラケズリが施されている。体部下端からわずかに内反りぎみに立ち上がり口縁部



須恵器が8点(坏7点,蓋1点),うち糸切り 2点、ヘラ切り6点である。赤褐色土器が4点 で、いずれも坏である。墨書部位は底部外面が 11点、体部外面が1点である。墨書の内容とし ては「牛」「宙」などがある。

鉄製品 (第7図, 図版23)

48は現存長約9.0cm, 幅約2.8cmを計る鉄斧で ある。銹化が著しい。

土製品 (第7図, 図版23)

49は胎土中に小礫を含み、焼成は良好である。 長さ約6cmを計る。

石製品 (第7図, 図版23)

50は四面使用の携帯用砥石である。擦痕が多 数みられる。石質は凝灰岩。51は五面使用の砥 石である。全面に無数の擦痕がみられる。石質 は不明である。

10CM 瓦 (第8,9図, 図版24,25)

3, 4はいずれも軒丸瓦の破片で、15葉細弁

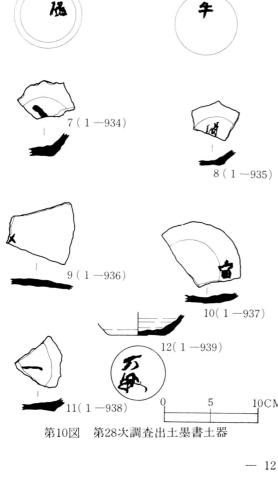


表3 墨 書 土 器

遺物番号	器 種	切り離し(調整)	墨書部位	出土層遺構	墨 書 銘
1 (1-928)	須 恵 器 坏	回転ヘラ切り	底部外面		丈 🗆
2 (1-929)	須 恵 器 坏	回転へラ切り	底部外面	盛 土	不明
3 (1-930)	須 恵 器 坏	回転へラ切り	底部外面	盛 土	牛
4 (1-931)	須 恵 器 坏	回転糸切り	底部外面	盛 土	不明
5 (1-932)	須恵器台付坏	回転ヘラ切り	底部外面		不明
6 (1—933)	赤褐色土器坏	回転糸切り	底部外面	盛 土	牛
7 (1—934)	須 恵 器 坏	回転糸切り	底部外面	盛 土	不明
8 (1-935)	赤褐色土器坏	回転糸切り	底部外面	盛土	不明
9 (1-936)	須 恵 器 蓋	回転ヘラ切り	天 井 部	盛土	不明
10(1-937)	須 恵 器 坏	回転ヘラ切り	底部外面	盛土	宙
11(1-938)	赤褐色土器坏	回転糸切り	底部外面	盛 土	不明
12(1-939)	赤褐色土器	回転糸切り	底 部 外 面	盛 土	「万申」か「万甲」?

表4 出土古銭一覧表

遺物番号	銭貨名	初 鋳 年	字体	出土地点	直径(%)	備考
1 (1-955)	富寿神宝	818年 (日本)	隷書	PR-34 盛土	23.7	皇朝十二銭
2 (1-956)	天聖元宝	1023年 (宋)	行書	PK-31 第3層褐色砂質土	25.2	
3 (1-957)	至和通宝	1054~1055年(宋)	楷書	表 採	24.7	
4 (1-958)	元豊通宝	1078年 (宋)	篆書	SA477小ピット群	24.4	
5 (1-959)	寛永通宝	1636年 (日本)	楷書	PF-27 地山砂層面	24.4	
6 (1-960)	寛永通宝	1636年 (日本)	"	SA477小ピット群	24.1	
7 (1—961)	寛永通宝	1636年 (日本)	"	表 採	22.8	

蓮華文である。5は格子の大きな格子目瓦である。6,7,8は格子目瓦で、比較的格子が小さなものである。9は粘土紐巻き付けによる製法の丸瓦破片である。10,11,12は一枚作りによる平瓦である。10は灰白色,11,12は赤橙色を呈する。

塼 (第9図, 図版24, 25)

還元炎焼成による塼である。いずれも形態は条塼で、灰白色を呈しやや軟質の焼き上がりである。 古銭 (第11図、図版26)

表採品,盛土,SA477小ピット群などから計7枚の古銭が出土した。内訳は富寿神宝,天聖元宝, 至和通宝,元豊通宝各1枚,寛永通宝3枚である。

4) ま と め

第28次調査地の北側はローム上の黒色土面に至るまで土取りがなされ、その後大規模に盛土を行

い整地していることが判明している。さらに南側では国営発掘調査のトレンチが確認されている。 検出した主な遺構は、国営発掘調査で検出された建物跡の一部、不明の落ち込み、土取り穴、小ピット群などである。小ピット群は埋土の状況、出土遺物などから近世頃の遺構と思われる。ここでは 土取りと盛土が行われた時期と国営発掘調査検出の建物跡について若干まとめてみたい。

1. 土取り、盛土の時期について

地山砂からローム上の黒色土まで土取りを行い、その後に盛土がなされている北側地域については土取りの時期は明確でないが、盛土の時期についてはある程度推測できる。それは、明治元年に秋田藩主、佐竹義堯が戊辰の役後に藩士はじめ諸藩の戦死者の霊を弔慰するためこの地に招魂社を営築することにし着手している。この時、久保田、土崎の人々が群集して土砂を運搬したことが『土崎港町史』(市土崎出張所、S16年12月15日)に記されている。土砂を運んだ地域は明確でないが、かなり大規模だったらしいことがうかがえる。今次調査地では盛土を切ってつくられている招魂社当時の参道が検出されていることから考えると、盛土はほぼ招魂社営築の際のものとみてさしつかえないと思われる。すなわち明治元年に土取りされていたこの地に土盛りし、その後で参道をつくったものであろう。そうすれば土盛り以前の土取りは明治元年以前には行われていたことになり、ローム上で検出された小ピット群中から出土した染付片などから近世頃の所業と考えられる。

2. 国営発掘調査検出の建物跡について

国営発掘調査概報によるとこの地域は昭和34年から37年までの4次にわたる調査で明確にされている。それによると建物跡は表土から1.3 mの面で2棟、さらに50cm下層の黒褐色土層で1棟の計3棟が検出され、2~3回の重複がなされていることが記されており、下層の建物跡をI、上層の建物跡をそれぞれII、III建物跡としている。I建物跡は梁行2間×桁行6間の東西棟で掘り方平面形はほぼ1.2 mの隅丸方形を呈し、深さは約25cm程である。II建物跡は梁行2間×桁行5間の東西棟で掘り方平面形は約1 m前後の隅丸方形で、深さは約20cm程である。III建物跡は梁行2間×桁行4間の東西棟総柱の建物跡で掘り方平面形は、東西約70cm×南北約50cm程の隅丸方形が多く、深さは約12cm~13cmである。I、II、III建物跡ともに柱痕跡は認められていない。

今次調査では、国営発掘調査で下層基盤面としたローム直上の黒褐色土まで掘り下げ精査した結果 I, Ⅲ建物跡とされている一部を再発掘した。その結果 I 建物跡 (SB017A) は平面形、深さ共に国営発掘調査の所見とほぼ同規模であり、Ⅲ建物跡 (SB017B) は上層で確認されたものであることから若干規模が異なるようである。

最後に建物跡についてまとめてみたい。今次調査地、国営発掘調査トレンチの層序をみると表土から約40cm~50cmできれいな黄白色の地山砂層に至る。国営発掘調査で黒褐色土基盤面とした上部にもこの黄白色砂が認められる。昭和47年度以降の調査では地山砂下部における遺構が認められないことが判明している。また掘り方の平面規模が1m~1.2 m前後のものは深さも1m~1.2 m前後あり、柱痕跡も明瞭に認められるのが普通である。以上のことを考慮すると国営発掘調査で黒褐

色土基盤面で検出されたとされる I 建物跡はさらに上層から掘り込まれた可能性があり、上層で検出したとされるⅢ建物跡についても平面規模に比して非常に浅く、あるいはさらに上層から掘り込まれた可能性も考えられる。

I 建物跡については、黒褐色土基盤面で検出されていること、また掘り方は平面規模に比べ非常に浅く、柱痕跡がまったく認められていないことなどから建物跡として明確さを欠いた。今後の調査で再考を試みたい。

III 第29次発掘調査

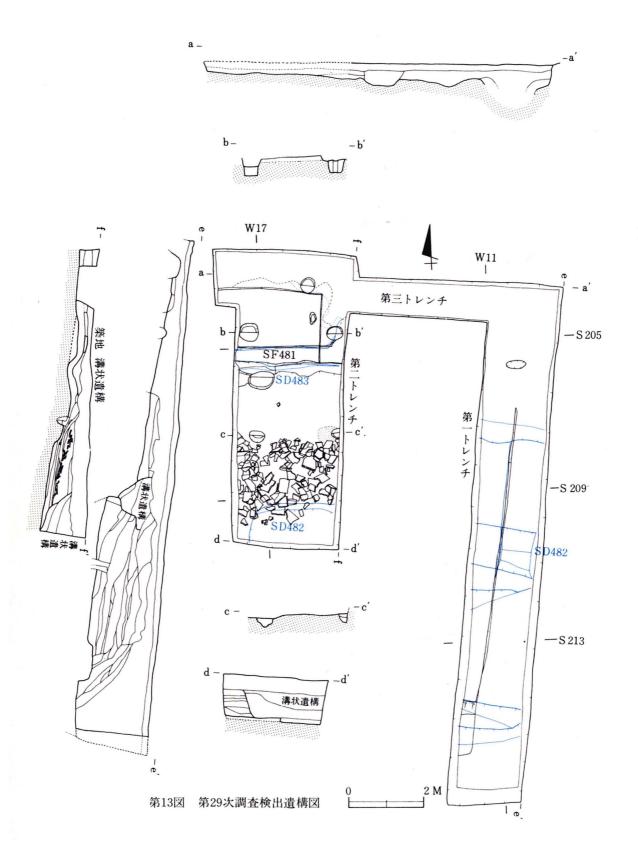
1)調査経過

第29次調査は、寺内字大小路で小橋隆一氏宅の住宅新築に伴う事前調査として6月5日から6月 18日まで実施した。調査面積は53㎡(16坪)である。

申請地は住宅が現在使用中であり、また敷地内は造成時に削平を受けているということであったが、その状況を把握するために家屋西側の一段低い畑地を調査地に選定した。なお当地は、南外郭線の想定線上にあるが現状では遺構と考えられる痕跡はまったく認められていない。

畑地は現在耕作中であったが、一部作物を移動し任意に3本のトレンチを設定した(第13図)。第一トレンチは幅2m、長さ13.5m、第二トレンチは幅3m、長さ6m、第三トレンチは幅1m、長さ9mである。第一トレンチ中央部では約30cm程の耕作土を除去した段階で、東西に走る溝と築地の崩壊土と考えられる黄褐色土に瓦混りの土層を検出した。またトレンチ南側は、自然地形の沢筋





と考えられるが、耕作土直下から掘り込まれた落ち込みがあり、陶磁器類が多く投げ込まれていた。 家族の方は記憶になかったようであるが、ごく最近のゴミ捨て場と考えられる。

第三トレンチは西側に整地層と考えられる比較的堅い黄褐色粘質土が認められた他は、耕作時の 攪乱が激しく遺構は確認できなかった。そこで整地層を追跡するため第二トレンチを掘り下げた結 果、南側で第一トレンチで検出した東西に走る溝の延長と考えられる落ち込みを確認した。溝を掘 り上げ略図作成後、トレンチのほぼ全面で確認されていた黄褐色粘質土を掘り下げたところ北側で は土手状の高まりが、中央部から南壁にかけては多量の瓦が確認された。また土手状の高まりの両 側には、四ヶ所に柱間約2.2 mの掘り方が検出された。これらのことから黄褐色粘質土の高まりは 築地、そして瓦は築地から崩れ落ちた崩壊瓦であることが判明した。しかし築地の大部分は溝状遺 構によって切られており遺存状態は良くない。

なお畑地の調査終了後,一段高位にある住宅に接する小屋の後方を一部調査したが,現地表から 地山飛砂層まで攪乱を受けており遺構,遺物は検出できなかった。

平面実測の基本杭は、測量原点No.9($X=-114.664 \text{ m} \cdot Y=-188.099 \text{ m}$)より移動した。X=-17.0701 m、Y=-201.165 m である。

6月18日には埋め戻しを終え、調査を完了した。

2) 検出遺構と出土遺物

SF481築地(第13図, 図版5,6)

第二トレンチで検出した。ほぼ東西方向に走り、秋田城外郭線南辺にあたる。築地本体は南側約 %をSD483溝状遺構によって破壊されており、明確な規模は不明である。しかし、寄柱はきわめて良好な状態で築地内外にほぼ対に 4ヶ所柱穴が検出され、掘り方は径約40cm~60cm、深さ約20cm~30cmを計り、地山飛砂層を掘り込んでいる。埋土は黄褐色粘質土で、柱痕の確認できるものもあり、柱の径は約10cm~15cmを計る。寄柱の間尺は東西が心々で約2.2m、南北が約2.7mである。寄柱の他に不規則な掘り方も検出された。

積土は黄褐色・赤褐色粘質土で旧表土である地山砂直上の赤褐色砂層に直接積み上げている。堅 く版築が施され、遺物は含まれない。

築地外側である南側には崩壊土が堆積し、崩壊瓦が多量に検出され、完形に近いものもあり、数点については二次火熱を受け赤褐色に変色しているものも認められた。また、崩壊土内に焼土、炭化材、炭化物も多く認められた。

SF481築地崩壊土出土遺物

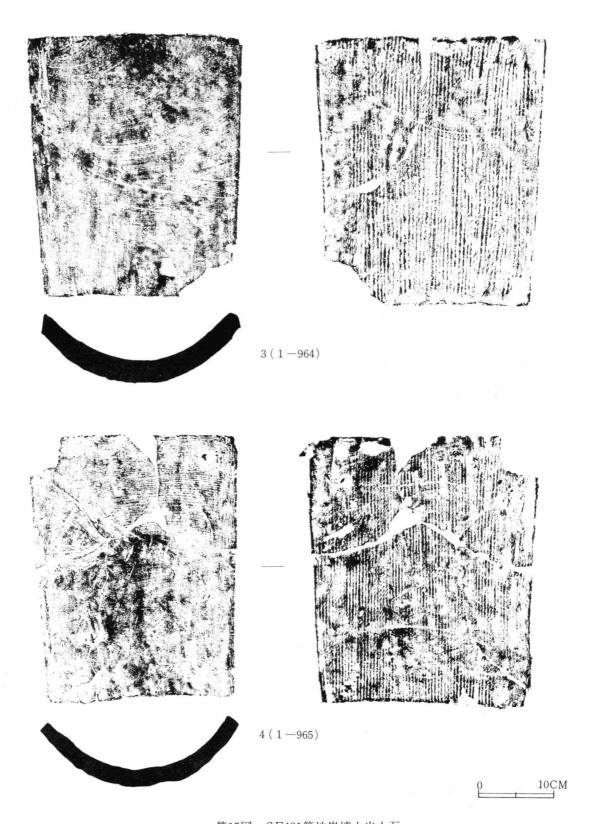
須恵器甕・壺, 瓦等が出土したが, 須恵器については小破片であり図示しえなかった。

第一トレンチ築地崩壊土より出土した須恵器台付坏については、その他の出土遺物の項で述べる。 **瓦**(第14, 15, 16図, 図版26, 27, 28, 29)

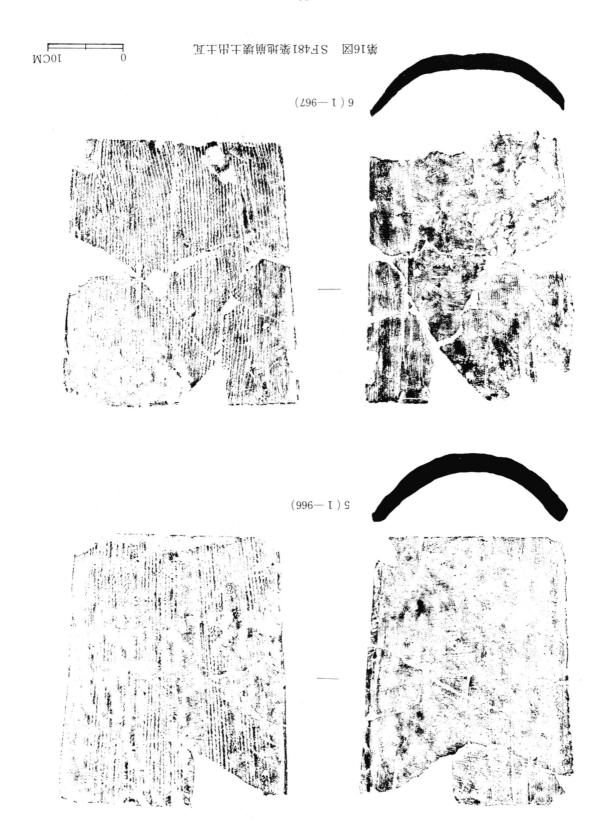
瓦は第二トレンチにおいて多量に検出された。出土状態はすべて小破片であったが、崩壊土の遺

第14図 SF481築地崩壊土出土瓦

I0CM (896-1)2 (296-1)[



第15図 SF481築地崩壊土出土瓦



存状況が良好だったことと、調査面積が約1坪であったことから坪当りの屋根瓦数を計測するため、全出土瓦について接合を行った。その結果、約1週間で完形および完形に近く復原できた瓦は平瓦が46枚、丸瓦8枚であった。残りの接合不可能な少片については総重量を計測し、完形品数枚の平均値で除法しおおよその枚数を算出した。ちなみに平瓦5枚の平均値は4.79kg、丸瓦4枚の平均値は2.95kgであった。これらより少片の総重量から換算された瓦の数量は平瓦が約17枚、丸瓦が約23枚となる。したがって全出土数量は平瓦が約63枚、丸瓦が約31枚、のし瓦が約4~5枚である。

築地の基底幅が約2mであることを考慮するならば、築地の屋根は棟から軒先まで最底1mなければならない。したがって軒先から棟まで6枚の平瓦と4枚の丸瓦が必要である。本調査地の場合は、幅約3mのトレンチであるから軒先には平瓦が10枚並ぶ、すなわち築地の片屋根に要する瓦は平瓦が約60枚、丸瓦が約40枚ということになる。

以上の仮説と比較して見ると、第29次調査出土瓦は丸瓦が若干少いものの、築地の屋根の外側の 数量にほぼ相当する。築地内側部分については、後世に削平を受けている上に現在の耕作が地山飛 砂近くまで及んでいるため崩壊土はまったく検出されていない。

個々の瓦については、完形に近い平瓦・丸瓦のみ表 5 の如く、成形、整形、焼成等技法別に項目を設け検討を加えた。

平瓦のすべてに共通する項目は、凹面の布、糸切り痕が認められること、凸面は繩目の叩きの後、スリ消し等の二次調整がまったく認められないことである。すなわち前者が認められることにより、平瓦はすべて粘土板作りであることが考えられる。中でも第14、15、16図の2、4、5、6は、側面が瓦の弧に対して直角に近い角度で面取りされ、また5を除く4枚は他と比較して薄手でしかも、凹面には部分的にスリ消しが認められる点など共通性がある。特に4については糸切り痕が瓦の長軸に対してほぼ直交する方向を示すことも合わせ考えると桶巻作りの可能性が考えられることも指摘しておきたい。

その他の瓦は布端が認められることや側面の面取り、糸切り痕等から粘土板一枚作りと考えられる(第15図3)。糸切り痕は、広端を上にした場合、右上隅から糸が入る場合と左端から入るものがある。しかし両者の相違は、その他の調整技法においては認められない。

凹面にはしばしば模骨痕に似た板状の圧痕が認められるが、端から端まで一直線に延びるものはなく、長い場合で中部位まで確認できる。また板の巾も1cm~4cmで均一性がなく、圧痕の状態も一定でない。

丸瓦は無段(行基)有段(玉縁付)両者が見られるが、形態以外の成形、調整技法においては同一である。すなわち円筒状模骨に粘土板を巻き、縄を巻き付けた叩き板で叩き締める。ほぼ全面におよぶスリ消しは、模骨を回転しながら行うが、縄目がすべて消える程深くまでは達していない。分割は、あらかじめ模骨に付設されている突帯による沈線に沿ってなされる。突帯による沈線の深さは約5mmである。

DAKV29次 崩壊土出土瓦

〈 平 瓦〉

	凸	面		凹		面		端	部		焼	
	繩	スリ	布	粘合	板	部ス	糸切り		厚	8		備考
番号	目 叩	り消し	端	土目	材 痕	分消的し	の方向	側縁の面取り	広端部	狭端部	成	
1	0		0					7	2.5cm	2.3cm	黒	
2	0		0					\supset	3.5	2		
3	0							\supset	2	2.3		
4	0		0					7	2.6	2		
5	0				0		不明		3	2.4		- y
6	0				0		$ \mathbf{V} $	7	2.8	2		
7	0						不明	\supset	2	2.5	黒	
8	0								2	不明		
9	0								2.3	不明		
10	0				0			\Rightarrow	2.8	2.2		
11	0				0			2	2.8	2.6		
12	0						$ \overline{\mathcal{L}} $	\Rightarrow	3.1	2.8		
13	0							\Rightarrow	2.2	2.4		
14	0						$ \overline{\mathcal{L}} $	\Rightarrow	3	3.1		
15	0					0	¥	\Rightarrow	2.1	1.8		4枚か?
16	0					0	V	\Rightarrow	1.3	2.1	黒	
17	0		0				$ \square $	\Rightarrow	2	1.8	黒	
18	0					0		\Rightarrow	2.1	1.9		
19	0		0				E/	\supset	2.7	2.2		
20	0							\overline{a}	2.4	2.5		
21	0						7	\sim	2.5	2		
22	0					0	→	\Rightarrow	2.1	1.8		4 枚づくり
23	0						$ \checkmark $		2.6	2.2		
24	0				0		- 不明	\overline{a}	2.9	2.2	黒	
25	0	3						\Rightarrow	2	2.2		
26	0					0		\Rightarrow	2.1	2.2		4枚か?
27	0				0			\Rightarrow	2.4	2		
28	0								2.1	2.2		
29	0		0					\supset	3.2	2.2		
30	0						7		2.8	2.3		

〈平 瓦〉

	凸	面		Щ		面		端	部		焼	
*	繩目	スリ消	布	粘合せ	板 材	部スリガ消	糸切り	側縁の面取り	厚	8		備考
番号	叩	l	端	土目	痕	的し	の方向		広端部	狭端部	成	
31	0		0					\Rightarrow	2.6cm	2 cm		
32	0						不明	7	2.9	2.7	黒	
33	0					0	0	\Rightarrow	1.9	不明		4枚か?
34	0						不明	7	3	2		
35	0				0		$\overline{\rightarrow}$	\Rightarrow	2.4	1.9		4枚か?
36	0							7	2	2	黒	
37	0					0	V	7	1.3	2.1		
38	0							7	2.3	2.2		
39	0				0		不明	\supset	1.9	2.7		
40	0				0		不明	7	2	2.1	黒	
41	0						V	\bigcap	2.2	2.3	黒	
42	0						F		2.7	1.8		23 8
43	0				0		不明	7	2	1.8		
44	0						不明	N	2	2	黒	
45	0						0	7	2.2	2.7		
46	0				0		V	7	2.3	2		

〈丸 瓦〉

	凸 面	Щ	Ī	面	端	台	K	焼
					側縁面取り	厚き		
	縄目→スリ消し	粘土合せ目	スリ消し	糸切り痕	関係 田 4 7	広端部	狭端部	成
1	0	0		0	$\overline{}$	2.4cm	1.7cm	
2	0			0	\Rightarrow	2.1	1.6	
3	0	0		0	\Rightarrow	2.3	1.7	
4	0	0		0	\Rightarrow	2.3	2.1	
5	0	0		0	\Rightarrow	2.4	2.6	黒
6	0			0	\Rightarrow	2.3	1.5	
7	0			0	→	3	2.4	
8	0			0	\Rightarrow	3.1	1.5	

- (注) ○平瓦の凹面の「布端」とは、両側縁あるいはいずれかに、模骨に敷いた布の端が、痕跡として 認められるもの
 - ○焼成の「黒」というのは、全体に黒色を呈し、全体に焼きの弱い軟質なもの

有段丸瓦は完形品が認められず、また量的にきわめて少なく10%にも満たない。

S D 482 溝状遺構 (第13回, 図版 4)

第一・二トレンチで検出した。第一トレンチ検出の溝状遺構は、幅約1.1m~1.2m, 深さ約80cmで東西方向に走り、築地崩壊土を切っている。断面はほぼ「U」字形を呈し、埋土は黄褐色粘質土で、埋土内より瓦の小片が出土した。第二トレンチ検出の溝状遺構は第一トレンチ検出の溝状遺構と接続するものであるが、南方に屈折する。

S D482溝状遺構出土遺物

内黒土師器坏、須恵器坏・甕、赤褐色土器坏、瓦等が出土したが、小破片であり図示しえなかった。

SD483溝状遺構 (第13図, 図版5)

第二トレンチで検出した。築地本体を南側約%程掘り込んでいる。断面はゆるい「U」字形を呈し、幅は不明である。本遺構に付設するのかは明確でないがピットが 1_{τ} 所確認された。SD482溝状遺構と同様に東西方向に走る。東側つまり第一トレンチにおいては地形が自然傾斜とともに地山砂層が高くなり、後世に削平されて遺構は検出されなかった。なお、出土遺物はなかった。

3) その他の出土遺物 (第17図, 図版29)

第一トレンチで、1、10が第 2 層、 $2\sim6$ が第 3 層、7 が築地崩壊土、9 が攪乱層より各々出土した。8 は表採である。

須 恵 器

7は台付坏で、底部切り離し回転へラ切り、 高台を貼り付けた後周縁部にナデを行ってい る。内面に自然釉が少々かかる。

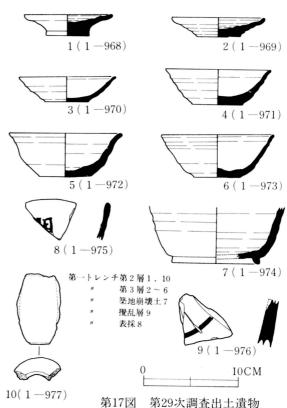
赤褐色土器

1、2は底部切り離し回転糸切り、無調整の皿である。1は底部を厚く切り離し、一見して台付を思わせる形態である。3~6は底部切り離し回転糸切り、無調整の坏である。3は口縁部に、5は内外面部分的に油煙状の炭化物付着が認められる。

墨 書 土 器

8 は赤褐色土器坏の体部外面に, 9 は酸化 炎焼成による擂鉢の体部外面にみられ, 共に 判読不明である。

土 製 品



10は土錘で、非常に硬質であり自然釉がかかる。

4) まとめ

第29次調査地では築地・溝状遺構が検出された。

南外郭線の西方については第13次調査で確認されているが、第10次調査で検出した東外郭線に継続すべき東方部が未確認であった。その理由としては、南外郭想定線上の地形が凸凹であること、宅地が比較的集中しており適当な調査地が見当らないことによるものであった。しかし今次の調査では現状変更による緊急調査ではあったが、明確な築地遺構が検出され南外郭線の位置が決定した。検出された築地および溝状遺構(栅列状遺構)は、これまで数ヶ所において実施された他の外郭線調査の検出遺構とほぼ同じ規模、共存関係が認められる。すなわち築地とそれを切る溝状遺構、そしてその埋土からは赤褐色土器が出土する。第IIトレンチ南側で検出された東西に走る溝状遺構は、これまで一部外郭線の調査(第19次)で検出されている時期を異にする溝状遺構で、同じくある時期の外郭を構成する遺構と考えられる。

築地崩壊土からは焼瓦・焼土・炭化材が検出されている。当初、これらの出土遺物から判断して、 築地は火災により焼失・崩壊したものであると考えられた。しかしその後、復原した瓦の観察の結果、火熱を受けた痕跡の認められる瓦はごく数枚であることから、火災が築地崩壊の直接的要因であるかどうかは不明である。しかし上述したように火災と築地崩壊の時間的関係は把握できないものの、焼土および炭化材と瓦は密着している部分があるところから、かなり近い時間を考えることができよう。

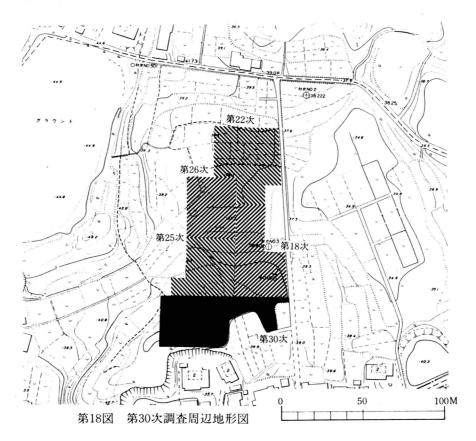
Ⅳ 第30次発掘調査

1) 調査経過

第30次調査は寺内字鵜ノ木地区を対象に6月16日から10月24日まで実施し、発掘調査面積は約1780㎡(約539 坪)である。この地区は秋田城外郭線外南東約100mに位置し、周辺は国営調査(1959~1962年)、第18次(1976年)第22次(1977年)、第25次(1978年)、第26次(1979年)調査が行われ、多数の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、柱列、土壙、溝などの遺構を検出している。特に第18次、第25次調査において、国営調査で四天王寺跡と推定され、その第一次講堂、第二次講堂跡と考えられた掘立柱建物跡を再調査した結果、第一次講堂については時期の異なる数棟の建物であることが判明し講堂としての建物性格を再考する必要が生じた。また、第二次講堂跡については二時期以上の変遷が考えられ、建物は同時期に構築されたと考えられる井戸跡から検出した木簡の年代から8世紀前半から中頃までの時期が考えられている。

本次調査はこの第一次, 第二次講堂跡とされた掘立柱建物跡の南に更に第一次, 第二次の金堂跡, 経蔵.または鐘楼跡と呼ばれる掘立柱建物跡が存在していることからこれら建物の位置, 規模, 構造, 変遷を究明することと, 更に付属する施設, 他の遺構及び遺物の存在の有無を追求し, 外郭線外南 東地区の遺構, 遺物の実態を把握することを目的に実施した。

調査に先だち、鵜ノ木地区にある測量基準点No.3から原点移動を行い発掘調査基準点をX=349.746m, Y=-165.407m, H=42.825mに設定した。6月16日~30日まで調査区東側を中心に表土剝ぎを行い、SA502柱列、第一次金堂跡、経蔵、または鐘楼跡と呼ばれている掘立柱建物跡SB018,019を確認した。7月1日から7月22日は調査区を西側に移動し表土剝ぎを行い、第2層面をあらわしていった。同層面にては国営調査時のトレンチを確認した他は遺構の存在が認められず、第2層の除去を7月22日から開始していった。これと並行して検出した遺構の精査が行われ、正面5間、奥行5間、すなわち3間×3間の身舎に四面廂のつく第一次金堂跡とされた建物は東西3間×南北2間、四面廂のSB487建物とやはり東西3間×南北2間と四面廂と推定されるSB488建物跡の重複するものであることが判明した。7月23日からは第2層の堆積していない西側地区南から精査を行い、第二次金堂跡とされたSB018建物跡の重複するものであることが判明した。7月23日からは第2層の堆積していない西側地区南から精査を行い、第二次金堂跡とされたSB018建物跡の柱掘り方の一部、SK542袋状ピット、SA500、501柱列、2間×2間の総柱のSB490建物跡、SI494住居跡、SK512~540土取り穴、SK541土壙を確認し、7月26日~28日にSB018建物跡、SI494住居跡の精査を行った。29日~30日は第31次調査の為、第30次の調査作業を一時中断した。7月31日からは更に西に発掘区を拡張し、8月22日まで表土を除去し、並行して検出遺構の精査を行っていった。8月7日にはSI498住居跡を確



認、18、19日はSK542袋状ピットを精査し、繩文土器を検出、20日、SI497住居跡を確認、SK512 ~540土取り穴の掘り下げ、21日、S K 541土壙, 542袋状ピットを完掘し、写真撮影を行った。25日か ら、西に拡張した調査区の第2層を除去SI495住居跡、SA503柱列、SD504、505溝を確認し、27 日からSI494,496,497,498住居跡の精査掘り下げを行い,9月5日SI493住居跡を確認した。 更に 9 月 8 日には S I 495 住居跡を検出、精査掘り下げに入った。住居跡精査に並行し土層観察のべ ルトの除去, SB 018 建物跡精査, SK512~540土取り穴精査 (土層断面, 写真撮影) を行ってい った。26日まで各住居跡の精査が終了次第,平面図,完掘写真撮影を行っていく一方,SB018,486 建物跡の全体写真、SB490、018建物の掘り方埋土柱痕跡の断ち割りを実施した。断ち割りの結果 SB 018 建物は廂部分の柱痕跡には含まれない焼土,炭化物が身舎部分の柱痕跡には多量に認めら れることから、身舎部分にのみ建て替えがなされていることが判明、新しい建て替えの建物をSB 484 建物跡とした。29日~10月 2 日まで S B 019建物の全体写真撮影,平面図の作成を行った。S B 019建物跡もSB018建物同様、国営調査で柱痕跡を中心に円筒状に残し、埋土を除去している。精査 段階で西に廂の取り付くことが判明、また、身舎、廂に二度の建て替えが認められ、身舎柱痕には焼 土、炭化物を多量に含むというSB 484 建物跡と共通する点のあることが確認された。廂をもつ古 い建物をSB485建物として身舎のみのSB019建物と区別した。30日にはSB487, 488, 494建物 跡の全体写真撮影,10月3日にSI 499住居跡を検出,精査を行った。4日には柱列,溝,土壙の 再精査、土層断面図を作成、写真撮影を行い、6~7日には地区別に調査区の全体写真撮影を終了 した。8~11日まで調査区全域の平面実測のため遣り方を設定,14日から平面実測,レベル測定を行っ た。18日からはSB485廂部分、486、487、489、490、491、492 建物跡の掘り方の断ちわり、断面図 作成,写真撮影を行い、また、22、23日には国営調査で検出したSI 020 住居跡の床面を精査し、床が 地山と同質の粘土による貼り床であることが判明,貼り床の粘土内から赤褐色土器が出土した。24日に は柱列の柱穴の断面図、写真撮影、航空写真のための発掘区内の清掃を行い、28日にはテント他発 掘器材を撤収しすべての調査を終了した。なお、航空写真撮影は後日11月13日に実施した。

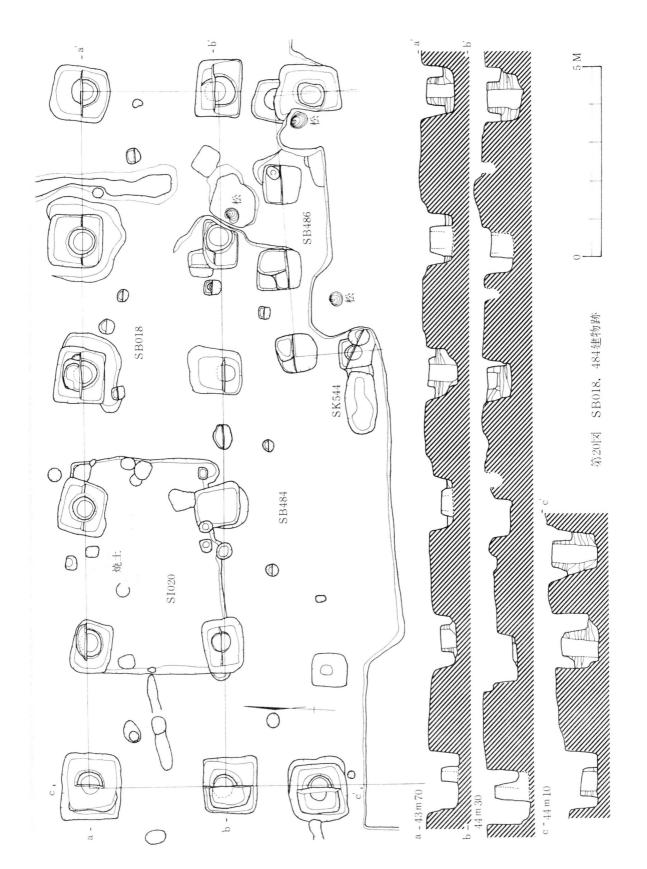
2) 検出遺構と出土遺物

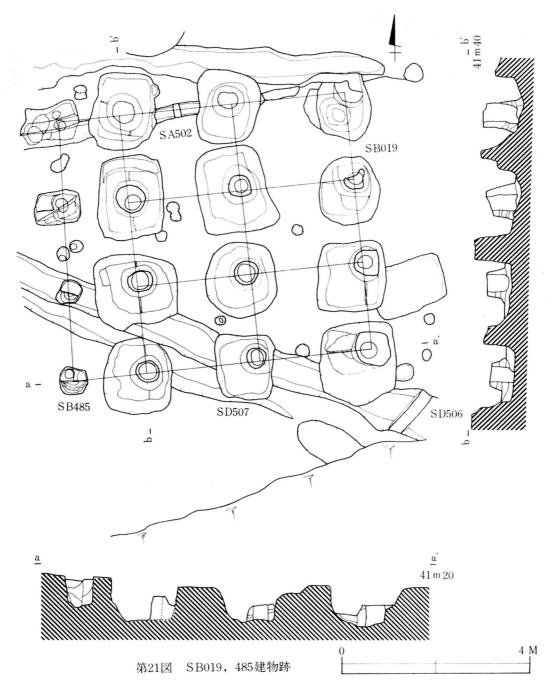
検出した遺構には大規模な掘り方をもつ掘立柱建物跡 8 棟、小規模な掘り方の掘立柱建物跡 3 棟 (うち 3 棟は既に国営調査で確認ずみであった),竪穴住居跡 7 棟、布掘りの溝に柱穴痕の認められる柱列 4 列、溝跡 8、土取り穴群、袋状ピット (縄文あるいは弥生期)、土壙などがある。

SB018建物跡(第20図, 図版8,11)

既に国営調査で検出しており、身舎は桁行5間、梁行3間と考えられるが南半分は削平され不明である。南北に廂を有し、第二次金堂跡に推定されている東西棟の掘立柱建物跡である。後述のSB484建物跡が同一場所によって建替えられ、この建物の柱痕跡は北廂部分にのみ残っている。すなわち、SB484建物跡の柱痕跡には多量の焼土、炭化物の混入が認められるが北廂柱痕跡にはこれが観察されなかった。北廂で桁行の間尺を測定すると西から3.75m+3.6m+3.6m+3.6m+3.8

— 27 —





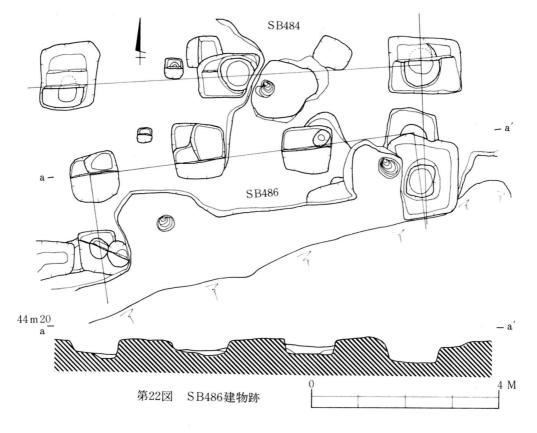
m, SB 484 建物跡の確認された身舎桁行の柱痕跡と本建物跡の北廂柱列柱痕跡の心々が同一線にのることから身舎規模も同一と考えられ、北廂から梁行の間尺は3.6m +2.4m + · · · · · を測る。建物方位は桁行が西で南に約3°振れている。掘り方は1.6m×1.7mから1.4m×1.1mまでの方形で、深さは確認面からは50cmから90cmであるが底面は42m70cmの標高にほぼ一致する。柱痕跡は直径45cmか50cmの円形で、地山粘土層に直接柱を据えている。掘り方埋土はわずかしか残存していないが、黒色土、赤褐色粘土、黄褐色粘土を互層に積み版築している。

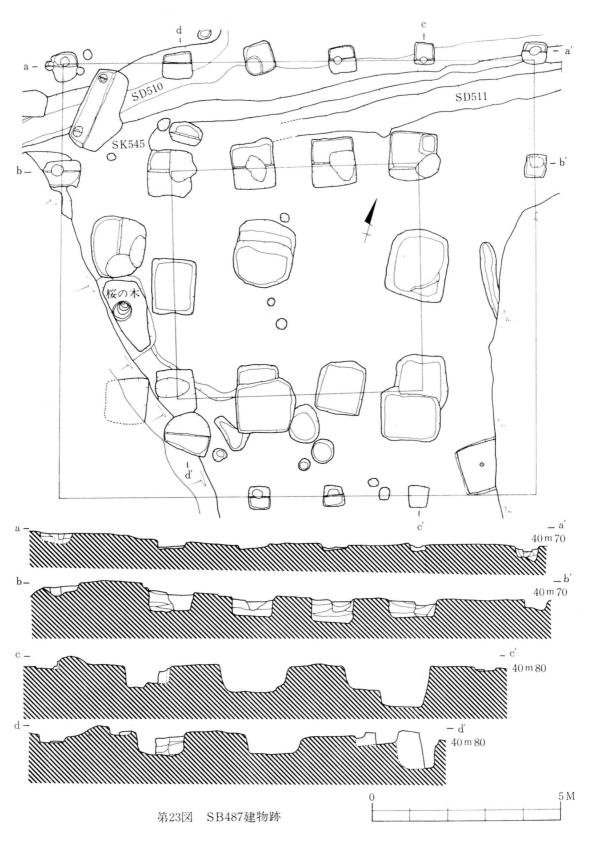
SB484建物跡(第20図, 図版8,12)

SB018 建物跡と同一場所に建て替えた掘立柱建物跡である。北廂を欠く、南廂か身舎のみの建物で桁行5間、梁行3間と考えられるが南半分は削平され不明である。柱痕跡は桁行西から3番目が既に国営調査で掘り上げられ不明となっているが、間尺は桁行で西から3.8m + ○ + ○ + 3.6m + 3.8m、梁行で北から2.4m + …である。建物方位はSB018 建物跡と同一で桁行が西で南に約3°振れている。掘り方は1.8m×1.5mから1.3 m×1 mの方形で深さは確認面で50cmから1.5m、南西部でもっとも深く残っているが、底面標高は42m70cmである。柱痕跡は直径40cm~55cm、桁行東から3番目を除いてすべて地山粘土層に直接に据えている。柱痕跡の埋土には多量の焼土、炭化物が混入し、西梁行の柱痕跡の埋土からは赤褐色土器片が出土した。桁行東から3番目の柱痕跡は掘り方底面より40cm浮いており、掘り方埋土の上下で相違が認められたことから、二度の掘り込みが為されたことが観察され、上記のSB018建物北廂の柱痕跡の埋土との相違と合わせ考え、建て替えと判断した。

SB019建物跡(第21図, 図版7,9)

SB 018 建物跡と同じく国営調査で既に検出している南北棟、桁行 3 間、梁行 2 間の総柱の掘立 柱建物跡である。後述のSB485建物跡を同一地点で建替えたもので、SB484建物跡同様に柱痕跡 埋土に焼土、炭化物が多量に混入している。焼土にはブロック状の大きな塊りも含まれ、スサ状の





植物質の痕跡が観察された。柱痕跡は直径30cm~40cmの円形で地山粘土面に直接据えられたものと、10cm~20cm浮いた状態のものがある。間尺は桁行で北から1.8m +1.8m +1.85m,梁行で西から2.4m +2.4m,建物方位は桁行で北で東に約3.5°振れている。掘り方は1.3m×1.1mから1.8m×1.5mの方形または直径1.6mの円形であり、掘り方平面形に規則性がなく掘り方壁面、底面に凹凸が認められる。また、南梁行東隅の掘り方埋土に建て替え痕跡と考えられる掘り込みが観察できることから、国営調査時に掘り方埋土は大半が掘り上げられていて断定できないが2回以上の建て替えが考えられる。掘り方底面は東北方向で深く、柱痕底面は標高約40m~40m30cmである。

SB485建物跡(第21図, 図版7,9)

SB019建物跡建て替え以前の古い建物跡である。西に廂をもつ建物であるが身舎部については、桁行の間尺が北から1.8m+1.8m+1.75mとSB019建物の間尺と同一であり、同建物跡の掘り方すべてに建て替えの痕跡があり、同一規模と判断された。廂は60cm四方の方形の掘り方で規模が小さいが掘り方底面は標高約40m30cmである。直径20cmの凹形の柱痕跡が認められ、掘り方埋土に2回の建て替えが認められることから、SB019建物跡と合わせ最低3回の建て替えと考えられた。柱痕跡のある新しい廂から建物桁行方位をみると北で約5°東に振れ、古い廂は掘り方が北で西にずれることから、これより振れが大きいものと考えられる。

SB486建物跡(第22図, 図版8,10)

東西 3 間,南北 1 間以上の掘立柱建物跡である。掘り方は 1 m四方の方形で30cm~40cmと浅く,柱痕跡は明確でない。SB 018建物跡と重複し、重複部の埋土は既に国営調査で取り除かれ、新旧関係は明確でないが、掘り方埋土に焼土粒、炭化物がびっしりとつまっており、SB 018 建物跡の柱痕跡に焼土が混入していることから、これより新しい時期が考えられる。掘り方中央に柱を求めるとすれば、北柱列で西から2.4 m + 2.1 m + 2.4 m、西柱列で北から 1.8 mの間尺である。建物方位は北柱列で西で約8°南に振れる。

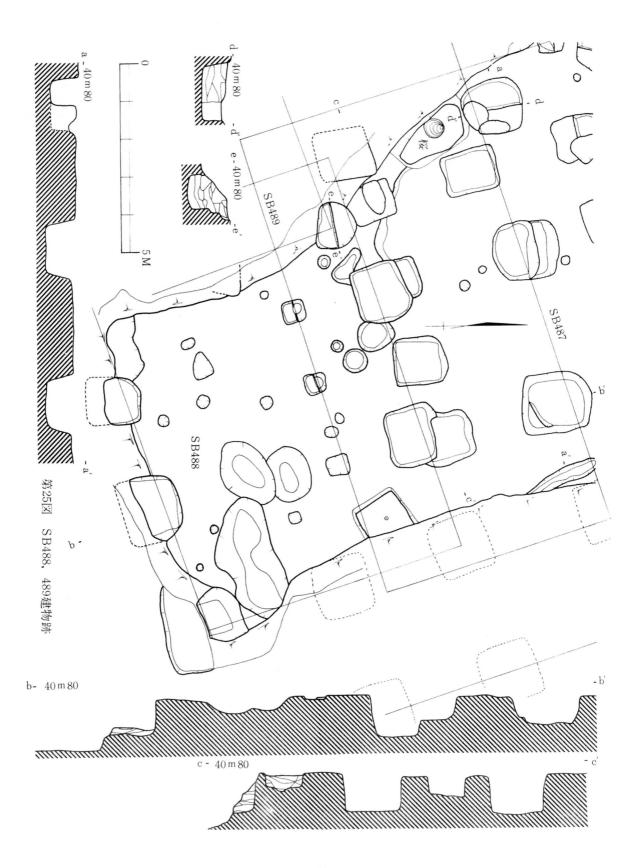
SB487建物跡(第23図, 図版10, 12)

国営調査において第1次金堂跡と考えられていた掘立柱建物跡と重複し掘り方一部が記録されているが、未確認の建物跡であった。しかし今次調査の結果、東西桁行3間、南北梁行2間で四面に廂の付く建物と判明した。国営調査時埋土を除去しなかった掘り方にはいずれも柱抜き取り痕が認められる。柱痕跡はしたがって明確でないが、抜き取り穴をもっておよその柱位置とすると身舎桁行間尺は西から2.2m+2.2m,梁行は北から3m+3m(中央が欠けるが柱抜き取り穴間を

等分した。)である。北廂間尺は西から3 m + ○ ^{4.4 m} ○ +2.35 m + 3 m, 西廂間尺は3 m + · · · · · であり、一尺約30cmとすると10尺の四面廂が付く。 身舎掘り方は1.1 m×1.2 m の方形で現存の深さ50cm ~ 80cm、掘り方底面 の標高は39 m 60cm ~ 39 m 90cm、東に向って低位置となる。廂の掘り方は これより規模が小さく50cm×60cm四方の方形で現存の深さは20cm ~ 40cm

(1-978) 0 10CM 第24図 SB487建物跡廂

第24図 SB487建物跡廂 掘り方出土遺物



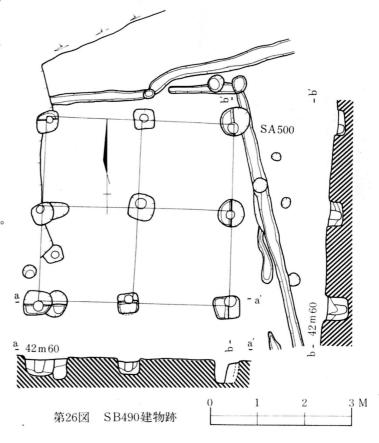
と浅く、掘り方底面標高は39m60 cm~40m30cmとやはり東に向って 低位置となる。建物方位は北桁行 が西で約170°南に振れている。

SB487出土遺物 (第24図, 図 版30の1)

北廂東隅柱掘り方から回転へラ 切り無調整の須恵器(第24図)が、また、北桁行西隅の抜き取り穴埋土から、赤褐色土器片の出土があった。

SB488建物跡(第25図, 図版 10)

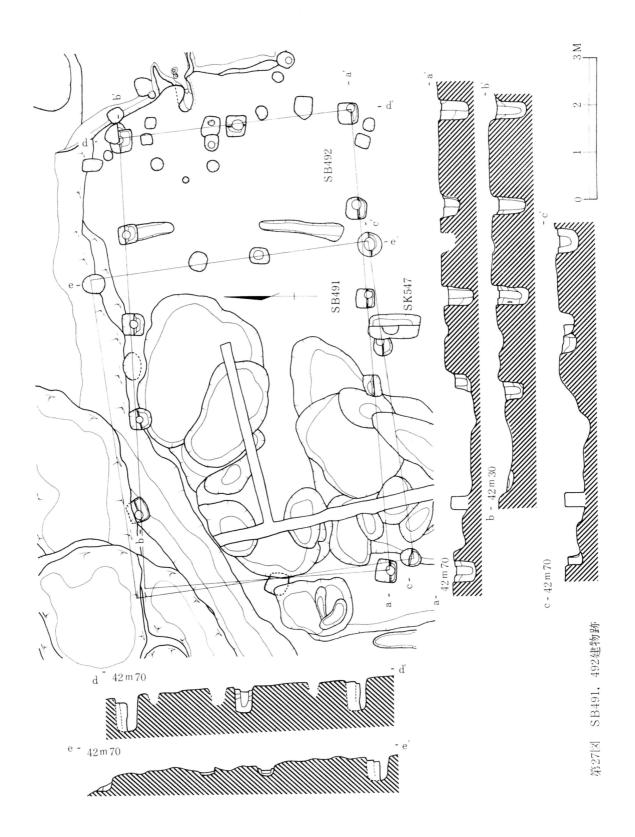
国営調査において、第一次金堂 跡とされた掘立柱建物跡である。 南半分の柱掘り方は不明であった が、正面5間、側面4間、すなわ ち、身舎桁行3間、梁行2間の東 西棟で四面廂の建物と想定されて いた。今次調査で身舎南桁行の掘



り方を検出し、前述の建物規模が再確認された。SB487建物と北側で重複しているが掘り方埋土が取り除かれており、新旧関係は不明である。国営調査の建物跡配置図によると身舎東梁行の北から2番目、東廂の北から3番目までの掘り方が示されているが、その後の畑地造成によってこれらは削平されており、今次調査では遺存する掘り方の中心に柱位置を求め、概略の間尺を測定した。北廂の間尺は国営調査で未調査の掘り方に柱抜き取り穴が認められ、この抜き取り穴位置から掘り方中心に柱位置を求めると西から○+3.9m+3.9m+○+○、身舎は北桁行で○+3.9m+○、梁行は全長で約7.8mあり、1間3.9mとすると2間分に相当する。掘り方は1.3m×1.6mの方形で現存の深さは71cm~90cm、底面標高はいずれも39m70cmで廂部分が20cm程浅い。掘り方埋土は残存しているものを観察すると比較的軟弱である。建物方位は明確でないがSB487建物跡より桁行の南への振れが約7°前後小さいようである。

SB489建物跡(第25図)

SB 487 建物跡身舎南西隅掘り方と重複し、それより新しい直径 1.2 mの不整円形の掘り方が検出した。掘り方深さは約1 m, 柱痕跡は不明であるが、この位置から約3 m南で削平による段差壁面に掘り方の一部を確認し、掘立柱建物跡と判断したものである。したがって規模など詳細について



は不明である。

SB490建物跡(第26図, 図版11)

東西 2 間、南北 2 間の総柱の掘立柱建物跡である。間尺は南柱列が西から $1.9\,\mathrm{m}+2.2\,\mathrm{m}$ 、東柱列が北から $1.8\,\mathrm{m}+2.1\,\mathrm{m}$ 、掘り方は小ぶりで $50\,\mathrm{cm}$ 四方の方形、あるいは直径 $50\,\mathrm{cm}$ の円形で深さ $20\,\mathrm{cm}\sim50\,\mathrm{cm}$ 、柱痕跡は直径 $20\,\mathrm{cm}$ の円形である。建物方位は、西柱列が、北で約 $2\,\mathrm{s}$ 東に振れている。S I 493、494住居跡、S A $500\,\mathrm{t}$ 列布掘り溝と重複し、これらより新しい。

SB491建物跡(第27図, 図版8)

桁行 5 間、梁行 2 間の東西棟の掘立柱建物跡である。間尺は桁行が西から \bigcirc + \bigcirc +2 m + 1.9 m + 2 m、梁行が北から2.5m + 2.4m、柱掘り方は小ぶりで40cm四方の方形、深さは30cm \sim 60cm、柱痕跡は直径15cm \sim 20cmの円形である。建物方位は桁行が西で約4°南に振れている。S K512 \sim 540 \pm 取り 穴群、S D 505 溝によって柱掘り方が削られており、これらより古いものである。

SB492建物跡(第27図, 図版8)

東西 3 間,南北 3 間以上の掘立柱建物跡と考えられるが西柱列,北柱列は不明である。間尺は柱痕跡の不明なものがあり明確でないが掘り方中心をとると南柱列西から $0+0+2.2\,\mathrm{m}$,東柱列北から $0.3\,\mathrm{m}+1.3\,\mathrm{m}+2.3\,\mathrm{m}$ である。掘り方は直径 $0.3\,\mathrm{m}+1.3\,\mathrm{m}+2.3\,\mathrm{m}$ である。掘り方は直径 $0.0\,\mathrm{m}$ の円形か楕円形で深さは $1.5\,\mathrm{m}-40\,\mathrm{cm}$,特に東柱列の南から $0.3\,\mathrm{m}+1.3\,\mathrm{m}+2.3\,\mathrm{m}$ である。掘り方は直径 $0.0\,\mathrm{m}$ の円形が楕円形で深さは $0.0\,\mathrm{m}$ 0. 特に東柱列が西で約 $0.0\,\mathrm{m}$ 0. 常に振れている。 $0.0\,\mathrm{m}$ 3. 常に振れている。 $0.0\,\mathrm{m}$ 4. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 4. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 5. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 6. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 7. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 6. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 7. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 7. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 7. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 8. 第 $0.0\,\mathrm{m}$ 9. 第

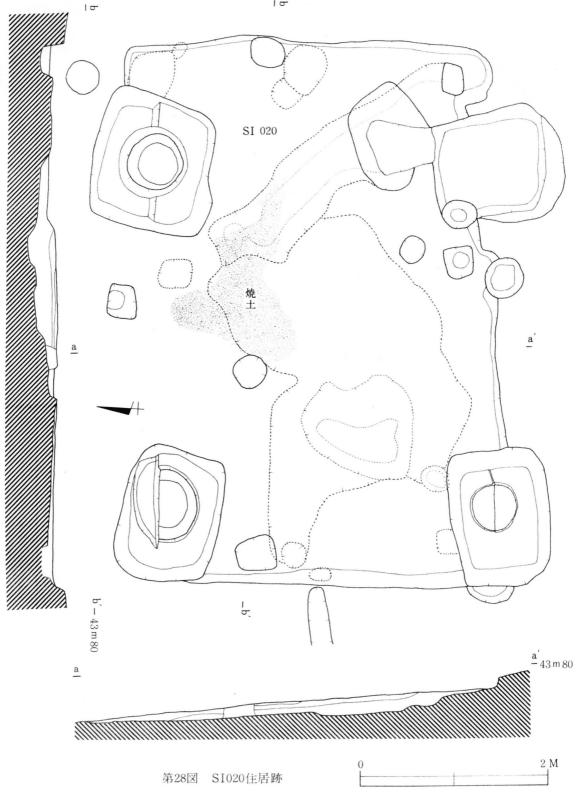
SI020住居跡(第28図,図版13)

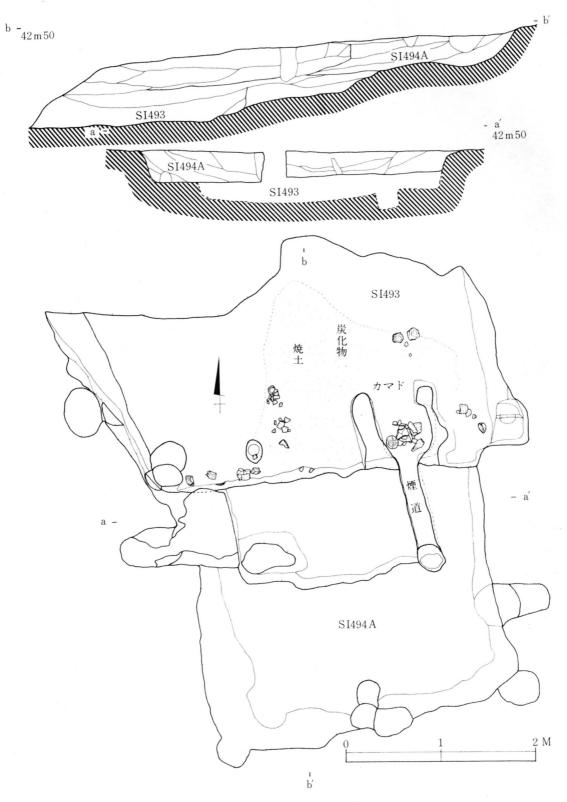
国営調査で既に検出している東西5.7m, 南北3.8mの方形の竪穴住居跡である。したがって, 埋土は取り除かれており詳細については不明である。SB018, 484建物跡柱掘り方と重複し, これより新しい。四隅及び各壁中央に柱穴が配されたものと考えられるが, 北西隅は国営調査時にSB018掘り方埋土と一緒に掘り上げられている。カマドは付設されておらず床面には地床炉と考えられる焼面が検出している。掘り込みは遺存のよい北壁で20cm~30cm, 床面は凹凸のある底面に貼り床し平坦にしている。貼り床の粘土内からは赤褐色土器片, 瓦小片が出土した。

SI493住居跡 (第29, 30図, 図版13, 14)

南壁にカマドの付設された方形の竪穴住居跡で、S I 494住居床面下層で南壁、煙道が検出されたことから同住居より古いものである。北半分は畑地造成の際、既に削平されている。南壁は約3.5 m、掘り込みは確認面から60cmである。床面にはカマド前庭部を中心に炭化物の堆積が認められ赤褐色土器、土師器が出土している。カマド(第30図、図版14)は焚口幅約50cm、奥行70cm粘土組みの袖部が残り、壁から 1.2 m 突出した幅20cm、深さ20cmの煙道が認められる。燃焼部から煙道へは特に変化もなく約10°の傾斜で煙道先端に至っている。燃焼部中央にはこぶし大の礫3個で支脚を組み、礫の上には赤褐色土器甕・坏が折り重なって出土した。柱位置は南西隅にピットを検出している







第29図 SI493, 494A住居跡

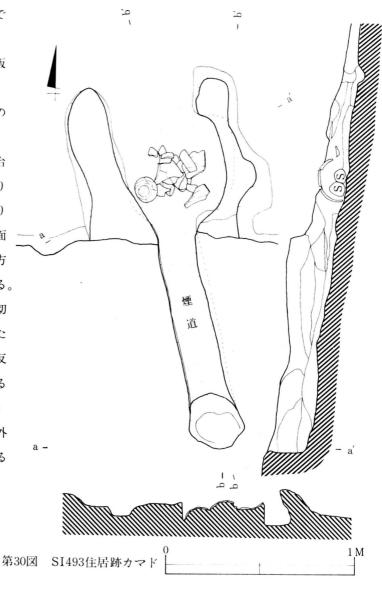
が他に組み合うものがなく不明で ある。

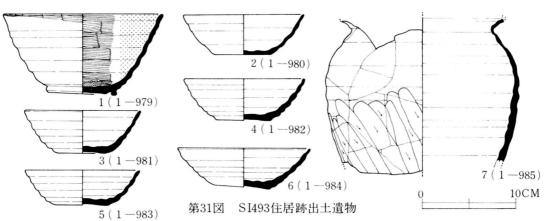
SI 493 出土遺物(第31図,図版30)

いずれも床面,カマド内からの 出土である。

土師器 1は内面黒色処理の台 付坏で低い貼り付けによって作り 出され、底部中央には回転糸切り 痕を残している。内面体部、外面 口縁に横方向、内面見込みは一方 向へのへラミガキが施されている。

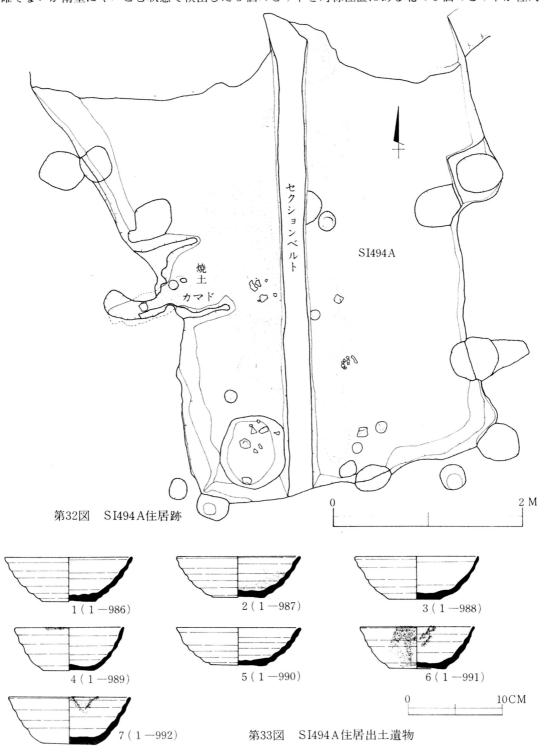
赤褐色土器 2~6は回転糸切りで調整のない坏で、赤褐色または黄褐色の色調である。7は外反した口頸部が端部で垂直に立上る 甕で体部には回転利用(ロクロ)の横位の整形痕が認められる。外面下半は手持ちヘラケズリによる 縦方向の調整が施されている。





SI494 A住居跡 (第32図, 図版13, 14)

西壁にカマドの付設された方形の竪穴住居跡である。北壁が判然としないため全体のプランが明確でないが南壁にくいこむ状態で検出した3個のピットと対称位置にある北の3個のピットが柱穴



と考えられ東西 3.2 m, 南北 3 m 前後となる。掘り込みは確認面から、30cm~40cmの深さである。床面にはカマド前庭を中心に炭化物、焼土の堆積が認められ、赤褐色土器が出土している。南西隅には直径70cmの円形、ナベ底状の貯蔵穴と考えられる土壙が確認された。カマドは焚口幅70cm、奥行60cm粘土組みで、幅30cm長さ50cm傾斜約10°の煙道がつく。燃焼部中心に暗赤色に変色した円錐状の砂質土の高まりがあり、土器を伏せて支脚として使用した痕跡と考えられた。

S I 494 A 出土遺物 (第33図, 図版30)

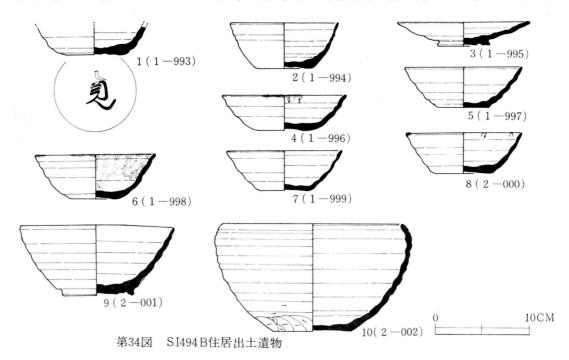
赤褐色土器 1は南西隅の貯蔵穴、4はカマド前庭部、他はすべて床面からの出土である。いずれも回転糸切りで調整のない赤褐色、黄褐色の色調の坏である。2、4、6、7の口縁、内面に煤状の炭化物が認められ、燈明皿として使用されたものと考えられる。また5の底部には「メ」のヘラ記号が認められる。

SI494B住居跡 (図版13)

SI494A住居跡廃棄後,褐色粘質土が堆積した段階で窪みを利用した生活面が確認されている。 SI494A床面上層に堆積した褐色粘質土面に焼け面,焼土炭化物の分布が観察され遺物がこの焼け 面,焼土,炭化物面に接して出土したため,ここでは明確なプランが不明であるが住居跡として把 握した。

SI494B出土遺物 (第34図, 図版30, 31)

須恵器 1は埋土からの出土である。回転糸切り、調整のない坏で、4、6、8には口縁、内面に 煤状炭化物が付着しており、燈明皿として使用されたものと考えられる。3は台付皿、9は台付坏 で台は低い貼り付けで作り出されており、底部中央には回転糸切り痕が残っている。10は回転糸



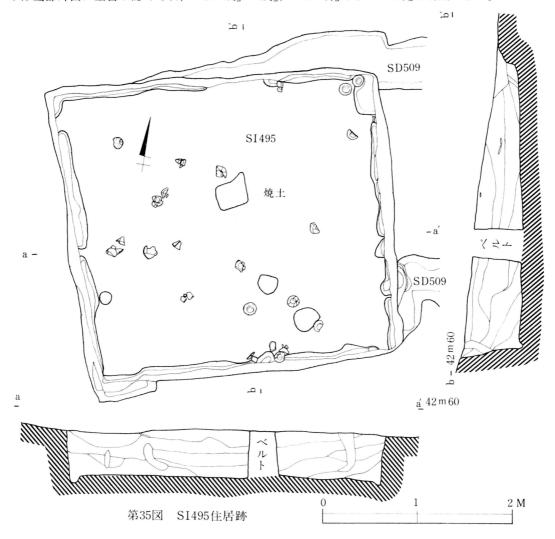
切り、口縁部が内屈する形態の鉢である。器表面には巻き上げ (輪積み)の粘土紐痕、さらに回転利用(ロクロ)の整形痕が認められる。外面下半には底部立ち上りから10cm程まで回転へラケズリ、さらにその後立ち上り部に横、斜方向の手持ちヘラケズリ調整を施している。

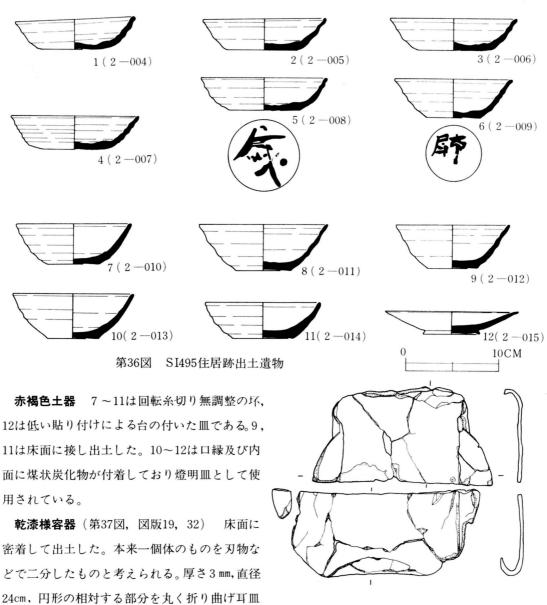
SI495住居跡(第35図, 図版15)

東西3.3m, 南北3.1mの方形の竪穴住居跡である。SD508, 509溝と重複しこれより古い。カマドは認められず、床面ほぼ中央に地床炉状の焼面が検出した。掘り込みは遺存の良い南壁で約70cm,北に漸次浅くなるが床面は平坦である。各壁直下には幅約2cm~5cmの溝が廻っているが、厚さ1cm~2cm前後の壁材の腐蝕したものと考えられた。柱穴として組み合うピット等は確認されなかった。床面及び埋土より、須恵器、赤褐色土器、乾漆様の容器が出土している。

SI 495 出土遺物 (第36図, 図版31)

須恵器 $1 \sim 6$ のいずれも回転へラ切りの坏で調整はない。 $1 \sim 5$ は床面に接して出土した。 5 、 6 は底部外面に墨書が認められ、 5 は「成」か「戌」、 6 は「尉」あるいは「師」と判読できる。





密着して出土した。本来一個体のものを刃物な どで二分したものと考えられる。厚さ3 mm,直径 24cm, 円形の相対する部分を丸く折り曲げ耳皿 のように内湾させ、さらにこれに直交する両側を, 一旦、内に折りさらにもう一度外に折り曲げる か,あるいは直立させ、折敷状の容器として使

用したものと考えられる。表面は褐色の色調で漆膜がなく皮製品とも考えられたが、器表面の剝落 した個所に布目が認められることから乾漆と推測された。ただ成分の分析を行っておらず、明確で

第37図 SI495住居跡出土乾漆様容器

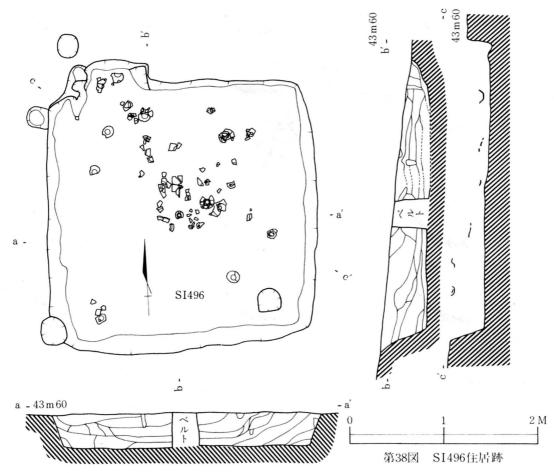
10CM

(2-003)

SI496住居跡 (第38図, 図版16)

ない。

東西2.8m、南北2.8mの方形の竪穴住居跡である。北西隅の一部が突出しているが、カマドは付 設されておらず、床面にも地床炉状の焼面などの痕跡はない。掘り込みは遺存の良い北壁で45cm,



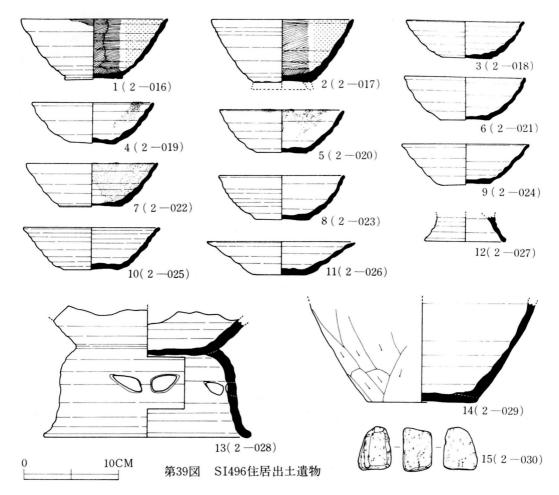
漸次、南に浅くなるが床面は平坦である。柱穴として組み合うピット等は検出していない。遺物は すべて埋土から、北西方向に流れ込んだ状態で出土した。

SI496 出土遺物 (第39図, 図版32)

土師器 1,2は内面黒色処理のある坏である。1は回転糸切り後,貼り付けによって低い台をつくっている。ミガキは口縁部外面まで行い,内面体部,外面口縁部は横方向,内面見込みは一定方向のミガキの後,更に6角形を描くようにミガキを施している。2は内面のみにミガキを行い,体部は横方向,底部は放射状のミガキを施している。台は剝落して明確でないが貼り付けによるものと考えられ,底部中央はナデつけによって切り離しが不明である。

須恵器 3は回転糸切りで調整のない坏である。口縁部に重ね焼き痕跡と考えられる色調の違いが認められる。器形的には4~8の赤褐色土器に類似している。

赤褐色土器 4~11はいずれも回転糸切りで調整のない坏で9~11は口径の大きい、体部の開く器形である。4~7は口縁及び内面に煤状の炭化物が付着し、特に4は燈心状の痕跡が認められ、燈明皿として使用されたものと考えられる。12は台付坏、あるいは皿の台部である。13は三方に眼状の透しのある台付鉢の台部で、全体に磨滅が著るしい。14は底部下半に粗い手持ちヘラケズリのあ



る甕で内面にはロクロ(回転台)による整形痕が認められる。

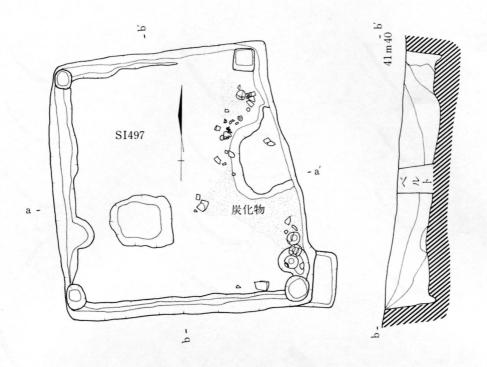
石製品 15は軽石を6面に面取りしているが用途不明である。

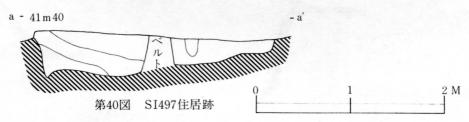
SI497住居跡(第40図, 図版17)

東西2.6 m, 南北2.7 mの方形の竪穴住居跡であるが、北壁が短く、2.4 mのやや台形状になる。掘り込みは35cm~45cm、カマドは付設されておらず焼面などの地床炉の痕跡もない。床面は平坦であるが東壁にテラス状の20cm~30cmの高まりが認められる。柱穴は四隅に直径20cmの円形あるいは1辺20cmの方形で深さ20cmのピットが検出している。東壁を除く各壁の直下には幅10cm、深さ5cm~10cmの溝が認められるが、SI 495住居同様壁材の痕跡と考えられた。東壁周辺を中心に炭化物が堆積し赤褐色土器が出土している。床面中央から南西よりの個所に鍋底状深さ20cmの貯蔵穴と考えられる土壙が検出している。

SI497 出土遺物 (第41回, 図版33)

須恵器 5は回転糸切り無調整の坏で底部外面に判読不能の墨書が認められる。6は台付坏で回 転糸切り後低い台を貼り付け周辺をナデている。

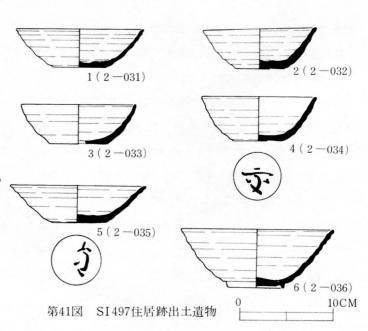


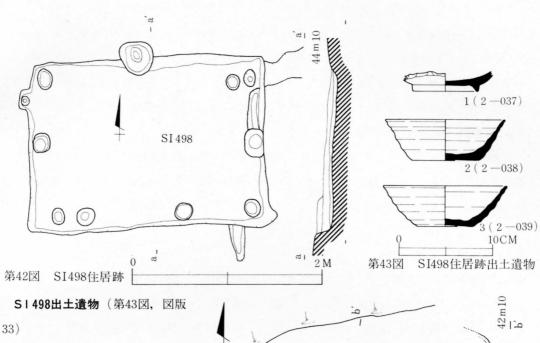


赤褐色土器 1~4は回転糸切り無調整の坏である。4は底部外面に「灾」(災の異体字)と考えられる墨書が認められる。

SI498住居跡(第42図, 図版 17)

東西 2.6 m, 南北 1.8 m の小ぶりな方形の竪穴住居跡である。掘り方は15cm~20cmときわめて浅い。各壁に沿って柱穴と考えられるピットが検出している。カマド及び焼面は確認されなかった。SA 503 柱列布掘りと重複し、これより新しい。



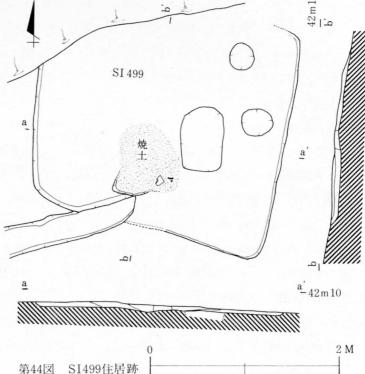


灰釉陶器 1は境の台部破片である。体部下半から底部全体に回転へラケズリを行い、その後、台を貼りつけ周辺をナデている。施釉は内面にのみ認められ見込みには重ね焼き痕と考えられる円形の露胎部がある。

須恵器 2は回転糸切り無調整 の坏である。

赤褐色土器 3は回転糸切り無調整の坏で口縁部には煤状の炭化物が付着しており燈明皿として使用されている。

SI499住居跡 (第44図)



北壁を中心に北東、北西コーナー部が削平されており全体の規模は不明である。南壁は 2.7 m、壁は全体に既に削平され、深さも10cm程である。柱穴、カマドは検出していないが、床面にて直径 1 mのほぼ円形の範囲に焼土及び炭化物が認められた。

SA500柱列 (第19図, 図版18)

南北21mの長さで北で西に屈折している柱列で走行方向は北で西に約13°振れている。幅20cm~30 cm, 深さ20cm~40cm, 北で漸次浅くなる布掘りの溝底面に直径15cm~20cm, 深さ30cm~40cmの円形,

または楕円形の柱穴と考えられるピットが認められる。各柱間の間隔は南から1.5m+3m+2.4m+2.3m+6m+4m+2.2m,北で西に屈折して2mの位置にこれに連続すると考えられるピットが検出している。第25次調査でも同様のSA407柱列が検出しており走行方向はこれとほぼ直交するものである。SB490建物跡,SI493住居跡と重複しこれより古い遺構である。

SA501柱列(第19図,図版18)

SA500柱列とほぼ平行し、方位は北で西に約 10° 振れている。北で同柱列と重複し、これより古い遺構と考えられる。やはり幅20cm ~ 30 cm、深さ20cm ~ 40 cm北で漸次浅くなる布掘りの溝底面に同規模の円形あるいは楕円形の柱穴が配されている。各柱穴間の間隔は南から1.2 m + 2 m + 2 m + 4 m である。

SA502柱列 (第19図, 図版7)

東西約35mの範囲で検出しており、さらに東方向に伸びている。走行方向は西で約10°南に振れておる。 S A 500 柱列とほぼ直角の位置となる。一部で削平されているが幅20cm~30cm、深さ20cm~30 cmの布掘りの溝で底面に直径20cm~30cm、深さ20cm~40cmの円形の柱穴と考えられるピットが認められる。各柱穴間の間隔は東から2.2m+1.8m+2m+2.2m+5.4m+2m+2.4m+2m+2m+1.8m+8m+1.5mとなる。8mの間隔個所はSB019建物との重複部分で本来、更に2本の柱穴が存在していたものと考えられるが国営調査時に除去されている。5.4mの間隔個所は他遺構との重複もなく、もともと柱穴がなかったものと考えられ、この個所に開口部を想定することができる。SB019 建物跡と重複し、これより新しい遺構である。

SA503柱列 (第19図, 図版18)

南北約13mの範囲で検出した。北で一旦途切れ、東に屈折しているようであるが、東に屈折した部分には柱穴と考えられるピットが確認されず、あるいはこの部分は性格の異なる可能性もある。布掘り、柱穴の規模は前述の柱穴とほぼ同じで柱穴間の間隔は、南から1.5m+2.1m+0.7m+1.5m+2mとなる。SD504溝、SI498住居跡と重複し、これらより古い遺構である。

S D 414 溝 (第19図)

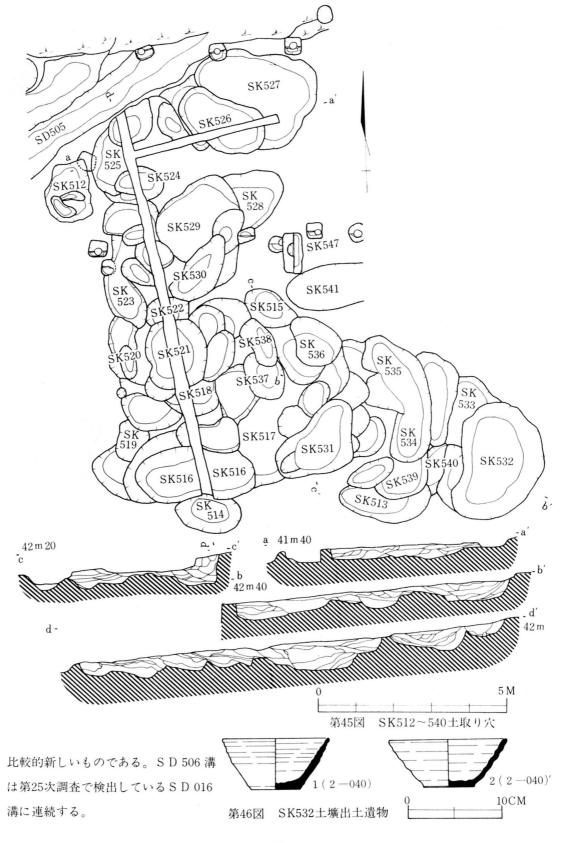
既に第25次調査で検出している南北に走る溝で、本次調査ではその南延長が検出した。幅30cm、深さ40cm、走行方向は北で西に約17°振れている。第25次調査では東に屈折していることが判明している。SD506溝と重複し、これより古い遺構である。

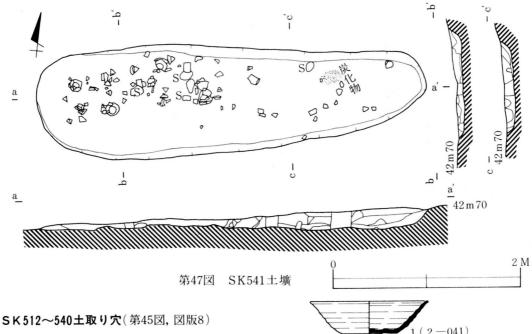
S D 504 溝 (第19図, 図版18)

幅30cm,深さ10cm~20cm,西で南に約20°振れる走行方向で調査区西端付近で南に直角に屈折している。屈折部分底面にピットが検出しているが連続するものが認められず溝と判断した。更に東に伸びるものと考えられるが、耕作による削平あるいはSK512~540土取り穴によって消失している。

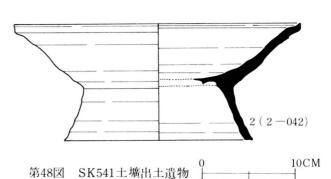
SD505~511溝(第19図)

いずれも耕作あるいは畑地造成などのため掘り込まれた溝と判断された。黒褐色土を埋土とする





調査区西半中央部で、第2層を除去し たローム面にて検出した。各々重複が認 められ、30基以上の遺構を確認した。い ずれも平面形、深さは異なり不整形を呈 し, 画一性は認められない。遺構状況及 び埋土等からして時期差はほとんどない ものと考えられ、短期間の作業工程によ る切り合いと考えられる。埋土は暗褐色



土, 黄褐色土, 黒色土, 黄褐色粘土が主で, 炭化物が部分的に混入する。

埋土状態からして、SK525土壙つまり北側が古く、SK514土壙つまり南側の方が新しい。北側 の方ではSK527土壙よりSK525土壙の方が新しく、南側の方ではSK537土壙よりSK532土壙の 方が新しいと考えられる。なお、SK512土壙も同一性格のものであるが重複しない。

埋土内より土師器 坏・甕, 須恵器 坏・壺, 赤褐色土器 坏, 瓦等が出土したが, SK532 土 壙出土 の赤褐色土器坏以外は小破片であり図示しえなかった。

SK532 土壙出土遺物 (第46図, 図版33)

赤褐色土器 1,2いずれも底部切り離し回転糸切り,無調整の坏である。内面は赤褐色を呈し, 外面は1が赤褐色、2が煤状または油煙状の炭化物が付着し全体に汚れている。胎土、焼成は共に 良好である。

SK541 土壙 (第47図, 図版19)

調査区西半中央部で、第2層を除去したローム面にて検出した。平面形は東西方向に長楕円形を

呈し、長軸約4.15m,短軸約90cm ~ 1.1m,深さ約10cm~20cmを計り、底面にはやや凹凸がみられ、壁はゆるく立ち上がる。埋土は暗褐色土、暗黄褐色土が主で、炭化物、炭化材、上層の一部にやや多く他は少量であるが焼土が混入し、ロームブロックも認められた。多量の土器片と共に握りこぶし大の礫も認められた。

SK541 土壙出土遺物 (第48図, 図版33)

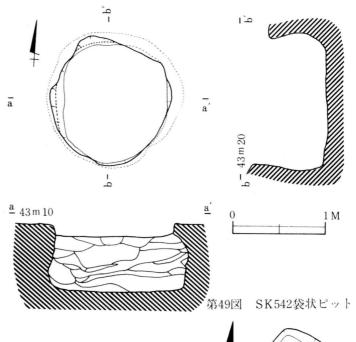
いずれも埋土下層(ほぼ壙底) からの出土である。

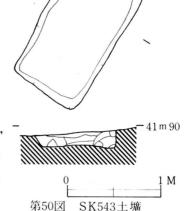
須恵器 1は底部切り離し回転糸切り,無調整の坏である。口縁 部がやや外反し,器肉が薄く,焼成良好であるが,胎土に小石粒が 目立つ。

赤褐色土器 2は高台をもつ鉢である。鉢部と高台を接合しロクロ整形を施す。赤褐色を呈し、胎土に砂粒、小石粒がやや多く混入し、やや軟質である。

SK542 袋状ピット (第49図, 図版19)

調査区中央部西側で検出した。平面形はほぼ円形を呈するが、調査中に一部崩落した。壙口部径約1.2m~1.3m, 壙底部径約1.45m, 深さ約70cmを計り、壙底は平坦で、壁はゆるく立ち上がり中程が張り出し、壙口部付近で部分的に垂直に立ち上がる。埋土は暗黄褐色土、黄褐色土が主で、部分的に炭化物が認められる。また埋土の中



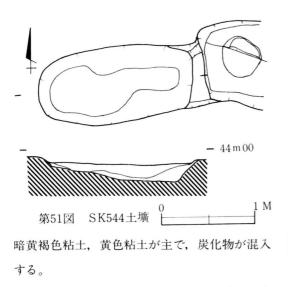


程に中心部より径約90cm位の範囲で厚さ約5cmの粘土の層が認められたが、埋土の一部なのか意識的に敷き固めたのかは判然としない。

遺物は縄文のみの施文をもつ土器小破片が埋土内より数点出土した。本調査区の北側である第25 次調査地のSK424土壙より弥生式土器が出土しており、類似するとも考えられる。

SK543 土壙 (第50図)

調査区西側で検出し、長軸方向が北東、南西方向を指す。長軸約2.1m, 短軸約86cm, 深さ約1.4 m~1.8 mを計り、平面形はほぼ長方形を呈し、壙底の中程がやや盛り上がる。埋土は黄褐色土、



遺物は赤褐色土器坏が出土したが小破片であり図示しえなかった。

40 m 80 0 1 M

第52図 SK545土壙

SK544 土壙 (第51図)

調査区西半南側で検出し、長軸方向は東西方向を指す。長軸約1.65m,短軸約80cm、深さ約10cm~20cmを計り、平面形は隅丸長方形を呈し、壙底はゆるやかな斜面をなす。埋土は上層が多量に焼土、炭化物の混入する褐色土で、他は黄白色粘土、褐色土、褐色粘土が堆積する。出土遺物はない。

SK545 土壙 (第52図)

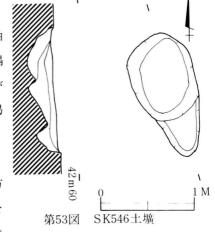
調査区南半中央部で検出し、SD510溝を切っている。長軸方向は南北を指し、長軸約2.2m、短軸約1m、深さ約25cm~45cmを計り、平面形は一部張り出しのある隅丸長方形を呈する。 壙底は平坦であるが、南側と北側にピットを検出した。出土遺物はない。

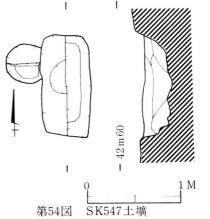
SK546 土壙 (第53図)

調査区西側で検出した。長軸約1.3 m, 短軸約60cm~70cmを計り, 平面形は卵形を呈し, 壙底は凹凸が激しい。埋土は暗褐色土, 褐色土が堆積する。出土遺物はない。

SK547 土壙 (第54図)

調査区西半中央部で検出し、長軸方向は南北方向を指す。長軸約1.05m,短軸約55cm,深さ約35cmを計り、平面形は不整長方形を呈する。埋土は暗褐色土、炭化物混りの黄褐色土、暗黄褐色土が堆積する。SB491建物跡を切っている。出土遺物はない。





SK548 土壙 (第55図)

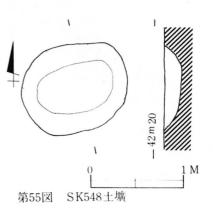
調査区中央部, SI495住居跡北側で検出した。径約95cm~1.1 mの楕円形を呈し, 深さ約15cmを計る。埋土は黄褐色土が堆積する。出土遺物はない。

SK549 土壙 (第19図)

調査区西側で検出した。プランは不整形を呈する。

遺物は瓦片が少量出土した。

3) ま と め



第30次調査の目的であった国営調査で検出した第一次・第二次金堂跡、経蔵、または鐘楼跡と呼ばれる掘立柱建物跡の再調査で、その位置、規模、構造、変遷について明らかになった調査結果をここにまとめてみると、まず、第一次金堂跡と呼ばれていたSB 488 建物跡については身舎桁行3間、梁行2間、四面廂の掘立柱建物で掘り方中心に柱位置を求めると身舎桁行、梁行、廂ともに1間約3.9mの荘大な建物であったことが再確認された。また、新旧関係は不明であるが、このSB488建物跡に重複し、その北に位置するSB 487 建物跡が新たに検出し、身舎桁行3間(1間約2.2m)、梁行2間(1間約3m)のやはり四面廂の掘立柱建物であることが確認された。両建物の遺存する掘り方埋土を観察するといずれも柱抜き取り穴が確認された。建物規模としてはSB 488 建物跡が廂の掘り方、身舎の掘り方、間尺などSB 487 建物跡より規模の大きい建物で、建物方位も真北に対し、後者が約17°西に振れ、前者が柱位置が明確でないが約7°程振れが小さい10°前後の振れと推定された。

第二次金堂跡と呼ばれていた東西棟建物跡は北廂と身舎の掘り方、柱痕跡埋土の精査の結果、身舎桁行5間、梁行3間の南北廂のSB018建物の時期とその後の同一地点での建て替えで北廂を欠く、南廂だけ、あるいは身舎だけのSB484建物の時期のあることが判明した。

鐘楼,あるいは経蔵跡と呼ばれていた身舎桁行3間,梁行2間の総柱,南北棟の建物跡にも同様の建て替えが認められ古い時期の建物に西廂が付き,新しい時期の建物は廂を欠くことが確認された。前者をSB485建物,後者をSB019建物としたが,廂には更に建て替えが認められ両者を合わせ少なくとも三回以上の建て替えが考えられた。

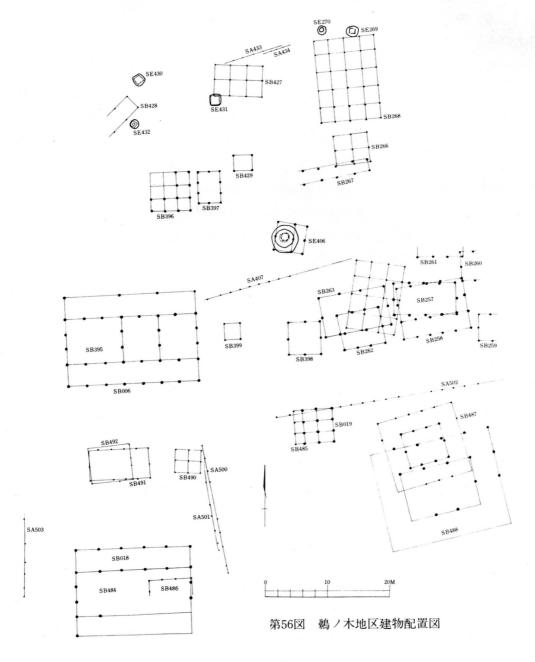
SB018, 484, 019, 485建物跡の建物方位は第25次調査検出のSB006 (東西棟桁行7間, 梁行3間の身舎に南北廂)395 (SB006と同一地点での建て替え,同一規模の身舎で廂を欠く),建物方位とほぼ一致し,真北に対し,約3~5°西に振れている。

以上のように建物方位の一致,同一地点での建て替え,しかも古い時期に廂が付き,新しい時期は身舎だけになる点,また,最も新しい時期の柱痕跡埋土に多量の焼土,炭化物が認められる点などSB018,485,006建物跡,SB484,019,395建物跡にそれぞれ3棟毎に共通性があるものと考えられ、同一時期の建物と推定される。

この3棟の建物位置の関係については、昨年度概報でも国営調査の記述、遺構配置図をもとにそ

の概略について述べたが、ここでは今次調査、第25次調査結果から再度その数値についてふれてみる。ただ今後、さらに周辺の調査が進展し建物の性格等に関する究明がなされた時点で厳密な数値を示すことにし、ここではその概略であることをことわっておきたい。

まず、SB018北廂からSB006南廂の間隔は約26.5mで、SB018の建物の南北中軸線はSB006のそれから西に約1.2mずれている。またSB018の建物の南北中軸線上、北廂から約18mの地点にSB019の建物の東西中軸線が一致し、SB019の西廂まで約26.5mである。このことから、この建物配置については計画的な配置が考えられた。



また、別の調査目的であった、他の遺構、遺物の有無については、遺物は省略するが、遺構としてはSA500、501、502、503柱列、7棟の竪穴住居跡、3棟の小ぶりな掘り方の掘立柱建物が検出している。柱列はいずれも、幅30cmの布掘りの溝に直径20cm~30cmの柱穴の認められるもので、重複関係から前述の6棟の大規模な掘立柱建物より新しく、SI493竪穴住居より古い時期と考えられる。機能としては板塀状の区画施設と推定され、走行方向が真北、真西に対し約10°の振れをもつSA501、502柱列と、同じく約13~15°と振れのやや大きいSA500柱列と第25次調査検出のSA407柱列がある。この柱列方位に対応し、約10°の振れのSB488建物、第18次調査検出のSB263、258建物が10°30′、一方ややそれより振れの大きい建物としてSB487建物が約17°、第18次調査ではSB263建物が12°となっており、東側の建物にも振れの10°前後のグループと、それよりやや振れの大きいグループが存在しており、前述の柱列がこれら東側の建物(10°以上の建物方位の振れのある)に関連する遺構と考えられる。

V 第 31 次 発 掘 調 査

1)調査経過

第31次調査は、現状変更許可申請にともなう事前緊急調査として7月29日から8月12日までの期間で実施され、発掘面積は約102 m²(31坪)である。調査地は寺内字大畑68番地護国神社境内に所在する護国会館北東部に隣接する標高約48mの平坦地に位置しており、北側は空素沼方向すなわち

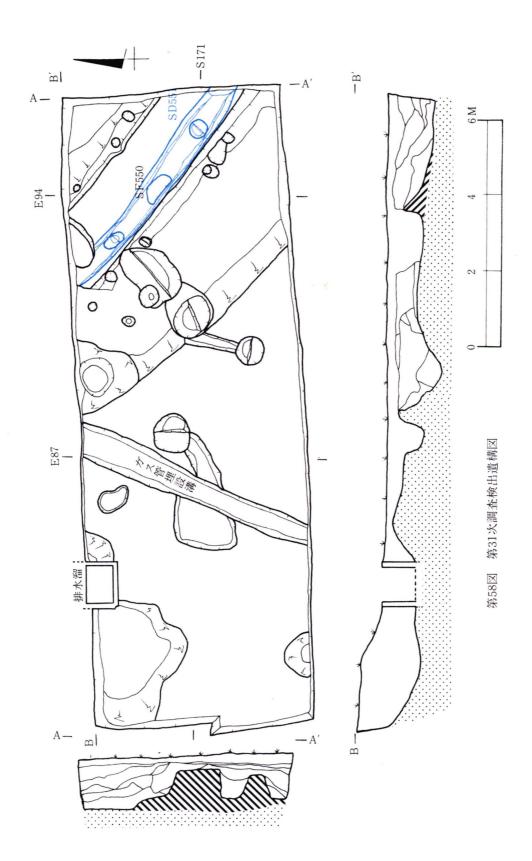
量基準点No.10より原点を移動し、X=+99.359 m, Y=+171.976 m, H=48.688 m に発掘 基準点を設定し、南北6 m×東西12mのトレ ンチを設定して行った。

南東方向に入り込む谷である。調査作業は測

トレンチ西側部分では深いところで約60cm, 平均して約40cmほどで地山砂層にいたり,攪 乱のゴミ捨て穴,ガス管埋設溝,下水管等が 検出されたが,遺物包含層は検出されなかっ た。一方,東側部分では地山砂層が北東方向 に傾斜しており,上部には粘質土の堆積層が 検出され,さらに北東隅に赤褐色粘質土が積 土状に検出された(7月29日~8月1日)。 北東隅部分での赤褐色粘質土検出により,東



側部分の遺構存在の確認のため約7mほどトレンチを東側に拡張した(8月2日)。その結果、粘質 土の堆積層は築地崩壊土であることが判明し、さらに赤褐色粘質土は南東方向に走る築地であるこ



と, さらに築地崩壊後に築地上を溝が走っていることが確認された。平面実測, レベル測定終了後, 全景写真, 遺構個別写真撮影を行い調査を終了した(8月4日~12日)。

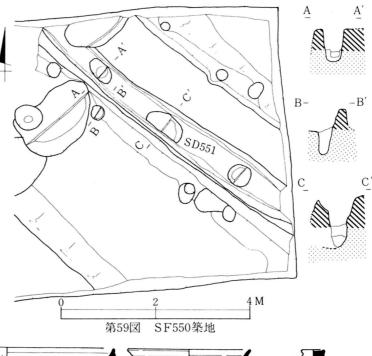
2) 検出遺構と出土遺物

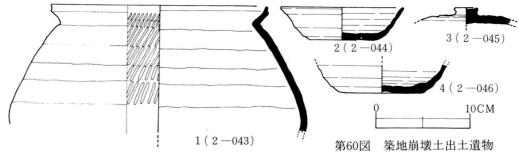
SF550築地(第58,59図,図版20)

築地は北に対して西に約45°偏して南東方向に走っている。繩文期の包含層と考えられる黒褐色砂質土を削平して構築されている。検出された築地の規模は、基底幅約2m,全長約7mを計り、現存する積土は高さ約40cm~50cmで、赤褐色粘質土と黒色粘質土で版築が施されている。北側より約5mの部分で積手の相違が確認され、この部分から南側は黄色粘質土と黄白色粘質土により版築が施されている。

築地の基底幅よりやや幅広く赤褐色粘質土を幅約40cm,高さ約30cmの厚さで土盛りしており、当初、大走り状の施設と考えられたが、この面では寄柱等の掘り方は一個しか検出されなかった。掘り方等の検出を目的として、赤褐色粘質土面を掘り下げた。その結果、寄柱または築地構築時の工事用柱と考えられる柱穴が、八個検出された。そのうち東側の北面と南面に一対の寄柱と考えられる

柱穴が検出された。掘り方の直径は約20cm,確認面よりの深さは約20cmを計る。地山砂層面を掘り込み,埋土は赤褐色粘質土と褐色砂である。柱の間尺は心々で約2.3 mを計る。他の六個は間隔が不規則である。築地崩壊土中からは,須惠器坏・蓋,赤褐色土器甕・坏小破片,瓦小破片等が出土している。





築地崩壊土内出土遺物

須恵器 (第60図, 図版34)

坏: 2 は底部切り離しが回転糸切り、4 は回転ヘラ切りであり、いずれも無調整である。色調は 灰白色を呈し、焼成良好である。

蓋:3は暗灰青色を呈し、焼成は良好である。切り離しは不明である。偏平な鈕をもつ。

赤褐色土器 (第60図1, 図版34)

甕:内面には輪積み痕跡とロクロ目痕がみられる。一方外面には頸部より下方に輪積み後、叩きによって整形した痕跡がみられる。赤橙色を呈し、焼成は良好である。

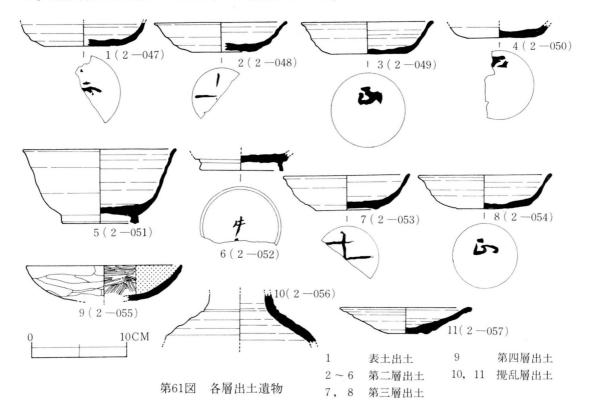
SD551 溝状遺構 (第59図, 図版20)

築地本体を切って築地上を走り、断面が「U」字形を呈する溝である。幅約60cm、深さ約60cmを計る。埋土は褐色粘質土、砂混りの褐色土である。溝底部には直径約30cm~40cm、深さ約15cm~20cmを計る掘り方が検出され、とくに北側の掘り方からは柱痕跡が認められた。埋土は赤褐色粘質土である。出土遺物は検出されなかった。

3) 各層位出土遺物

表土層出土遺物 (第61図, 図版34)

須恵器坏: 1は回転へラ切りによる坏で、再調整はない。底部からの立ち上がりはゆるやかである。底部外面には墨書がみられるものの判読不明である。



第二層暗黃褐色砂出土遺物 (第61,62回3,回版34,35)

須恵器坏:2は回転糸切り,3,4は回転ヘラ切りによる坏で,いずれも再調整はない。2はやや外反ぎみに立ち上がる器形で,色調は灰青色を呈し焼成良好である。底部外面には墨書がみられ,「井」か「廿」と判読される。3は底部外面に「正」と判読できる墨書がみられ,色調は灰青色を呈し焼成は良好である。4は底部外面に墨書がみられる。色調は灰白色を呈し,焼成は良好である。

須恵器台付环:5は回転糸切りによる台付坏で、台を貼り付けた後、台の内外周縁にナデを施している。色調は暗灰青色を呈し、焼成は良好で、内部底面に焼きぶくれがみられる。6は回転へラ切り後、底部外面中央部から周縁までヘラケズリを施し、台を貼り付けた後に内・外部にナデを施している。底部外面には墨書が認められる。「牛□」と判読できる。

瓦:3は一枚作りによる平瓦で、灰青色を呈し、硬質である。

第三層暗褐色砂質土出土遺物 (第61, 62図4, 図版34, 35)

須恵器坏: 7は回転糸切り、8は回転ヘラ切りで、いずれも再調整はない。底部からの立ち上がりは、いずれも丸みをもって立ち上がる。7は「井」か「廿」の墨書、8は「正」の墨書が認められる。

瓦:4は一枚作りによる平瓦で、灰青色を呈し、硬質である。

第四層褐色砂混り黄白色砂出土遺物 (第61図, 図版35)

土師器坏:9はロクロ未使用,内面黒色処理の丸底坏である。外面は口縁部から底部にかけて横方向のヘラケズリ,内面は口縁部から3cmほどまでは横方向のヘラミガキ,下半部は放射状のヘラミガキが認められる。

黄白色砂上面攪乱層出土遺物 (第61図, 図版35)

須恵器長頸壺:10は頸部から肩にかけての破片である。外面には輪積み(巻き上げ)後、肩から

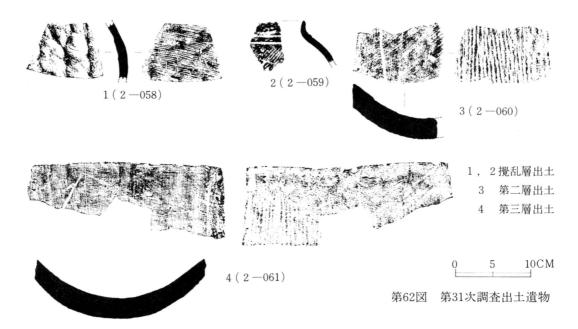


表7 墨 書 土 器

番	号	器		種		切り離し(調整)			墨書部位				出土層遺構			墨	書	銘	
1 (2-	-047)	須	恵	器	坏	回転	· ^	ラり	り り	底	部	外	面				不明		
2 (2-	-048)	須	恵	器	坏	回車	云糸	长 切	ŋ	底	部	外	面	第	$\ddot{-}$	層	「井」か	Г - #Т	
3 (2-	-049)	須	恵	器	坏	回転	· ^	ラり	切り	底	部	外	面	第	<u>-</u>	層	LE7		
4 (2-	-050)	須	恵	器	坏	回転	. ^	ラり	りり りょうしょうしょう かんりょう かんりょう かんりょう かんりょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう かんしゅう かんしゅう しゅうしゅう しゅうしゃ しゃ し	底	部	外	面	第	$\ddot{-}$	層	不明		
6 (2-	-052)	須	恵器	台东	计 坏	回転	ラク	ラヴィズリ	リり リ)	底	部	外	面	第	=	層	「牛口」		
7 (2-	-053)	須	恵	器	坏	回車	云为	长 切	ŋ	底	部	外	面	第	三	層	「井」か	L#7	
8 (2-	-054)	須	恵	器	坏	回転	<u>`</u> ^	ラり	ற ற	底	部	外	面	第	三	層	「正」		

上に横方向のヘラケズリを施しているが明確でない。また頸部に一段の凸部を形成している。一方 内面の頸部から肩の部分に、頸部と体部の接合部にタテ方向のナデがみられる。

赤褐色土器皿:11は回転糸切りで、再調整はない。底部が口径にくらべて極端に小さく、また器 高が浅い。口縁部が外反し皿状を呈している。体部外面には輪積み(巻き上げ)痕がみられる。

その他の遺物 (第62図, 図版35)

中世陶器: 1 は甕体部破片である。硬質で内外面とも暗褐色を呈する。胎土中にはきめの細かい砂粒を含む。外面には 3 cm 当り13本の密で浅く、やや右下りの条線状平行叩き板痕、また内面には長径約 3 cmの楕円形のアテ具痕をとどめている。

弥生式土器: 2は口縁部から体部にかけての破片である。外面はLR繩文を地文としているが、 頸部から口縁部にかけては無文である。頸部には二本の平行沈線を施している。口唇部には撚糸に よる圧痕がみられる。内面は横方向のミガキを施している。

4) ま と め

第31次調査によって検出された築地・溝状遺構は,護国会館北東部の舌状台地東側付け根部分に位置し,南東方向に入り込む谷と同方向に走り,築地崩壊後に崩壊土の高まりを利用して溝状遺構を構築していることが判明した。さらに,これまでの調査で確認された外郭線を構成する築地,溝状遺構とほぼ同様の遺構であることが確認された。

西から走る秋田城外郭築地は護国神社本殿の北東部でほぼ北に直角に折れ曲がり、幣切山に至る と想定されている。

今回の調査で検出された築地および溝状遺構は、秋田城の外郭想定線とはまったく異なる場所に 位置している。

今回の調査によって築地および溝状遺構が検出されたことにより、新たにその性格の究明が今後 の課題となった。





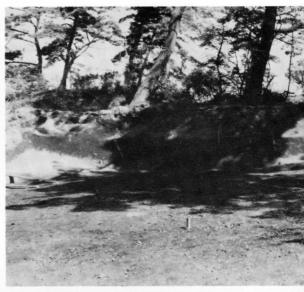


図版 2 第28次調査

上 北部地区全景(南から)

下 南部地区全景(北から)







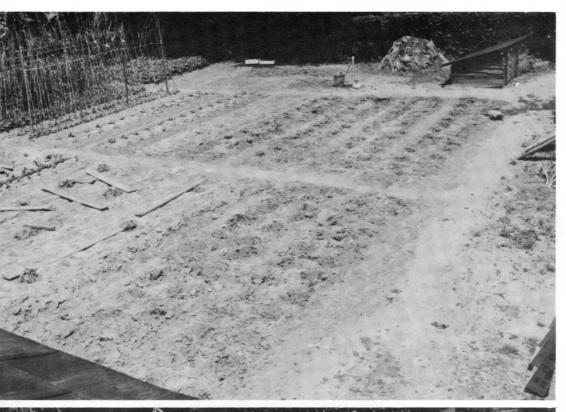


上 左 東壁土層断面 右 北壁土層断面

中 SK479土取り

図版 3

下 SX478遺物 出土状況





 図版 4
 第29次調査
 上
 調査前(南東から)

 下
 全
 景(南から)



第二トレンチ 築地,崩壊瓦 (南から)



図版5 崩壊瓦(東から)



SF481築地 SD483溝状遺構 (東から)





図版 6 上 第二トレンチ築地,崩壊瓦 下 第二トレンチ築地崩壊土除去,トレンチ





図版7 第30次調査 上 全景(東から)

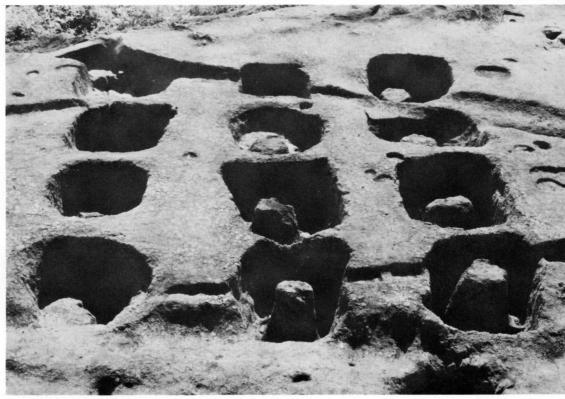
下 東半部全景 (西から) 手前がSB019,485建物跡





図版 8 上 西半部全景(北から) 下 SB018, 484, 486建物跡(北から)





図版9 上 SB019, 485建物跡(東から) 下 SB019, 485建物跡(北から)





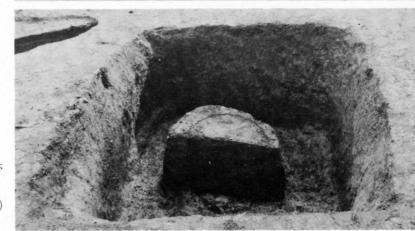
図版10 上 SB486建物跡(北から) 下 SB487,488建物跡(北から)



SB490建物跡 (南から)



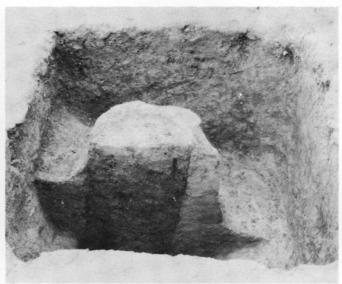
SB018建物跡 柱痕 (北から)



SB018建物跡 掘り方断面 (西から)

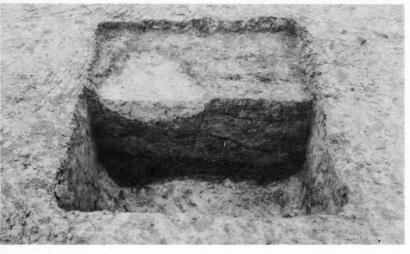
図版11





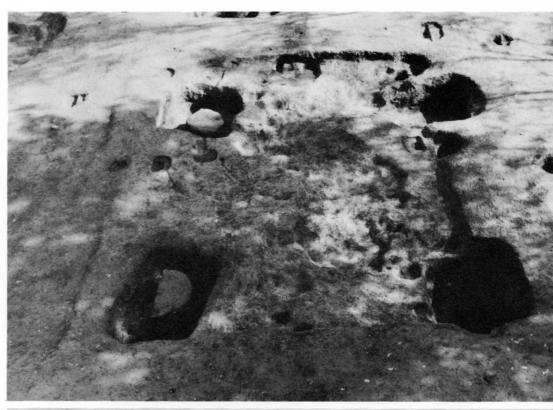
左,右 SB484建物跡 掘り方断面 (北から)

SB487建物跡 柱掘り方(抜き取り穴)断面 (北から)



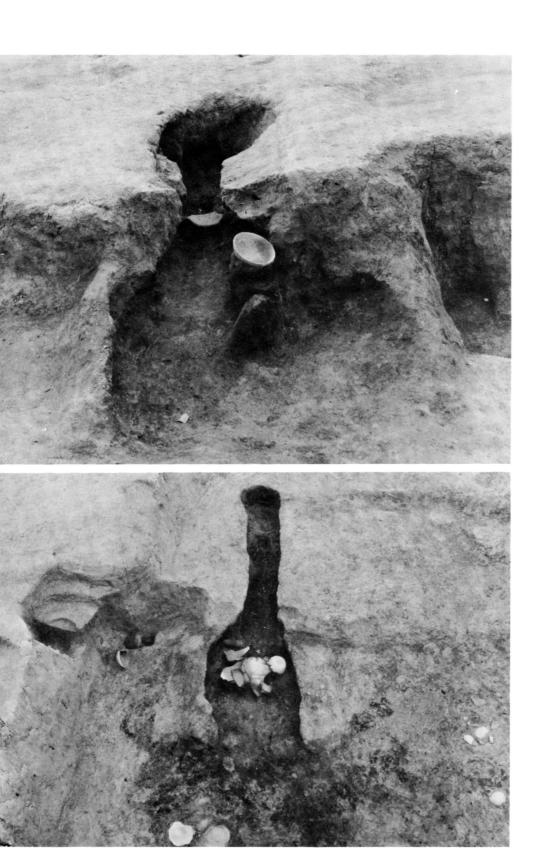
SB487建物跡 柱掘り方(抜き取り穴)断面 (北から)

図版12





図版13 上 SI020住居跡(西から) 下 SI493, 494住居跡(北から)

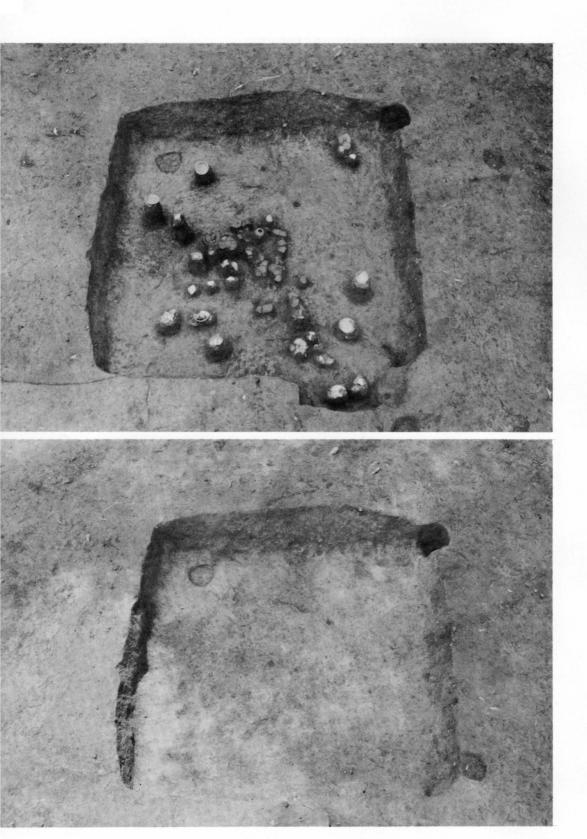


図版14 上 SI494A住居跡カマド下 SI493住居跡カマド



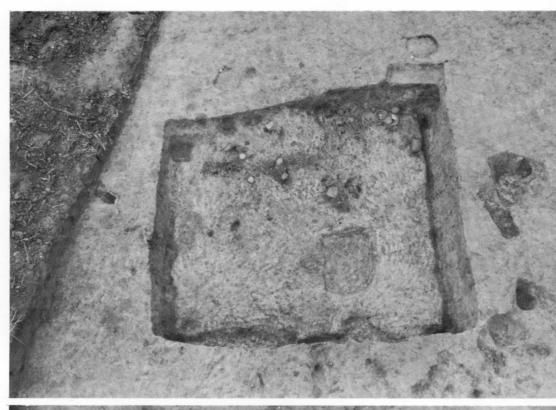


図版15 上 SI495住居跡,埋土遺物出土状況(北から) 下 SI495住居跡



図版16 上 SI496住居跡,埋土遺物出土状況(北から)

下 SI496住居跡 (北から)





図版17 上 SI497住居跡(西から) 下 SI498住居跡(北から)





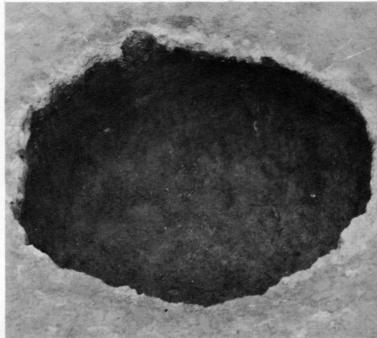


図版18 上 中央部全景(北から) 下 左 SA503柱列, SD504溝(北から) 右 SA500,501柱列(南から)





上 SK541土壙 遺物出土状況(東から) 下 SK541土壙 (東から)





上 SK542袋状ピット(南から)下 SI495住居跡,出土乾漆様容器

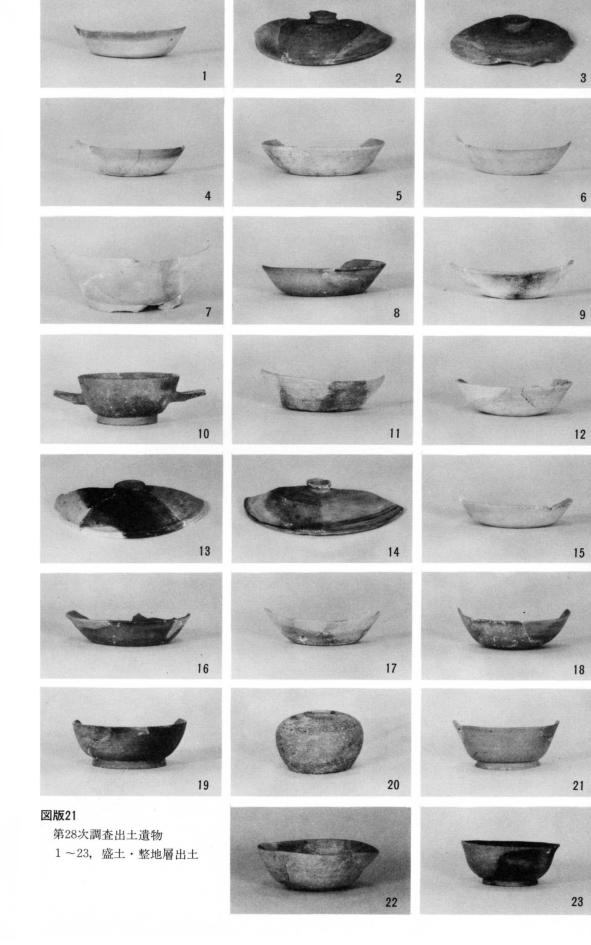


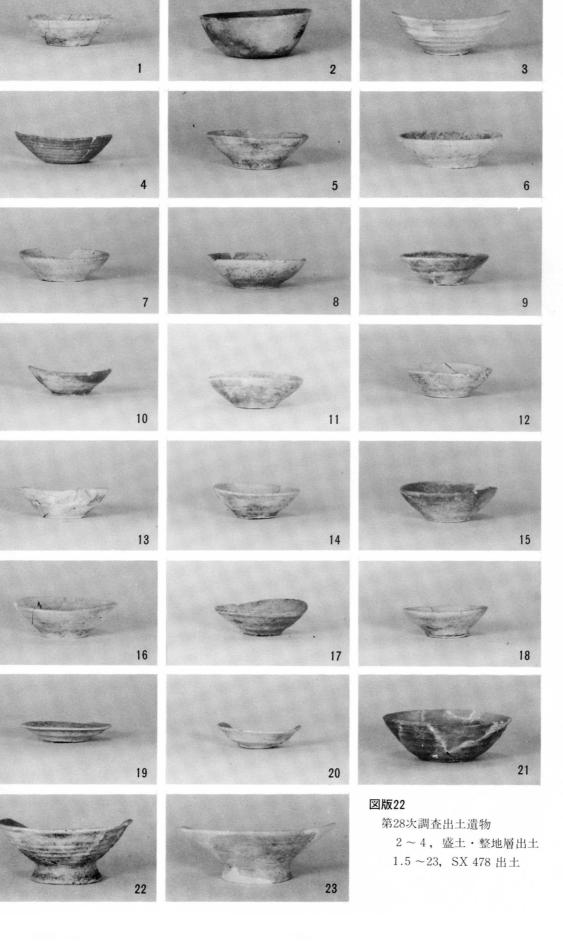


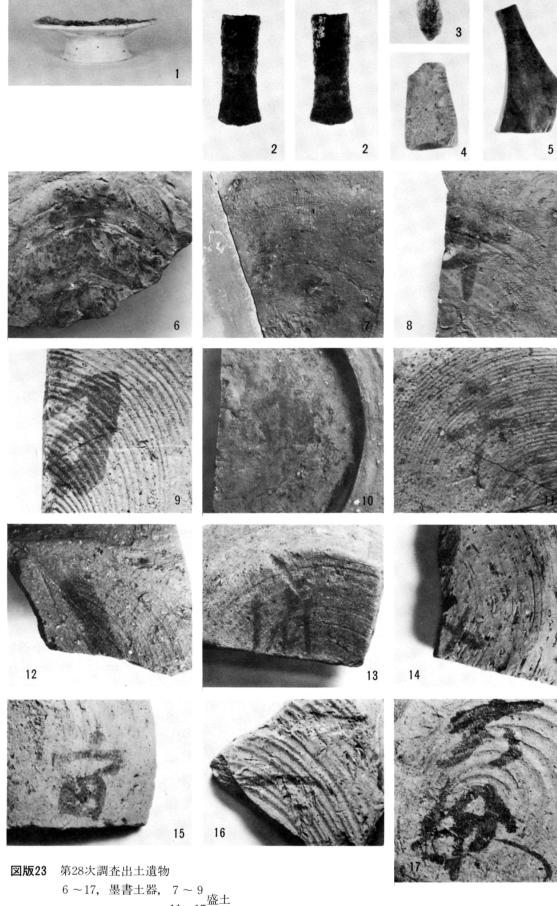


図版20 第31次調査

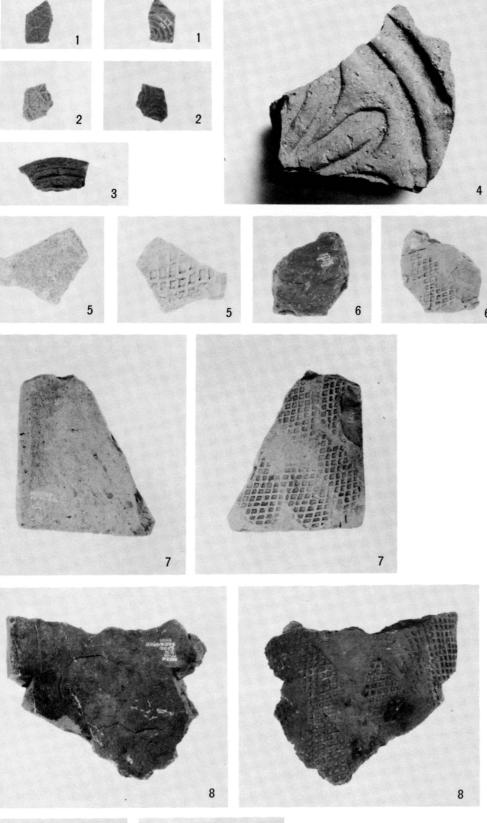
- 上 全景(西から)
- 中 SF550築地(東から)
- 下 SD551溝状遺構内 検出柱穴







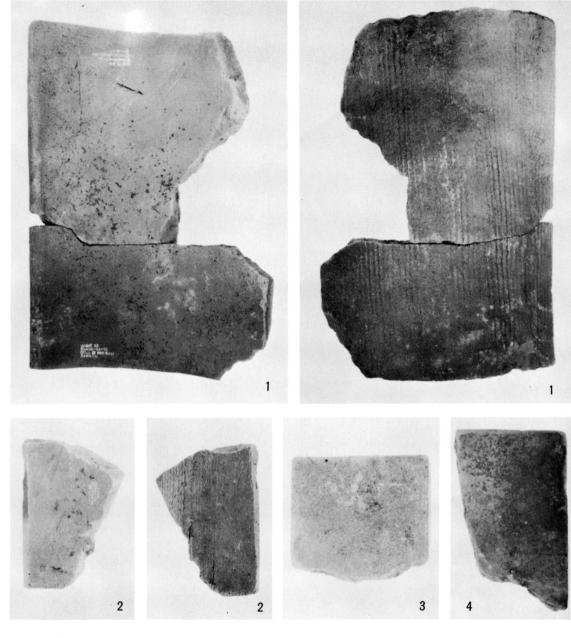
6~17, 墨書土器, 7~9 11~17







図版24 第28次調査出土遺物



第28次調査出土瓦













1~7 第28次調査出土古銭



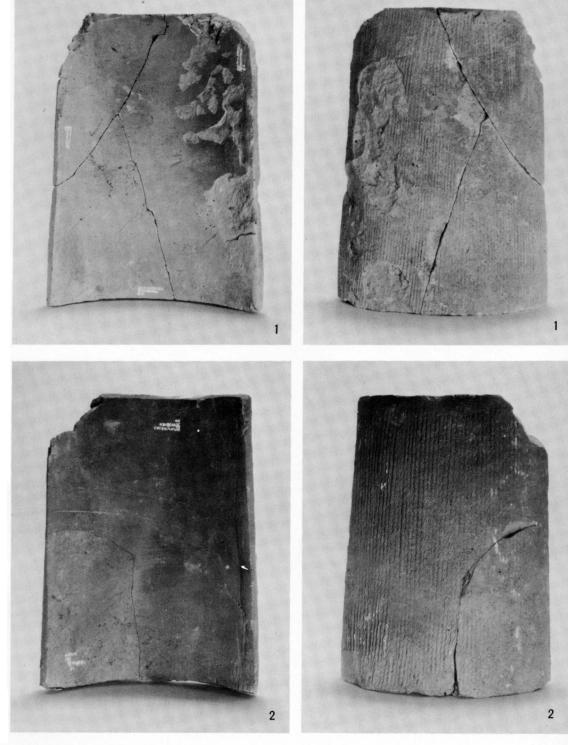
- 2. PK-31, 第三層 褐色砂
- 3. 表採
- 4. SA477小ピット群
- 5. PF-27, 地山砂層面
- 6. SA477小ピット群
- 7. 表採





第29次調査出土瓦 SF 481 築地崩壊土出土

図版26



図版27 第29次調査出土瓦 SF481築地崩壊土出土

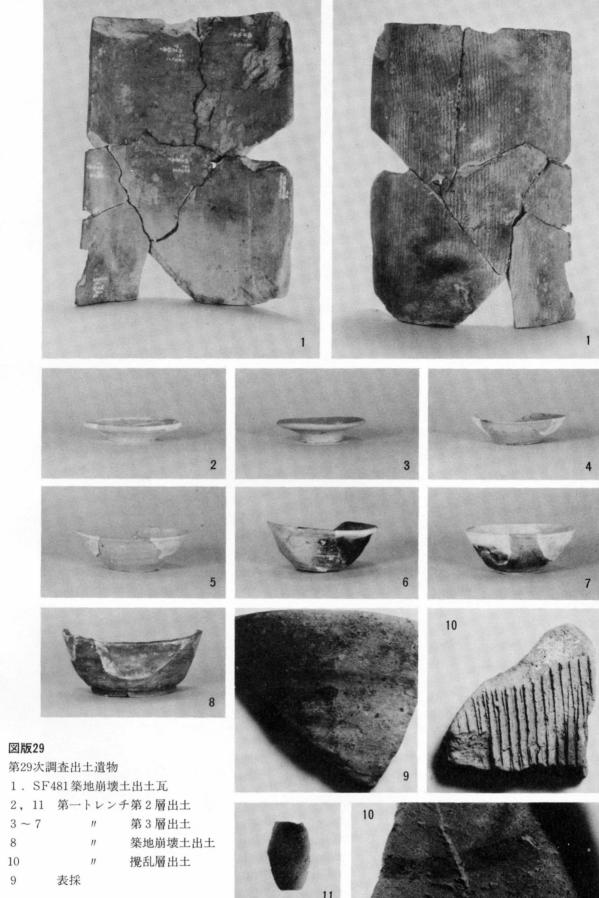


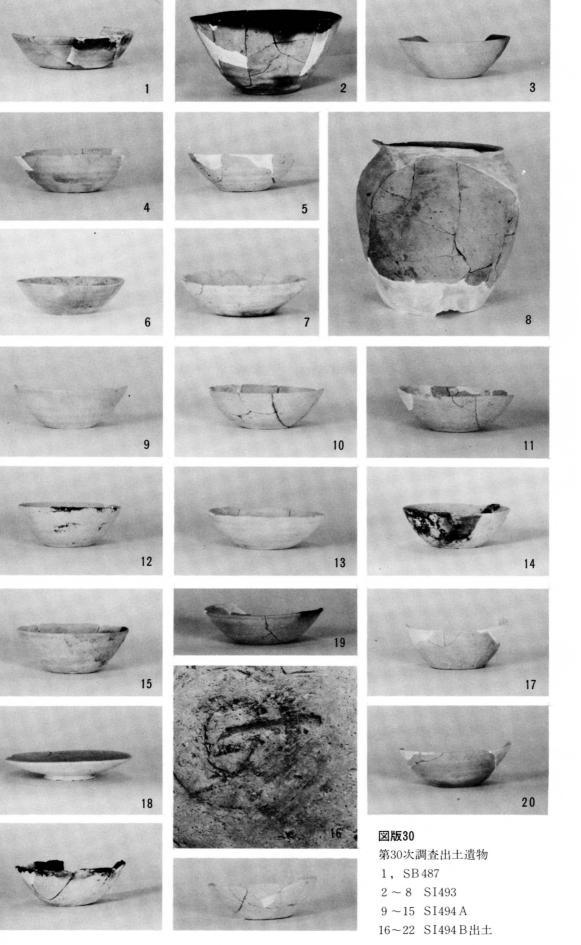


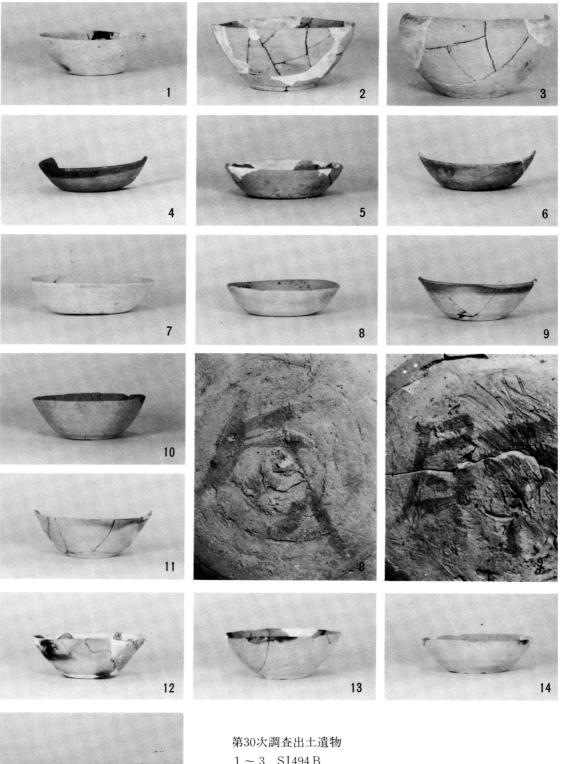




図版28 第29次調査出土瓦 SF481築地崩壊土出土

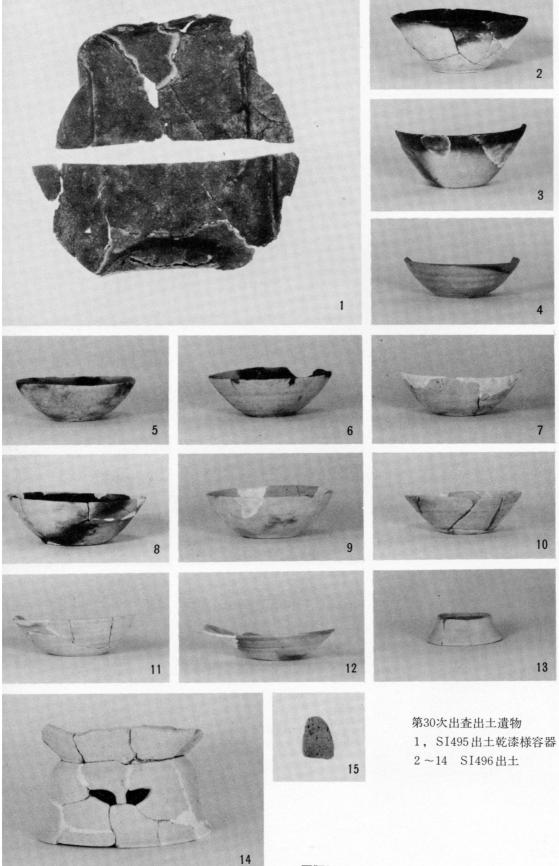




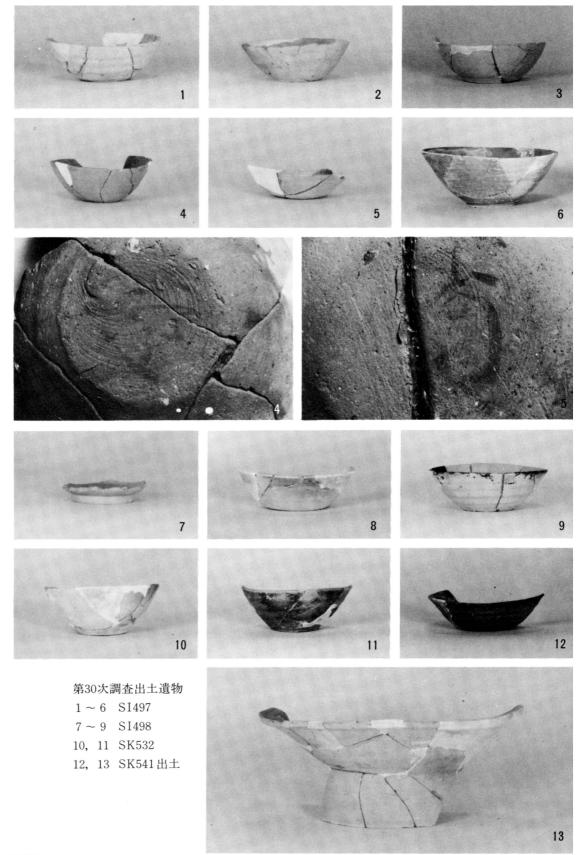


第30次調査出土遺物 1~3 SI494B 4~15 SI495出土

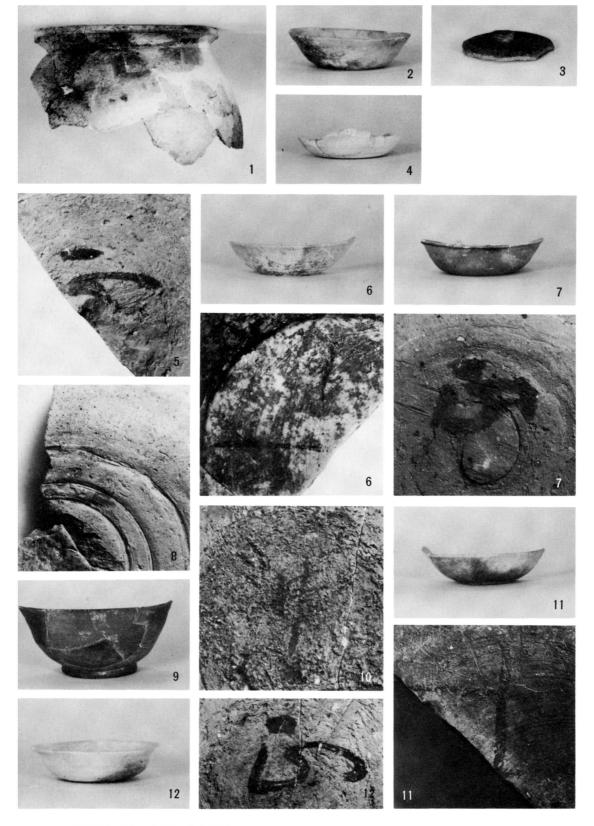
15



図版32



図版33



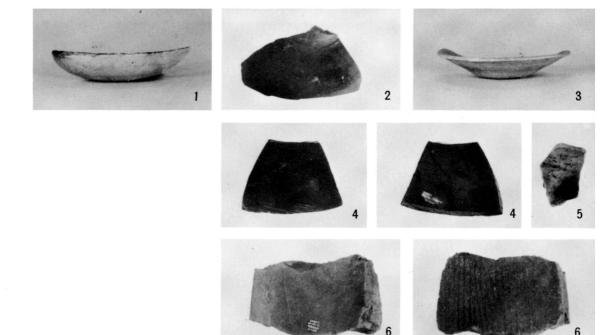
図版34 第31次調査出土遺物

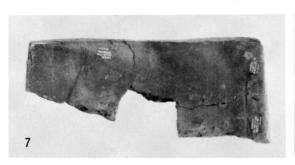
1~4 SF550 築地崩壊土出土

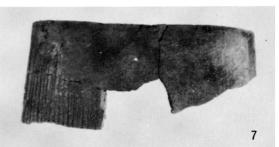
5, 表土出土

6~10, 第二層出土

11, 12, 第三層出土







第31次調査出土遺物

- 第四層出土 1,
- 2.3,攪乱層出土
- 4.5,その他の遺物
- 6, 第二層出土
- 第三層出土 7,

秋田城跡内泥炭層の花粉分析

宮城県農業短期大学

日比野 紘一郎

秋田城跡第26次発掘調査地域内(高清水小学校の東方,約250 m)で地表下約135 cmに厚さ130 cmほどの泥炭層を狭在する有機質に富んだ堆積物が確認された。この堆積物の花粉分析をおこない、 堆積当時の植物的自然環境を認識する。

1) 試料およびC-14年代測定値

試料はトレンチの壁面よりスコップで $20 \times 15 \text{cm}$ の角柱に切りとり、実験室に持ち帰り、さらに試料の表面をはぎとり、花粉分析用の試料とした。また、C-14年代測定のために堆積物の表層と最下層、それぞれ厚さ 2 cmを供した。トレンチの断面はおおよそ次のようである。

地表面~深さ	135cm	灰白色粘土
135~	165	微砂を含む粘土、わずかに砂を含む
165~	179	有機質粘土
179~	188	黒色粘土
188~	206	よく分解した泥炭
206~	211	未分解褐色泥炭
211~	228	褐色泥炭
228~	244	有機質粘土
244~	264	褐色泥炭
264~		灰白色粘土

このうち花粉分析をおこなったのは深さ135cmから264cmまでの厚さ129 cmの部分である。なお、第26次発掘調査地域内の泥炭層の広がりについては昭和52年度秋田城跡発掘調査概報(1978)に記されてある。さらに、この報告書によれば、この堆積層は無遺物層であり、この層の上層の灰白色粘土層、すなわち地表面より深さ135 cmまでからは須恵器、土師器、赤褐色土器、瓦が出土している。

C-14年代測定は東北大学理学部地理学教室に依頼した。その結果は次の通りである。

深さ 135~137 cm 1780±100 (TH-650) 262~264 3610±130 (TH-651) 花粉分析のための化学的処理はKOH-Acetolysis法によりおこなった。簡単に手順を記しておく。

- a) 試料 $1 \sim 2$ gを遠心管に取り、10%KOHを入れ、ガラス棒でよくほぐす。
- b)沸騰している湯煎中に15分入れる。
- c) 遠心分離機にかけ上澄をすてる。
- d) 残渣に水を入れ、ガラス棒でよくほぐす。遠心分離機で上澄をすてる。2回くり返す。
- e) 氷酢酸を加え脱水, 遠心分離。
- f)無水酢酸と濃硫酸の9:1の混合液を加え、湯煎中で5分加熱する。遠心分離。
- g) 残渣を氷酢酸で洗う。遠心分離。
- h) 残渣を水で洗う。遠心分離。2回くり返す。

以上, 処理した残渣の一部をグリセリンゼリーで封じて検鏡する。花粉および胞子を種類ごとに数をかぞえて木本性花粉 (ハンノキ属は多量に出現するため木本性花粉からのぞいた)を基本数として百分率で示した。

2) 結果および考察

主要な花粉、胞子の消長を図1に示した。同定できた花粉および胞子は下記の通りである。

木本性花粉:マツ属、スギ属、ブナ属、ナラ属、クリ属、モチノキ属、トネリコ属、シデ属、トチノキ属、ケヤキ属、ミズキ属、サワグルミ属、オニグルミ属、エノキ属、カエデ属、タニウツギ属、シラカンバ属、ツガ属、シナノキ属、ウルシ属、ヤナギ属、ガマズミ属。

草本性花粉・胞子:ハンノキ属、イネ科、カヤツリグサ科、キク科、ユリ科、セリ科、アリノトウグサ科、シソ科、ヨモギ属、ガマ属、ワレモコウ属、タデ属、カラマツソウ属、ツリフネソウ属、アカザ属。

ほぼ全層を通してナラ属が優勢でこれにクリ属が伴う。しかし、詳しくみると深さ 165 cmをさかいにしてクリ属が急減し、逆にブナ属とスギ属が増加の傾向を示す。すなわち、この花粉分布図は次のように 2 帯に区分できる。

I帯 ナラ属─クリ属帯 (深さ264~165cm)

Ⅱ帯 ナラ属—ブナ属—スギ属帯 (165~135cm)

〔I 帯〕

I帯の年代は泥炭の堆積し始めた約3,600年B.P.から上限は堆積物の堆積速度を一様として概算すると約2,200年B.P.である。この帯はナラ属にクリ属が伴っている。この地域のナラ属はミズナラあるいはコナラが考えられ、クリ属はクリであり、このナラ属とクリの組み合わせを考えるとナラ属はコナラを推定するのが適当である。

現在、秋田県内の丘陵地はコナラ・クリ林あるいはアカマツー落葉広葉樹林の二次林となってお

り、原植生を示すような残存林はほとんど残っていない。従って群落学的にもこの地域の原植生を 推定することは困難な状況にある。

秋田県内の3,000 年B.P.頃の丘陵地における花粉分析の資料のほとんどはナラ属が優勢でこれに ブナ属が伴う(辻・日比野 1975, 川村 1977など)。すなわち、秋田県内の丘陵地の大部分は恐ら くミズナラにブナを混じた林であったと考えられる。このミズナラにブナを伴う林に人為的干渉が 加われば標高の高い地域(約400m以上)ではミズナラ林になるが,これ以下の標高ではコナラ・ クリ林になるといわれている。これまで標高の低い地域での花粉分析の資料がいくつか報告されて いるが、これらを見るとナラ属が優勢でこれに次いでブナ属、スギ属が高率を占めている。これま での報告と比較すると今回の資料はナラ属が優勢であることは同様であるがクリ属を伴う点に大き な差異がある。恐らく,この地域は秋田城築城以前から,約3,000年B.P.頃からすでにかなり強い 人間の干渉下におかれていたと思われる。しかし、一般的には、この時代にこれほどまで人間活動 が活発であったであろうかという疑問がでる。コナラ・クリ林のような二次林の成立は人為干渉の ほかに風水害、山火事といった自然災害のもとでも成立する。あるいは、この二次林の成立は人為 干渉の結果ではなく、自然災害の多発地ということも考えられる。二次林になった原因については 現在のところ全く判断がつかないが、全国的にみるとこれに類似した報告がある。これらの報告も この点について明確ではない。植生の歴史を知る上でも重要な問題であり,将来,資料の集積を待 って検討してみたい。いずれにせよ,この地域は他地域にくらべかなり特殊な地域であることだけ は確かである。

泥炭を形成した湿原は粘土上に発達し、湿原周辺にはハンノキとヤチダモの混交林が繁茂し、林 床や湿原内部にはカヤツリグサ科のカサスゲ、イネ科のヨシなどが生育していたものと考えられる。

〔II 带〕

I帯との境界が約2,200年B.P.であり、ここから堆積物の上端、約1,780年B.P.がこの帯である。この帯はナラ属が減少傾向を示し、クリ属が急減する。これに反し、ブナ属、スギ属、シデ属、モチノキ属が増加の傾向を示すことで特徴ずけられる。前帯のコナラ・クリの二次林からブナ林の回復がわずかではあるが見られる。さらに、この帯からスギ属が増加傾向を示すが、これは秋田県内全域に見られる傾向で、スギ林の分布を広げるような気候的変化がこの時代にあったものと考えられている。日本列島の後氷期以降のスギの分布過程を概観してみるとその増加時期は中国山地で8,500年B.P.(三好ら 1976)、中部山地で5,000年B.P.(Jsukada 1972)、東北地方では3,000~2,500年B.P.(辻・日比野1975、辻 1977、川村 1977) である。今回の資料はスギ属の増加時期が約2,200年B.P.と前記の年代よりもいくぶん若い。秋田市の北方約31km、海岸まで約1.7kmで標高10mにある出戸湿原での結果では約1,250年B.P.(日比野ら 1980)とさらに若い年代となっている。丘陵地の上部から山地帯における資料は3,000~2,500年B.P.を示し、丘陵下部では2,200年B.P.、海岸近くでは1,250年B.P.と標高が低いほどスギの分布拡大開始期が遅くなっている。単純

- 3 -

にはスギの分布拡大は山地から低地への方向性がうかがわれる。なお,現在のスギの自然林は桃洞, 佐渡,雄勝峠など山地深く,人間活動の及ばなかった地域に残存している。

4) まとめ

今回得られた秋田城跡内の泥炭層はC-14年代測定の結果,秋田城築城時よりなお500年以上前に形成されたものであり,秋田城が機能していた当時の秋田城をとり囲む自然環境を花粉分析で知ることはできなかった。もっと年代的に若い泥炭層が得られれば、当時城内で栽培されていた作物、植栽樹など種類や場合によって量などがあるいは判明したかもしれない。残念ながら今回は繩紋末期から弥生時代の堆積物であったため秋田城跡発掘にかかわる資料の一つにはなり得なかった。しかし、今回の資料はこの地域が比較的古い時代よりコナラ・クリ林の二次林の成立するような条件の土地であり、もしこれが人間活動の結果だとすれば古くよりかなり密度高く使用されていた場所に秋田城が築城されたという歴史的背景になる。

4) 文 献

- 1) 日比野紘一郎,宮城豊彦,高橋吉男,加藤君雄(1980):秋田県出戸湿原の花粉分析学的研究 宮農短大報告 第27号
- 川村智子(1977):スギ(Cryptomeria japonica)の分布に関する花粉分析的研究(I. 秋田県) 花粉 第11号
- 3) 三好教夫, 矢野悟道, 波田善夫(1976):中国地方の湿原堆積物の花粉分析学的研究3.加保坂湿原(岡山県) 岡山理大蒜山研究所報告 第2号
- 4) Tsukada, M.(1972): The history of lake Nojiri, Japan. Cann. Acad. Art Sci. vol. 44
- 5) 辻誠一郎, 日比野紘一郎(1975): 秋田県女潟における花粉分析的研究 第四紀研究第14巻
- 6) 辻誠一郎(1977):秋田県玉川温泉地域の沖積世鹿湯層の花粉分析 東北地理 第29巻

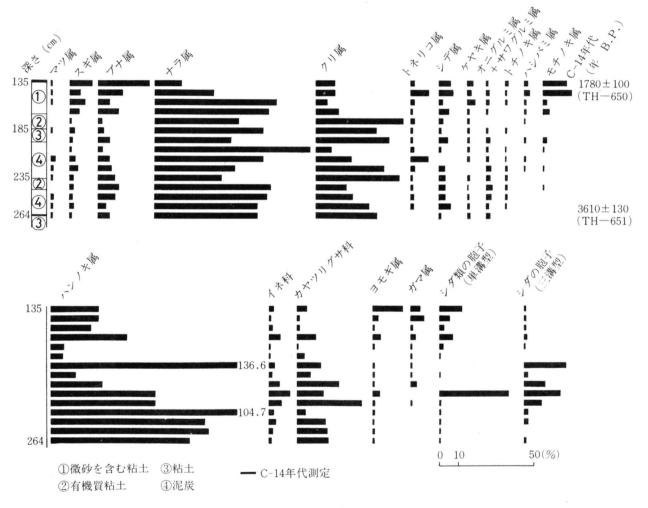


図1 秋田城跡第26次調査 SG463湿地の花粉ダイアグラム



- 6 -

秋田城関係文献目録

凡 例

- (1) 本目録は、1979年以前に刊行された秋田城関係の文献を収録したものである。ただし、新聞記事は除く。
- (2) 収録の基準としては、「秋田城」「秋田出羽栅」という語彙の出てくる文献を対象とした。
- (3) 文献の配列順序は論文名の50音順とし、整理番号をつけた。ただし1~56までは、史料を一括して年代順に記載した。最後に、人名別索引と収録文献索引を付した。
- (4) 本目録作成にあたっては、少しでも多くの文献をと考え収集したが、まだまだ不備な点が多い。今後本目録を少しでも充実したものにするために、御批判、御教示いただければ幸いである。
- (5) 本目録は、小松正夫、西鳥羽礼子が中心になり、他に同事務所職員の協力を得た。

	項目	史 料 名	刊 行 本 名	出版社	発行年月日
1	天平五年十二月己未(733年)	続日本紀	新訂增補国史大系続日本紀曹	吉川弘文館	S 51.10.10
2	天平宝字四年三月十九日(760年)	大日本古文書卷25	丹鶴叢書		
3	宝亀十一年八月己卯(780年)	続日本紀	新訂增補国史大系続日本紀篇	吉川弘文館	S 51.10.10
4	延曆二十三年十一月癸巳(804年)	日本後紀	新訂增補国史大系日本後紀	吉川弘文館	S 50.6.10
5	天長七年正月癸卯(830年)	類聚国史	新訂增補国史大系類聚国史	吉川弘文館	
6	天長七年四月戌辰(830年)	類聚国史	新訂增補国史大系類聚国史	吉川弘文館	
7	天長七年閏十二月二十六日太政官 奏增加出羽國官員事(830年)	類聚三代格	新訂増補国史大系類聚三代格賞	吉川弘文館	S 49.7.20
8	嘉祥三年十一月丙申(850年)	日本文徳天皇実録	新訂增補国史大系日本文徳天皇実録	吉川弘文館	S 52.9.10
9	貞観元年三月二十六日(859年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録賞	吉川弘文館	S 46.4 .30
10	貞観十七年十一月十六日(875年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録曹	吉川弘文館	S 46.4 .30
11	元慶二年四月四日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
12	元慶二年四月二十八日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録曹	吉川弘文館	S 46.4 .30
13	元慶二年六月七日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録曹	吉川弘文館	S 46.4 .30
14	元慶二年六月十六日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録賞	吉川弘文館	S 46.4 .30
15	元慶二年七月十日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
16	元慶二年九月五日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録賞	吉川弘文館	S 46.4 .30
17	元慶二年十月十二日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
18	元慶二年十月十三日(878年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
19	元慶三年正月十一日(879年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
20	元慶三年三月二日(879年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
21	元慶三年六月二十六日(879年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
22	元慶四年二月十七日(880年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
23	元慶五年三月二十六日(881年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
24	元慶五年四月二十五日(881年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
25	元慶八年九月二十九日(884年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
26	仁和元年十一月二十一日(885年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30
27	仁和三年五月二十日(887年)	日本三代実録	新訂增補国史大系日本三代実録篇	吉川弘文館	S 46.4 .30

28 寛平五年関五月十五日 (893年) 天慶二年四月十一日 (939年) 貞信公記 天慶二年五月六日 (939年) 31 天慶二年七月十八日 (939年) 32 天慶二年七月十八日 (939年) 33 康保四年二月十一日 (967年) 34 天元三年七月二十三日 (980年) 35 長徳元年十月二日 (980年) 36 長保二年一月七日 (1000年) 37 長和四年十一月四日 (1015年) 38 文治四年九月十四日 (1188年) 39 文治六年正月六日 (1190年) 40 建保六年三月十六日 (1218年) 41 元弘四年二月 (1334年) 42 延文元年六月 (1356年) 43 天保十四年九月二十日 (1843年) 44 民部 上 東山道 45 兵部省諸国駅伝馬 46 臨時一,諸宣旨 47 臨時八、受領赴任事 48 師大式赴任 49 式 60 除日化勅任者 70 除日化勅任者 71 下宣旨事出羽城介城務事 48 師人或是任 75 除別任 西京記 長典話記 長典話記 長典話記 長典話記 長典話記 長典話記 長典話記 長典話						
大田本古記録	28	寛平五年閏五月十五日(893年)	日本紀略	新訂增補国史大系日本紀略	吉川弘文館	
大野	29	天慶二年四月十一日(939年)	貞信公記	大日本古記録		
32 天慶二年七月十八日(939年) 本朝世紀 魚像四年二月十一日(967年) 新訂増補国史大系本朝世紀警 大日本史料一の十一魚魯愚鈔書 新訂増補国史大系類聚符宣抄警 権記 投紀二年一月七日(1000年) 吉川弘文館 吉川弘文館 36 長保二年一月七日(1000年) 権記 機配 機配 機配 人力四年十一月四日(1015年) 史料大成権配一 少料大成権配一 史料大成権配一 少本力公用年1月(1190年) 吉川弘文館 554.4.10 39 文治四年九月十四日(1188年) 吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 新訂増補国史大系至妻鏡 「吉川弘文館」 554.4.10 40 建保六年三月六日(1190年) 吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 「吉川弘文館」 554.4.10 42 延文元年六月(1356年) 新渡戸文書 寺内村記 延喜式 兵部省諸国駅伝馬 區時一,諸宣旨 庭時一,諸宣旨 庭時一,諸宣旨 庭時一,諸宣旨 医時に,養育出任 「中群要 行中群要 「大日本史経 大子延喜式 「市宣旨事出羽城介城務事」北山抄 大宗表書作中群要九 丹鶴叢書侍中群要九 丹鶴叢書侍中群要九 丹鶴叢書侍中群要九 大野鶴養任統江家次第四 故実養書北山抄六 株群書類従伝部 統件書類従伝部 総定書類従伝部 総定書類従伝部 協作書類従伝部 岩波日本古典文学大系古今者開集九 藤原公任 藤原公任 50 除目し勅任者 下宣旨事出羽城介城務事 永承之頃 藤原保則伝 武勇条 長名類聚鈔 北山抄 校実養書北山抄六 株群書類従伝部 総件書類従伝部 岩波日本古典文学大系古今者開集九 藤原公任 53 藤原保則伝 武勇条 古今者開集 佐名類聚鈔 岩波日本古典文学大系古今者開集九	30	天慶二年四月十七日(939年)	貞信公記	大日本古記録		
33 康保四年二月十一日(967年) 魚魯愚鈔 大日本史料一の十一魚魯愚鈔 書 新訂増補国史大系類聚符宣抄 教	31	天慶二年五月六日 (939年)	貞信公記	大日本古記録		
表元三年七月二十三日(980年) 類聚符宣抄 検記 接記 投稿に 大稿に 大稿に	32	天慶二年七月十八日(939年)	本朝世紀	新訂增補国史大系本朝世紀*3	吉川弘文館	
35 長徳元年十月二日 (995年) 権記 史料大成権記一 36 長保二年一月七日 (1000年) 権記 史料大成権記一 37 長和四年十一月四日 (1015年) 御堂関白記 日本古典全集下卷御堂関白記書 38 文治四年九月十四日 (1188年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54. 4. 10 39 文治六年正月六日 (1190年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54. 4. 10 40 建保六年三月十六日 (1218年) 吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54. 4. 10 41 元弘四年二月 (1334年) 南部家文書 新護戸文書 吉川弘文館 S54. 4. 10 42 延元年六月 (1356年) 新渡戸文書 青川弘文館 S52. 9. 10 43 天保十四年九月二十日 (1843年) 英門村記 高橋貞房 吉川弘文館 S52. 9. 10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂増補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S52. 9. 10 46 臨時一,諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 吉川弘文館 S52. 9. 10 47 臨時八,受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 東衛寺中群要九 大島叢書院 東川弘文館 S52. 9. 10 50 除自札執任 伊中群要 丹鶴叢書院 中川弘文館 大	33	康保四年二月十一日(967年)	魚魯愚鈔	大日本史料一の十一魚魯愚鈔鴦		
36 長保二年一月七日(1000年) 権記 史料大成権記一 37 長和四年十一月四日(1015年) 御堂関白記 日本古典全集下卷御堂関白記書 38 文治四年九月十四日(1188年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54.4.10 39 文治六年正月六日(1190年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54.4.10 40 建保六年三月十六日(1218年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡書 吉川弘文館 S54.4.10 41 元弘四年二月(1334年) 南部家文書 新訂增補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S52.9.10 42 延郎十月二十日(1843年) 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S52.9.10 43 天保十四年九月二十日(1843年) 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S52.9.10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S52.9.10 46 臨時一,諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 吉川弘文館 S52.9.10 47 臨時八,受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 東衛等中件要九 大師叢書院中群東九 大師叢書院公任 藤原公任 49 式 特事報任公部 本計 本計 本計 本計 本計 本計 本計 本計 <td>34</td> <td>天元三年七月二十三日(980年)</td> <td>類聚符宣抄</td> <td>新訂增補国史大系類聚符宣抄費</td> <td>吉川弘文館</td> <td></td>	34	天元三年七月二十三日(980年)	類聚符宣抄	新訂增補国史大系類聚符宣抄費	吉川弘文館	
長和四年十一月四日 (1015年) 個堂関白記	35	長徳元年十月二日(995年)	権記	史料大成権記一		
38 文治四年九月十四日(1188年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡 ^墨 吉川弘文館 554.4.10 39 文治六年正月六日(1190年) 吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡 ^墨 吉川弘文館 554.4.10 40 建保六年三月十六日(1218年) 南部家文書 新訂増補国史大系吾妻鏡 ^墨 吉川弘文館 554.4.10 41 元弘四年二月(1334年) 新渡戸文書 青内村記 高橋貞房 42 延文元年六月(1356年) 新方中村記 高橋貞房 43 天保十四年九月二十日(1843年) 新訂増補国史大系延喜式 ^畫 吉川弘文館 552.9.10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂増補国史大系延喜式 ^畫 吉川弘文館 552.9.10 46 庭時一,諸宣旨 史籍集覧外編 上籍集覧外編 上籍集覧外編 47 庭時八,受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 上籍集覧公 大師書刊弘文館 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10 552.9.10	36	長保二年一月七日(1000年)	権記	史料大成権記一		
39 文治六年正月六日 (1190年) 吾妻鏡 新訂增補国史大系吾妻鏡 ^差 吉川弘文館 S 54. 4 . 10 40 建保六年三月十六日 (1218年) 再家家文書 新訂增補国史大系吾妻鏡 ^差 吉川弘文館 S 54. 4 . 10 41 元弘四年二月 (1334年) 新渡戸文書 新渡戸文書 高橋貞房 吉川弘文館 S 52. 9 . 10 42 延京六月 (1356年) 新訂增補国史大系延喜式 書 吉川弘文館 S 52. 9 . 10 43 天保十四年九月二十日 (1843年) 延喜式 新訂増補国史大系延喜式書 吉川弘文館 S 52. 9 . 10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 西宮記 史籍集覧外編 史籍集覧外編 史籍集覧外編 中華要	37	長和四年十一月四日(1015年)	御堂関白記	日本古典全集下巻御堂関白記奏		
40 建保六年三月十六日 (1218年) 吾妻鏡 新訂増補国史大系吾妻鏡差 吉川弘文館 S54.4.10 41 元弘四年二月 (1334年) 新渡戸文書 新渡戸文書 高橋貞房 吉川弘文館 S52.9.10 42 延文元年六月 (1356年) 延喜式 新訂増補国史大系延喜式費 吉川弘文館 S52.9.10 44 民部 上 東山道 延喜式 新訂増補国史大系延喜式費 吉川弘文館 S52.9.10 45 兵部省諸国駅伝馬 匹喜式 安籍集覧外編 上東第東覧外編 上東第東覧外編 中華要 中鶴叢書侍中群要九 大鶴叢書侍中群要九 大鶴叢書中中群要九 大鶴叢書中中群要九 藤原公任 藤原公任 藤原公任 藤原公任 50 除目し勅任者 江家次第 統群書類従伝部江家次第四 藤原公任 藤原公任 藤原公任 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 藤原公任 藤原公任 52 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 普波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部巻 5 長名類聚鈔	38	文治四年九月十四日(1188年)	吾妻鏡	新訂增補国史大系吾妻鏡第	吉川弘文館	S54.4.10
41 元弘四年二月(1334年) 南部家文書 42 延文元年六月(1356年) 新渡戸文書 43 天保十四年九月二十日(1843年) 寺内村記 44 民部 上 東山道 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書 吉川弘文館 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂増補国史大系延喜式書 吉川弘文館 46 臨時一,諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 47 臨時八,受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 48 師大式赴任 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目凢勅任者 江家次第 統群書類從伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 藤原公任 52 永承之頃 陸奥話記 群書類從伝部 53 藤原保則伝 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部巻 5 長名類聚鈔	39	文治六年正月六日(1190年)	吾妻鏡	新訂增補国史大系吾妻鏡第	吉川弘文館	S54.4.10
42 延文元年六月(1356年) 新渡戸文書 壽内村記 高橋貞房 高橋貞房 吉川弘文館 S52.9.10 44 民部 上 東山道 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書書 吉川弘文館 S52.9.10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂增補国史大系延喜式書書 吉川弘文館 S52.9.10 46 臨時一、諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 伊華集覧外編 47 臨時八、受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 48 師大式赴任 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目凢勅任者 江家次第 統群書類従伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 藤原保則伝 藤原保則伝 53 藤原保則伝 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部巻 5 倭名類聚鈔	40	建保六年三月十六日(1218年)	吾妻鏡	新訂增補国史大系吾妻鏡蓋	吉川弘文館	S54.4.10
43 天保十四年九月二十日(1843年) 寺内村記 高橋貞房 高橋貞房 吉川弘文館 S52.9.10 44 民部 上 東山道 延喜式 新訂増補国史大系延喜式費 吉川弘文館 S52.9.10 45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂増補国史大系延喜式費 吉川弘文館 S52.9.10 46 臨時一,諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 上籍集覧外編 中華要九 伊鶴叢書侍中群要九 伊鶴叢書侍中群要九 大路書類任伝部江家次第四 大路書類任伝部江家次第四 大路書類任 藤原公任 藤原公任 藤原公任 藤原公任 藤原公任 本本之頃 藤原公任 藤原公任 藤原公任 本書類任伝部 藤原公任 本書類任伝部 基次日本古典文学大系古今著聞集九 基次日本古典文学大系古今著聞集九 基次日本古典文学大系古今著聞集九 基次日本古典文学大系古今著聞集九 基次日本古典文学大系古今著聞集九 基本日本古典文学大系古今著聞集九 基本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日本日	41	元弘四年二月(1334年)	南部家文書			
44 民部 上 東山道 延喜式 新訂增補国史大系延喜式 書	42	延文元年六月(1356年)	新渡戸文書			
45 兵部省諸国駅伝馬 延喜式 新訂増補国史大系延喜式護 吉川弘文館 S52.9.10 46 臨時一、諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 世籍集覧外編 世籍集覧外編 世籍集覧外編 中群要九 日本	43	天保十四年九月二十日(1843年)	寺内村記		高橋貞房	
46 臨時一,諸宣旨 西宮記 史籍集覧外編 47 臨時八,受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 48 師大式赴任 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目化勅任者 江家次第 統群書類従伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 藤原公任 52 永承之頃 陸奥話記 群書類従二十号合戦部 53 藤原保則伝 結群書類従伝部 54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部巻 5 倭名類聚鈔	44	民部 上 東山道	延喜式	新訂增補国史大系延喜式 韓	吉川弘文館	S52.9.10
47 臨時八、受領赴任事 西宮記 史籍集覧外編 48 師大式赴任 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目凢勅任者 江家次第 統群書類從伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 52 永承之頃 陸奧話記 群書類從二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類從伝部 54 武勇条 古今著聞集 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	45	兵部省諸国駅伝馬	延喜式	新訂增補国史大系延喜式🇯	吉川弘文館	S52.9.10
48 師大式赴任 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目凢勅任者 江家次第 統群書類從伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 52 永承之頃 陸奥話記 群書類從二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類從伝部 54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	46	臨時一,諸宣旨	西宮記	史籍集覧外編		
49 式 侍中群要 丹鶴叢書侍中群要九 50 除目化 勅任者 江家次第 統群書類從伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 52 永承之頃 陸奥話記 群書類従二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類従伝部 54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国都部巻 5 倭名類聚鈔	47	臨時八, 受領赴任事	西宮記	史籍集覧外編		
50 除目化 勅任者 江家次第 続群書類從伝部江家次第四 51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 藤原公任 52 永承之頃 陸奥話記 群書類従二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類従伝部 54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国都部卷 5 倭名類聚鈔	48	師大式赴任	侍中群要	丹鶴叢書侍中群要九		
51 下宣旨事出羽城介城務事 北山抄 故実叢書北山抄六 藤原公任 52 永承之頃 陸奥話記 群書類従二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類従伝部 54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	49	式	侍中群要	丹鶴叢書侍中群要九		
52 永承之頃 陸奥話記 群書類従二十号合戦部 53 藤原保則伝 統群書類従伝部 54 武勇条 古今著聞集 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	50	除目化勅任者	江家次第	続群書類従伝部江家次第四		
53 藤原保則伝 統群書類従伝部 54 武勇条 古今著開集 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	51	下宣旨事出羽城介城務事	北山抄	故実叢書北山抄六	藤原公任	
54 武勇条 古今著聞集 岩波日本古典文学大系古今著聞集九 55 国郡部卷 5 倭名類聚鈔	52	永承之頃	陸奥話記	群書類従二十号合戦部		
55 国郡部巻 5 倭名類聚鈔	53	藤原保則伝		続群書類従伝部		
	54	武勇条	古今著聞集	岩波日本古典文学大系古今著聞集九		
56 出羽国第九十五卷七 倭名類聚鈔	55	国郡部巻 5	倭名類聚鈔			
	56	出羽国第九十五卷七	倭名類聚鈔			

		論 文 名	著者・編者	収録文献名	出版社	発行年月日
	57	秋田	新野直吉	.みちのく歴史散歩 豊田武 編	河出書房新社	S37.6.30
	58	秋田	経済企画庁		経済企画庁総合開 発局国土調査課	S41.3
	59	秋田・秋田城跡	小松正夫	木簡研究創刊号	木簡学会	S 54.11.25
ĺ	60	秋田浦考	大橋良一	秋田考古学第5号	秋田考古学協会	S31.夏号
	61	秋田男鹿の発掘 平安時代の民家	福山敏男	史林49卷1号		
	62	秋田郷土年表	上法香苗		秋田県南秋田郡土 崎女子小学校	S.7.1
	63	秋田県	小松正夫	考古学ジャーナル臨時増刊 No.169	ニュー・サイエン ス社	S54.11.30
	64	秋田県秋田市秋田城跡 (第一次調査	斉藤 忠	日本考古学年報12	日本考古学協会	S39.3
	65	秋田県遺跡地名表	秋田県教育委員会		秋田県教育委員会	S42.4
	66	秋田県羽後町足田遺跡第4次調査	板橋 源	日本考古学年報19	日本考古学協会	S46.4
	67	秋田県雄勝郡足田遺跡城神廻り遺	跡 奈良修介	日本考古学年報15	日本考古学協会	S42.3
	68	秋田県郷土誌			秋田師範学校	S 8 . 9 .16
	69	秋田県国郡沿革小話	大山 宏			
	70	秋田県五城目町石崎遺跡 発掘調査機	五城目町教育委員 会		五城目町 教育委員 会	S47.11

71	秋田県史 古代・中世編			秋田県	S37.3.31
72	秋田県史 資料古代・中世編			秋田県	S 36. 3.31
73	秋田県史 上古部	狩野徳蔵		成見清兵衛	M42.8.21
74	秋田県史 中古部	狩野徳蔵		狩野貞吉	M42.12.15
75	秋田県神社神道史	秋田県神社神道史 編集委員会		秋田県神社庁	S54.11.30
76	秋田県新風土記	名取洋之助		岩波書店	S33.2.25
77	秋田県寺内町町勢要覧	寺内町役場		寺内町	S 8 . 9 .12
78	秋田県における緊急発掘と その問題点	富樫泰時	考古学ジャーナルNo.73	ニュー・サイエン ス社	S47.9
79	秋田県における古墳遺跡について	三上礼子	秋田考古学第34・35合併号	秋田考古学協会	S53.1
80	秋田県に於ける城郭構造の 変遷と研究	伊藤郷人	秋田考古学 十周年記念特 集号	秋田考古学協会	S39.7.30
81	秋田県に於ける館と聚落の研究	伊藤鉄太郎	出羽路第18号	秋田県文化財保護 協会	S38.2.20
82	秋田県における歴史研究の現状と 問題点()	大和久震平 佐川良視	歴史評論115巻		S53. 2
83	秋田県の紀年遺物	奈良修介		小宮山出版	S51.6.30
84	秋田県の考古学(郷土考古学叢書3)	豊島 昻 奈良修介		吉川弘文館	S42.2.15
85	秋田県能代市大館遺跡の調査	加藤孝	日本考古学協会研究発表要 旨40		S49.5
86	秋田県の土師器について	小松正夫	考古風土記第2号		S52.4.29
87	秋田県の歴史	子供のための郷土 史研究会		光文書院	S43.10.1
88	秋田県の歴史(県史シリーズ5)	今村義孝		山川出版社	S44.11.1
89	秋田県の歴史散歩	秋田県の歴史散歩 編集委員会		山川出版社	S50.7.25
90	秋田県南秋田郡羽白目遺跡	奈良修介	日本考古学年報17	日本考古学協会	S44.3
91	秋田砂丘の砂丘地形と遺跡について	草薙祥子	秋田考古学第32号	秋田考古学協会	S50.3.20
92	秋田市上新城の古代窯址群について	上法香苗	秋田考古学第8号	秋田考古学協会	S32.9.1
93	秋田市史 上巻	秋田市役所		秋田市役所	S24.7.12
94	秋田市史跡めぐりガイドブック	秋田市観光協会 秋田市文化財保護 協会			S54.7.12
95	秋田市高清水採集土器	伊藤種秋	秋田考古学第8号	秋田考古学協会	S32.9.1
96	秋田市の遺跡と現況	五十嵐芳郎	遺跡とその資料VI		S45.1
97	秋田市の今昔 新風土記	今野賢三		秋田市案内刊行会	S32.8.10
98	秋田市付近の城塞遺跡	伊藤鄉人	秋田考古学第13号	秋田考古学協会	S 34.12.1
99	秋田市北郊の条里制遺構 一条里制施行の北限設定の試み―	虎尾俊哉	日本上古史研究4の3		S35.3
100	秋田城	安藤和風 木村主一郎	秋田県案内	彩雲堂	M39.5
101	秋田城	斉藤陽二郎	秋田の城	秋田魁新報社	S30.9.10
102	秋田城		図説日本文化地理大系16 東北II	小学館	S36.4.10
103	秋田城	読売新聞社	秋田の歴史	読売新聞社	S40.4.29
104	秋田城	大類伸 児玉幸多	日本の城I東北の城	人物往来社	S41.5.25
105	秋田城	鳥羽正雄	日本城郭辞典	東京堂出版	S46.3.25
106	秋田城	斉藤 忠	国史大辞典Iあ~い	吉川弘文館	S54.3.1
107	秋田城跡	小松正夫	第2回古代城栅官衙遺跡検 討会資料	~	S51
108	秋田城跡	小松正夫	第3回古代城栅官衙遺跡検 討会資料		S 52
109	秋田城跡	日野 久	第4回古代城栅官衙遺跡検 討会資料		S 53
110	秋田城跡	石郷岡誠一	第5回古代城栅官衙遺跡検		S54

111	秋田城址	斉藤 忠	日本考古学辞典(日本考古	東京堂出版	S 37.12.15
112	秋田城跡 昭和47年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査	学協会)	秋田市教育委員会	S48.3
113	秋田城跡 昭和48年度秋田城跡 発掘調査概報	事務所 秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所		秋田市教育委会会	S49.3
114	秋田城跡 昭和49年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育 <u>委</u> 員会 秋田城跡発掘調查 事務所	4 /	秋田市教育委会会	S 50. 3
115	秋田城跡 昭和50年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所		秋田市教育委員会	S51.3
116	秋田城跡 昭和51年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所		秋田市教育委員会	S52.3
117	秋田城跡 昭和52年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所		秋田市教育委員会	S 53. 3
118	秋田城跡 昭和53年度秋田城跡 発掘調査概報	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所		秋田市教育委員会	S 54. 3
119	秋田城跡外郭について	小松正夫	東北史学会1974年度大会プ ログラム		
120	秋田城跡から和銅開珎	秋田城跡発掘調査 事務所	考古学ジャーナルNo.139	ニュー・サイエン ス社	S52.8.30
121	秋田城跡出土瓦について	小松正夫	東北考古学の諸問題(東北 考古学会編)	東出版寧楽社	S51.10.15
122	秋田城址出土石製品	豊島 昻	秋田考古学第11号	秋田考古学協会	S33.12
123	秋田城跡出土土器(1) 一土師器杯について一	小松正夫	秋田考古学第32号	秋田考古学協会	S50.3.20
124	秋田城跡出土土器(2)	日野 久	秋田考古学第33号	秋田考古学協会	S51.8.1
125	秋田城跡出土土器(3)	石郷岡誠一	秋田考古学第34:35合併号	秋田考古学協会	S53.1
126	秋田城跡出土の木簡	秋田城跡発掘調査 事務所 平川 南	考古学ジャーナルNo.160	ニュー・サイエン ス社	S54.4.30
127	秋田城址出土の文様瓦	奈良修介	秋田考古学第11号	秋田考古学協会	S 33.12
128	秋田城跡第一次調査概要	斉藤 忠		文化財保護委員会	S34.8
129	秋田城跡第二次調査概要	斉藤 忠		文化財保護委員会	S35.8
130	秋田城跡第三次調査概要	斉藤 忠		文化財保護委員会	S36.8
131	秋田城跡第四次調査概要	斉藤 忠		文化財保護委員会	S37.8
132	秋田城跡第3次調査	加藤 孝	東北考古学第2輯	東北考古学会	S36.10.25
133	秋田城跡第 5・6・7 次発掘調査説明 会資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所			S47.10
134	秋田城跡第9次発掘調査説明会資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所			S48.5
135	秋田城跡第10次発掘調査説明会資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調查 事務所			S48.9
136	秋田城跡第18次調査中間報告	秋田市教育委員会			S51.5.7
137	秋田城跡第18次発掘調査現地説明会 資料	秋田市教育委員会 私田城跡発掘調査 事務所			S51.6
138	秋田城跡第19次発掘調査現地説明会 資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所			S51.6.10
139	秋田城跡第21次発掘調査現地説明会 資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所			S52.6

140	秋田城跡第25次発掘調査現地説明会 資料	秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査 事務所			S53.11.23
141	秋田城跡調査中間発表資料	斉藤 忠		文化財保護委員会	S 35
142	秋田城阯に就いて	武藤一郎	秋田考古会々誌1巻3号	秋田考古会	T15.3
143	秋田城址に就いて	大山 宏 深沢多市	秋田県史蹟調査報告第一号	秋田県	S 7 .12.28
144	秋田城址について	伊藤鉄太郎	秋田考古学第11号	秋田考古学協会	S33.12
145	秋田城址の瓦類について	上法香苗	秋田考古学第11号	秋田考古学協会	S 33.12
146	秋田城阯の研究目録	大山 宏			S 6.5
147	秋田城跡の第17次調査が終了	秋田市教育委員会	考古学ジャーナルNo.115	ニュー・サイエン ス社	S50.11.30
148	秋田城跡の発掘を終了して	斉藤 忠	日本歴史176	日本歴史学会	S38.1.1
149	秋田城跡発掘見聞記	新野直吉	古代文化3巻9号	古代学協会	S34.9.20
150	秋田城跡発掘調査	秋田城跡発掘調査 事務所	秋田考古学会報No.7	秋田考古学協会	S53. 2.26
151	秋田城跡発掘調査略報	小松正夫	秋田考古学会報No.3	秋田考古学協会	S49.8.15
152	秋田城跡発掘調査略報	石郷岡誠一	秋田考古学会報No.6	秋田考古学協会	S51.12.1
153	秋田城跡発見土器墨書銘集録 (其一)	大川 清		秋田城跡調査団	S36.8.1
154	秋田城趾略考(県内鉄道沿線史蹟)	大山 宏	羽城55号	秋田県立秋田中学 校内校友会	T15.1.15
155	秋田城・雄勝城関係烽遺跡について	新野直吉	北奥古代文化 2		S44.4.30
156	秋田城関係古文献抄録	板橋 源		秋田城跡調査団	S36.7.26
157	秋田城記	木村松軒	秋田市案内	秋田市役所	S11. 3.31
158	秋田城記	木村松軒			元禄13年
159	秋田城境域において	戸沢喜市・大山宏		史談会記録	S 6 . 7
160	秋田城区域決定参考資料	秋田県史蹟名勝天 然記念物調査会		秋田県史蹟名勝天 然記念物調査会	S10.8.3
161	秋田城研究の今昔	栗田茂治	秋田郷土文化創刊号	秋田郷土会	S14.6.1
162	秋田城考	栗田茂治			T15.10
163	秋田城古跡考	狩野徳蔵	棣華 6 号 「秋田寺内旧蹟誌」に所収	東山文庫	M30
164	秋田城史蹟指定の前奏曲	奈良環之助	秋田郷土文化創刊号	秋田郷土会	S14.6.1
165	秋田城創建年代考	板橋 源	岩手大学学芸学部紀要17卷 1部		S35.10
166	秋田城と新城	佐藤与市	出羽路第21号	秋田県文化財保護 協会	S38.12.1
167	秋田城と地名と道路	佐藤与市	出羽路第22号	秋田県文化財保護 協会	S39.6.3
168	秋田城について()	半田市太郎	秋田文化8-48	「秋田文化」の会	S35.8.2
169	秋田城について(二)	半田市太郎	秋田文化10-49	「秋田文化」の会	S 35.10.10
170	秋田城について(三)	半田市太郎	秋田文化11-50	「秋田文化」の会	S35.11
171	秋田城の位置に関する諸説	板橋 源	岩手史学研究33号	岩手大学史学会	S 35.4
172	秋田城之記並古跡遺跡	大友道恒			
173	秋田城の大安鎮兵鎮城夜叉法	佐藤与市	出羽路第26号	秋田県文化財保護 協会	S40.6.2
174	秋田城の築城	伊藤鄉人	秋田市付近の遺跡	伊藤鄉人	S 32. 6.3
175	秋田城発掘におもう	奈良環之助	秋田考古学第21号	秋田考古学協会	S37.9.1
176	秋田城をめぐる諸問題	高橋富雄	日本歴史281		S46.10.1
177.	秋田人物伝	山方泰治(旭嶺)		尚志堂	T12.3.3
178	秋田千年瓦 完	黒沢道形	「新秋田叢書」第3巻(昭 和46年)に所収		T14.12
179	秋田大河の変動と秋田城	佐藤与市	出羽路第24号	秋田県文化財保護 協会	\$39.10.3
180	秋田だより(1)	富樫泰時	考古学研究第26巻 3 号 (通 巻103号)	考古学研究会	S54.12.3

		F			
181	秋田断層即ち天長大地震の 震源に就いて	大橋良一	地理学評論3巻8号		S 2
182	秋田地方の沖積層	藤岡一男	日本地質学会等連合学術大 会総会討論会資料		S41
183	秋田寺内旧蹟誌	鎌田正苗			明和年中
184	秋田寺内村の古跡・寺内村古跡記	人見焦雨 鎌田正苗	寺内村旧跡叢書		
185	秋田陶芸史稿	小野正人		秋田考古学協会	S46.9.11
186	秋田陶芸の落穂	小野正人	鶴舞24	本荘市文化財保護 協会	S47.5.20
187	秋田陶芸夜話	小野正人		加賀谷書店	S54.11.27
188	秋田の今と昔	井上隆明		歷史図書社	S52.7.1
189	秋田のおいたち	秋田県立博物館	The state of the s	秋田県立博物館	S51.3
190	秋田のお寺さん 一秋田・河辺一	秋田魁新報社企画 委員会事務局		秋田魁新報社	S53.3.15
191	秋田の古代遺跡	新野直吉	昭和54年度日本社会科教育 学会第29回日本社会科教育 研究会第28回合同大会社会 科教育研究発表要旨集録	全日本社会科教育 研究会	S54.10
192	秋田の古代城栅	門間光夫	教育秋田311	秋田県教育委員会	S50.6.10
193	秋田の土と人 土之巻	安藤和風		秋田郷土会	S 6 . 7 .18
194	秋田の陶芸	秋田県教育委員会	郷土文化読本第2集	秋田県教育委員会	
195	秋田の誇	小野 進	羽城第69号	秋田県立秋田中学 校校友会	S14.12.25
196	秋田の歴史	半田市太郎	,	秋田県地域社会研 究会	S28.8.20
197	秋田の歴史	築山小学校六年四 組共同研究	久保田豆風土記	築山小学校	S 31
198	秋田の歴史	読売新聞社秋田支 局編	,	三浦書店	S40.4.29
199	秋田湊のうつりかわり	佐藤与市	出羽路第28号	秋田県文化財保護 協会	S40.11.15
200	秋田むかしむかし	秋田魁新報社文化 部		秋田魁新報社	S40.8.1
201	アサヒグラフ	朝日新聞社		朝日新聞社	S54.12.28
202	あづま みちのく	唐木順三		中央公論社	S49.9.1
203	天野源―コレクション図録 ―考古図録第4集―	秋田県立博物館		秋田県立博物館	S54.1.21
204	新屋町郷土誌	辻永佐藤治		秋田市役所新屋出 張所	S17.3.15
205	安東氏秋田移住の年代に就いて (其の一)	大山 宏	秋田考古会々誌2巻6号	秋田考古会	S7.8.5
206	安東氏秋田移住の年代に就いて (其の二)	大山 宏	秋田考古会々誌 3 巻 1 号	秋田考古会	S 9.7.20
207	胆沢城	高橋富雄		学生社	S46.11.20
208	石崎遺跡	岩見誠夫	秋田考古学会報No.2	秋田考古学協会	S49.1.15
209	石崎遺跡発掘調査報告書 第1回~第3回合報	五城目町教育委員 会	,	五城目町教育委員 会	S50.5.10
210	夷人感覚から奥州意識への展開	及川儀右衛門	岩手史学研究12号	岩手大学史学会	S 27.11
211	夷俘・俘囚の考闫完結	喜田貞吉	歴史地理23巻5号	日本歷史地理学会	T3.5.1
212	岩手県史 上古編上代編	岩手県		岩手県	S36.1.5
213	石船棚おぼえがき	高橋富雄	東北文化研究紀要 2 号	東北学院大学東北 文化研究所	S45.3.
214	羽後町河辺郡小阿地村発見の古墳玉 類に就いて	武藤一郎	秋田考古会々誌2巻1号	秋田考古会	S 3.2.20
215	羽後町郷土史	羽後町郷土史編纂 委員会		羽後町教育委員会	S41.3.31
216	羽後町足田遺跡発掘調査概報	秋田県教育委員会		秋田県教育委員会	S39.4.20
	羽秋秋田寺内古城之図				

_				r		
	218	埋もれた家屋と集落	斉藤 忠	日本歴史199	日本歴史学会	S39.12.1
	219	駅路考	茂木久栄	出羽路第31号	秋田県文化財保護 協会	S41.10.31
	220	蝦夷 (日本歴史叢書)	高橋富雄		吉川弘文館	S38.10.30
	221	蝦夷―古代史研究・第二集	古代史談話会		朝倉書店	S31.5.10
	222	蝦夷 東北の源流	河北新報社編集局		河北新報社編集局	S54.4.20
	223	蝦夷史料	東北大学東北文化 研究会		吉川弘文館	S32.9.10
	224	蝦夷征討	大塚徳郎	平安初期政治史研究	吉川弘文館	S44.3
	225	蝦夷征討と交通路	福田和憲	史元15		S47.11.1
	226	蝦夷征伐の段階について	高橋富雄	日本歴史114		S32.12
	227	蝦夷の階級社会小考	根田信隆	秋田考古学第11号	秋田考古学協会	S 33
	228	蝦夷の神祇信仰	新野直吉	神道学30号	神道学会	S36.8.1
	229	蝦夷の抵抗とその背景	氏家和典	文化19の5		S30.9
	230	蝦夷の反乱―その前章―	門脇禎二	立命館文学96		S 28.5
	231	蝦夷の反乱と律令国家 一「元慶の乱」を中心として一	佐藤宗諄	平安前期政治史序説	東大出版会	S52.3
	232	蝦夷の反乱と律令国家の崩壊	佐藤宗諄	史林50の3		S42.5
	233	奥羽古史考証	藤原相之助		友文堂書房	S 7 . 4 .13
	234	奥羽地理沿革考 (承前)	阿田 羆	史学雑誌第5編11号	史学会	M27
	235	奥羽の動乱と俘軍	村尾次郎	律令財政史の研究	吉川弘文館	S 36. 3.15
	236	奥羽北部米作起源研究の近業	新野直吉	日本上古史研究第2卷第6 号(通卷18号)	日本上古史研究会	S33.6.1
	237	大館遺跡発掘調査概報	能代市教育委員会		能代市教育委員会	S49.3
	238	大館遺跡第4次発掘調査概報	能代市教育委員会		能代市教育委員会	S50.3
	239	大曲町郷土史	高垣保吉		高垣保吉	S 9 . 5 . 15
	240	雄勝羽後町土館地区遺跡調査報告	奈良修介 豊島 昻	出羽路第20号	秋田県文化財保護 協会	S38.8.15
	241	雄勝城とその周辺	新野直吉	秋田地方史の研究	金沢文庫	S48.6.15
	242	雄勝村雄勝城関係資料	柿崎隆興		羽後町教育委員会	S43.9
	243	雄勝村と雄勝城の遺跡について	柿崎隆興	出羽路第13号	秋田県文化財保護 協会	S36.7.25
	244	奥六郡と清原氏	庄司 浩	立正史学38		S49.3
	245	奥六郡と清原氏について	庄司 浩	古代文化28卷 1 号	古代学協会	S51.1.20
	246	雄物川往来誌(!) シリーズ秋田の民衆史(3)	佐藤清一郎		秋田文化出版	S 53.11.10
「カ行	247	改訂新屋郷土誌	改訂新屋郷土誌編 纂委員会	<i>t</i>	日吉神社	S45.11.3
Ú	248	各駅停車全国歴史散步6	秋田県魁編		河出書房新社	S53.10.30
	249	角館誌第1巻考古・古代編	工藤雅樹		秋田県角館町役場 内「角館誌」刊行会	S54.3.20
	250	銙帯と官位制について	阿倍義平	東北考古学の諸問題	東北版寧楽社	S51.10.15
	251	角川日本史辞典	青柳光寿 竹内理三		角川書店	S51.5.30
	252	川西町道伝遺跡発掘調査 現地説明資料	川西町教育委員会		川西町教育委員会	S54.8.7
	253	河辺郡・南秋田郡	吉田東伍	大日本地名辞書第5冊の下	富山書房	M40.8.17
1	254	河辺郡郷土史読本稿一	栗田茂治			
of owner to	255	河辺郡に於ける出土物	栗田茂治	秋田考古会々誌	秋田考古会	T14.11.30
	256	河辺府に就いての考察	武藤一郎	秋田郷土叢話	秋田県図書館協会	S 9 . 3 . 5
	257	かわらの美	大川 清		社会思想社	S41.7.15
	258	元慶の乱	新野直吉	秋大史学15	秋田大学歴史学研 究会	S43.3.30
	259	元慶の乱の史的意義	新野直吉	歴史41		S46.6
	260	元慶の乱をめぐる二,三の問題	弓野正武	北奥古代文化第6号		S49.5.30
	261	官国幣社特殊神事調一	神祇院			S16.3
L			1			

262	卷之九一四秋田城	進藤重記	出羽国風土略記	歴史図書社	S49. 3.20
263	城輪棚跡出土柱木のMC年代 をめぐって	加藤 稔 米地文夫	山形考古第2巻第4号		S51. 5 .31
264	城輪の出羽栅址	阿部正巳	秋田考古会々誌3巻5号	秋田考古会	S 6 .12.20
265	記念刊行秋田城址が指定史蹟となる まで	寺内町役場		寺内町役場	S10.11
266	郷土研究紀要	秋田県女子師範学 校		秋田県女子師範学 校	
267	郷土史事典 秋田県	国安 寛 柴田次雄		昌平社	S54.9.20
268	郷土誌資料集第一巻	增村亮一		仁賀保町公民館	S42.1.10
269	郷土史大系第2巻 青森・秋田・山形・岩手	森嘉兵衛		宝文館出版	S43.2.5
270	郷土誌大系第3巻青森・秋田・山形	東京社会教育研究 会		清水書院	S 25.8.15
271	郷土の文化財 1 北海道・青森・秋田・山形	戸川安章		宝文館出版	S38.5.5
272	協和村郷土誌	協和村郷土誌編纂 委員会		協和村教育委員会	S43.12.20
273	郡衙跡	高井悌三郎	新版考古学講座6	雄山閣	S45.8.20
274	郡司制展開の諸形態	上田正昭	史林46卷2号	史学研究会	S37.3.1
275	藝術新潮 4	新潮社			S54.7.30
276	交易史上における秋田の位置	新野直吉		秋田社会開発研究 会	S53. 6 .16
277	考古学から見た東北の古代寺院	工藤雅樹	東洋学術研究第18巻第3号		S54.6.30
278	広辞苑 第二版補訂版	新村 出		岩波書店	S51.12.1
279	光明皇后 日本を創った人々2	岸 俊男		平凡社	S54.7.30
280	高野出土の墨書土器	岩見誠夫	秋田考古学第26号	秋田考古学協会	S42.7.31
281	古瓦	住田正一 内藤正恒		学生社	S43.11.10
282	国府 日本歴史叢書25	藤岡謙二郎		吉川弘文館	S44.12.25
283	国民百科事典1	下中邦彦	2	平凡社	S51.10.10
284	古四王神考	及川儀右衛門	岩手史学研究2号	岩手史学会	S24.2
285	古四王神社の意義に就いて	藤原相之助	秋田郷土叢話	秋田県図書館協会	S 9.3.5
286	古四王神社の源流を尋ねて	大山 宏	秋田郷土叢話	秋田県図書館協会	S 9.3.5
287	古代	足利健亮	歷史地理学 藤岡謙二郎編	朝倉書店	S42.3.15
289	古代秋田の地理的環境	大橋良一	秋田考古学第15号	秋田考古学協会	S35.7.8
290	古代蝦夷 一その社会構造一	高橋富雄		学生社	S49.7.5
291	古代国家と辺境	高橋富雄	岩波講座日本歴史古代3	岩波書店	S37.8.28
292	古代城栅に関する試論 一「古代国家と辺境」へのアプローチー	平川 南	原始古代社会研究Ⅳ	校倉書房	S53. 2
293	古代城栅の立地条件	板橋 源	古代文化7卷4号	古代学協会	S36.12
294	古代地名辞書日本地理志料	邨岡良弼			M36
295	古代東北史の人々	新野直吉		吉川弘文館	S53.6.10
296	古代東北城栅再論	平川 南	研究紀要第5巻	東北歷史資料館	S54.3.30
297	古代東北城栅の特質について 一建郡との関連を中心として―	平川 南	研究紀要第4巻	東北歴史資料館	S 53. 3
298	古代東北地方の城栅相互間に みられる位置の関係	坂田 泉	東北文化研究紀要10号	東北学院大学東北 文化研究所	S54.3
299	古代東北における建郡と城栅 ―出羽国雄勝郡を中心に―	関口 明	続日本紀研究202号	続日本紀研究会	S54.4.1
300	古代東北の開拓	新野直吉		塙書房	S44.11.30
301	古代東北の開拓	伊藤玄三	歴史18		S34.3
302	古代東北の戦史 中央軍対現地勢の一千年	新野直吉	歴史残花 長谷川才次編	善本社	S51.12.5
303	古代東北の地域中心研究の 近業によせて	新野直吉	史林47卷 3 号		S 39. 5

	304	古代東北の地域中心に関する 若干の歴史地理学的調査と問題点	藤岡謙二郎 足利建亮 桑原公徳	人文地理Vol. 15Na 3		S 38
	305	古代東北の覇者 (中公新書)	新野直吉		中央公論社	S49.3.25
	306	古代東北のフロンティア	山田安彦		古今書院	S51.4.30
-	307	古代東北発掘	伊東信雄		学生社	S48.10.15
-	308	古代における海道地方の政治と文化	三宅宗議	矢本町史第1巻古代	矢本町	S48.5
	309	古代日本の交通路II	藤岡謙二郎	711723118111	大明堂	S53. 6 .21
	310	古代の城塞	伊藤信雄	「日本の考古学」VII歴史時 代(ト)	河出書房	S42. 8.31
	311	古代の百姓	柿崎隆興	出羽路第29号	秋田県文化財保護 協会	S41.2.15
	312	古代の烽とその遺跡	高橋富雄	日本考古学・古代史論集	吉川弘文館	S49.2.12
	313	古代の由理 (第1回)	新野直吉	鶴舞25	本荘市文化財保護	S47.11.1
					協会	
	314	古代の由理(第2回)	新野直吉	鶴舞26	本荘市文化財保護 協会	S48.5.30
	315	古代の由理(第3回)	新野直吉	鶴舞27	本荘市文化財保護 協会	S48.11.15
	316	古代の由理(第4回)	新野直吉	鶴舞28	本荘市文化財保護 協会	S49.6.20
	317	古代北羽の仏教弘通	新野直吉	日本仏教14		S 37
	318	古代末期の反乱 草賊と海賊 教育社歴史新書〈日本史〉 3	林 陸朗		教育社	S52
	319	古墳と歴史時代初期	村越 潔	青森県の文化シリーズ1原 始時代	北方新社	S50.3.15
	320	今年度の県内の主な発掘	考古学部会	秋大史学15	秋田大学歷史学研 究会	S43.12.20
7	321	最近の東北古代史研究	大塚徳郎	古代文化4卷5号	古代学協会	S35.5
行	322	在地豪族の東北支配	新野直吉	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S53.1.20
	323	最勝と古趾旧蹟	堀井汀水	秋田案内	秋田民報社	T10.5.1
	324	最新地理学辞典	藤岡謙二郎		大明堂	S46.9.6
	325	最新秋田県史	佐々木三次郎		秋田公論社	S31.10.10
	326	〔座談会〕史跡の保存をめぐって		日本歴史228	日本歴史学会	S42.5.1
	327	坂上大宿禰田村麻呂考	板橋 源	岩手大学学芸学部研究年報 第10卷1部		S31.11
	328	坂上田村麻呂 日本の武将1	亀田隆之		人物往来社	S42.2.20
	329	坂上田村麻呂と胆沢城との周辺	佐々木博康	岩手史学研究60号		S50.5
	330	栅址管見	後藤宙外	秋田考古会々誌2巻5号		S 6 .12.20
	331	栅戸考	板橋 源	岩手大学学芸学部研究年報 第2巻		S16.7
	332	寺院址研究の現状	内藤政恒	歴史教育10-3		S37.3.1
	333	史跡秋田城跡現状変更による 緊急発掘調査略報	東北電力株式会社 秋田支店		東北電力株式会社 秋田支店	S43.11
	334	史跡秋田城跡出土品収蔵庫	小松正夫	郷土文化読本第4集	秋田県教育委員会	S 50.12
	335	史跡秋田城跡地内における日本電信 電話公社増設工事報告書	日本電信電話公社 東北電気通信局		日本電信電話公社 東北電気通信局	S46.3
	336	史跡秋田城跡の第4次発掘調査計画 きまる	文化財保護委員会	文化財情報第35号	文化財保護委員会	S37.6.20
	337	史跡秋田城跡保存管理計画	秋田市教育委員会		秋田市教育委員会	S 53. 3
	338	史蹟と考古学	柴田常惠	考古学講座第17巻	国史講習会 雄山閣	S 4 . 8 . 10
	339	指定史蹟払田栅阯	上田三平			S 6 . 8 . 20
	340	白い国の詩〈歴史編〉 家庭と電気特集総集編	東北電力株式会社		東北電力株式会社	S53.9.10
	341	城の発達	岡田茂弘	日本考古学の視点(下) 斉藤 忠編	日本書籍	S49.11
	342	宗教的集落「寺内」の歴史地理的性格	三浦鉄郎		三浦鉄郎	

		伊藤郷人	秋田考古学第5号	秋田考古学協会	S31.夏号
344	城郭及び城址	大類 伸 鳥羽正雄	考古学講座第9巻	国史講習会 雄山閣	S 3 .12.10
345	城栅跡研究の現状 ―東北地方―	板橋 源	歷史教育10-3		S 37
346	城栅址と館址	工藤雅樹	地方史マニュアル考古資料 の見方遺跡編	柏書房	S52.3.15
347	城棚の設置	坪井清足	世界考古学大系 4	平凡社	S36.7.31
348	昭和51年度における秋田県内の 発掘調査	岩見誠夫	秋大史学24	秋大史学会	S52.7.30
349	上代「由理駅」に関する管見の序説	新野直吉	鶴舞12	本荘市文化財保護 協会	S38.8.5
350	少年南秋田郡史	栗田茂治		石川会	S 31
351	条里制施行地域の北限をめぐって 一建郡時期からの一考察―	神 英雄	国史学研究第2号	竜谷大学国史部会	S51. 9
352	昭和37年の日本考古学界をかえりみて	中川成夫	歴史教育11-3		S38.3.1
253	昭和47年度秋田城跡発掘調査概要	小松正夫	東北史学会1972年度大会プ ログラム		
354	神宮寺八幡神社の棟札に就て	深沢多市	秋田考古会々誌1巻4号	秋田考古会	T15.7.1
355	新訂日本考古学図鑑	斉藤 忠		吉川弘文館	S30.2.5
356	新版郷土史辞典	大塚史学会		朝倉書店	S44.2.15
357	シンポジウム歴史時代の考古学	坂詰秀一		学生社	S46.9.10
358	水駅ならざる水駅	新野直吉	歴史28号	東北史学会	S39.3.31
359	推定古代郡衙址「石崎遺跡」の 調査概報	門間光夫	秋大史学15	秋田大学歷史学研 究会	S43.3.30
360	ずい筆として土崎という地名に 思うことども	池田長五郎	土崎史談10	土崎史談会	S45.5.
361	須恵系土器について	桑原滋郎	東北考古学の諸問題	東出版寧楽社	S 51.10.15
362	菅江真澄 朝日評伝選14	秋元松代		朝日新聞社	S52.5.30
363	菅江真澄翁と陶磁	小野正人	秋田考古学第34・35合併号	秋田考古学協会	S53.1
364	菅江真澄随筆集 東洋文庫143	内田武志		平凡社	S44.7.10
365	菅江真澄と秋田	菅江真澄翁百五十 年祭実行委員会		加賀谷書店	S53. 9.14
366	図説学習 日本の歴史2	和歌森太郎		旺文社	S52.2.5
367	図説世界文化史大系第21巻日本Ⅱ	西岡虎之助		角川書店	S34.1.30
368	図説日本の歴史3古代国家の繁栄	竹内理三		集英社	S49.6.25
369	世界考古学事典(上)	下中邦彦		平凡社	S54.2.25
370	前九年役と後三年役	岡部精一	奥羽沿革史論 日本歴史地 理学会編	仁友社	T 5 . 6 . 28
	前九年・後三年の役とその周辺	新野直吉	史元 日本古代史研究会会 誌第16号	史元会	S48. 5 . 31
371		****			
371 372	戦後東北地方史研究の動向と成果	豊田 武	文化24-1	東北大学文学会	S35.3.31
		豊田 武 佐々木博康	文化24-1 岩手史学研究40号	東北大学文学会 岩手大学史学会	S35.3.31 S37.6
372	戦後における古代東北城栅の研究				S35. 3 .31 S37. 6 S36. 5 .20
372 373	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 ― 回顧と展望― 日本史	佐々木博康	岩手史学研究40号	岩手大学史学会	S37.6 S36.5.20
372 373 374	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 ― 回顧と展望― 日本史 1965年の歴史学界 ― 回顧と展望― 日本史	佐々木博康 桜井清彦	岩手史学研究40号 史学雑誌70編 5 号	岩手大学史学会 史学会	\$37.6 \$36.5.20 \$41.5.20
372 373 374 375	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 一回顧と展望一日本史 1965年の歴史学界 一回顧と展望一日本史 日本史 1975年の歴史学界 一回顧と展望一日本史	佐々木博康 桜井清彦 坂詰秀一	岩手史学研究40号 史学雑誌70編 5 号 史学雑誌	岩手大学史学会 史学会 史学会	\$37.6 \$36.5.20 \$41.5.20
372 373 374 375 376	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 一回顧と展望一日本史 1965年の歴史学界 一回顧と展望一日本史 日本史 1975年の歴史学界 一回顧と展望一日本史 1975年の歴史学界 一回顧と展望一日本史	佐々木博康 桜井清彦 坂詰秀一 三輪嘉久 三森英逸 秋田県女子師範学校 秋田県女子師範学	岩手史学研究40号 史学雑誌70編 5 号 史学雑誌	岩手大学史学会 史学会 史学会 史学会	S 37. 6 S 36. 5.20 S 41. 5.20 S 51. 5.20 S 5.3.9
372 373 374 375 376	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 1965年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 1975年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 仙北の歴史 総合郷土研究 秋田県	佐々木博康 桜井清彦 坂詰秀一 三輪嘉久 三森英逸 秋田県師範学校	岩手史学研究40号 史学雑誌70編 5 号 史学雑誌	岩手大学史学会 史学会 史学会 史学会 三森印刷	S 37. 6 S 36. 5.20 S 41. 5.20 S 51. 5.20 S 5.3.9
372 373 374 375 376 377 378	戦後における古代東北城棚の研究 1960年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 1965年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 1975年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 1975年の歴史学界 ―回顧と展望― 日本史 仙北の歴史 総合郷土研究 秋田県	佐々木博康 桜井清彦 坂詰秀一 三輪嘉久 三森英逸 秋田県女子師範学校 秋田魁新報社文化	岩手史学研究40号 史学雑誌70編 5 号 史学雑誌	岩手大学史学会 史学会 史学会 史学会 三森印刷 三光堂書店	S 37. 6 S 36. 5 .20 S 41. 5 .20 S 51. 5 .20 S 5 . 3 . 9 S 14. 4 .15

382	第5回古代城栅官衙検討会	後藤勝彦	考古学ジャーナルNo.160	ニュー・サイエン ス社	S54.4.30
383	多賀城	岡田茂弘	歴史公論10	雄山閣	S51.10.1
384	多賀城	秋山元秀	空からみた歴史景観 矢守 一彦編	大明堂	S51
385	多賀城跡出土の「漆紙」文書につい て	平川 南	歴史と地理279	山川出版社	S 53.12.20
386	多賀城跡調査報告 I — 多賀城廃寺跡—	多賀城教育委員会 多賀城町		吉川弘文館	S45.10.15
387	多賀城跡と東北城栅の発掘	桑原滋郎	歴史手帖5巻5号	名著出版	S52.5.1
388	多質城・栅	平川 南	古代文化と地方第2巻地方 文化の日本史2(門脇禎二 編)	文一総合出版	S53. 2.15
389	多賀城古瓦草創年代考	内藤政恒	文化18-1	東北大学文学会	S29.1.1
390	多賀城と秋田城	新野直吉	7410-5	東北出版	S34. 9.10
391	多賀城と秋田城	平 重道	みちのくの歴史		S54. 5
392	多賀城と関連遺跡	東北歷史資料館		東北歴史資料館振興会	S53.11.3
393	多賀城と古代日本	東北歷史資料館 多賀城跡調査研究 所		宝文堂	S50.10.1
394	多賀城と玉造等諸栅	佐々木茂楨	国史談話会雑誌	国史談話会	S48. 2.28
395	足田遺跡第6次発掘調査略報	羽後町教育委員会		羽後町教育委員会	S47.12.20
396	足田門田遺跡発掘調査報告書	羽後町教育委員会		羽後町教育委員会	S47.4
397	地域考古学界の動向・秋田県	富樫泰時	考古学ジャーナル118	ニュー・サイエン ス社	S51. 2
398	地形の変化と史跡	大橋良一	秋田考古学第2号	秋田考古学協会	S 30.10.10
399	地方官衙と城栅	坪井清足	古代史発掘 9	講談社	S49.4.8
400	地方史研究の現状 東北(1)	高橋富雄	日本歴史191	日本歴史学会	S39.4.1
401	地名のはなし 秋田の地名	三浦鉄郎		三光堂	S48.3.1
402	中世奥羽の世界	大石直正 小林清治		東大出版会	S53. 4
403	鳥海山史	姉崎岩蔵		矢島観光協会	S27.6.20
404	鎮守府弩師考	板橋 源	岩手大学学芸学部研究年報 第8巻1部		S30.3
405	土崎中世史考	上法香苗	1 1	上法香苗	
406					S8.3
400	土崎発達史	今野賢三		今野賢三	
407	土崎発達史 土崎湊陶片ものがたり	今野賢三 小野正人	出羽路第46号	今野賢三 秋田県文化財保護 協会	S 9 .12.25
407			出羽路第46号	秋田県文化財保護	S 9 .12.25 S47. 2 . 25
407 408	土崎湊陶片ものがたり	小野正人	出羽路第46号	秋田県文化財保護 協会	S 9 .12.25 S47. 2 .25 S16.12.15
407 408 409	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史	小野正人加藤助吉	出羽路第46号 秋大史学 I	秋田県文化財保護 協会 土崎出張所	S 9 .12.25 S47. 2 .25 S16.12.15 S50. 2 .28
407 408 409 410	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会		秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研	S 9 .12.25 S47. 2 .25 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15
407 408 409 410 411	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝	秋大史学Ⅰ	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研	S 9 .12.25 S47. 2 .25 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15
407 408 409 410 411 412	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田東伍	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研	S 9 .12.25 S47. 2 .26 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1
407 408 409 410 411 412 413	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田東伍 斉藤 選	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研	S 9 .12.25 S47. 2 .24 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1 S40. 5 .20
	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー 出羽国府の行方	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田東伍 斉藤 暹 佐々木雷翁	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号 歴史手帖 2 1	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研究会 多賀城跡調査研究	S 9 .12.25 S47. 2 .28 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10
407 408 409 410 411 412 413 414 415	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー 出羽国府の行方 出羽国府論	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田東伍 斉藤 暹 佐々木 南	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号 歴史手帖 2 − 1 研究紀要 IV 総合地方史大年表 北海道	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研究会 多賀城跡調査研究所	S 9 .12.25 S47. 2 .24 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1 S40. 5 .20 S52. 3 .31
407 408 409 410 411 412 413 414 415	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー 出羽国府の行方 出羽国府論	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田東伍 斉藤 進 佐々木 南 今村義孝 今村義孝	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号 歴史手帖 2 − 1 研究紀要 IV 総合地方史大年表 北海道 ・東北地方	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歴史学研究会 多賀城跡調査研究 人物往来社	S 9 .12.25 S47. 2 .24 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1 S40. 5 .20 S52. 3 .31 S42. 2 .15
407 408 409 410 411 412 413 414	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー 出羽国府の行方 出羽国府論 出羽国	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉田藤 進 佐々木 南 今村義孝 井上通泰	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号 歴史手帖 2 − 1 研究紀要 IV 総合地方史大年表 北海道 ・東北地方	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田考古学協会 秋田大学歷史学研究会 多賀城跡調査研究 人物往来社 三省堂	S 9 .12.25 S47. 2 .25 S16.12.15 S50. 2 .26 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1 S40. 5 .20 S52. 3 .33 S42. 2 .15
407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417	土崎湊陶片ものがたり 土崎港町史 手形山窯跡 出羽国司の性格 秋田城介の場合 出羽国府遷廃考 出羽国府 一城輪址発掘調査ルポー 出羽国府の行方 出羽国府論 出羽国	小野正人 加藤助吉 秋田考古学協会 今村義孝 吉西藤 本 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	秋大史学 I 歴史地理10巻 3 号 歴史手帖 2 一 1 研究紀要 IV 総合地方史大年表 北海道・東北地方 上代歴史地理新考	秋田県文化財保護協会 土崎出張所 秋田大学歷史学研究会 多質 城跡調査研究 人物往来社 三省堂 学生社 秋田県文化財保護	S 9 .12.25 S47. 2 .24 S16.12.15 S50. 2 .28 S27. 3 .15 M40. 9 .10 S49. 1 S40. 5 .20 S52. 3 .31 S42. 2 .15 S18. 6 .30 S48. 7 .10

421	出羽の古代交通路研究の回顧と展望	山田安彦	岩手大学教育学部研究年報		S49.12
422	寺内神屋敷採集土器について	岩見誠夫	34 秋田考古学第8号	秋田考古学協会	S32.9.1
423	寺内旧跡記	鎌田正苗	Mary 11 / M. o y	717 717 717 2	文政15年頃
424	寺内高野の製鉄阯	根田信隆	秋田考古学創刊号	秋田考古学協会	S30. 6 .15
425	寺内古城図	大久保盛政	八田今日子創刊サ	火田马口子伽玄	文政戊寅 5
423	守門口观 囚	八八八五以			.24
426	寺内村旧蹟全図 附旧招魂地図				
427	天長地震と秋田河	武藤一郎	秋田郷土文化創刊号	秋田郷土会	S14.6.1
428	天平期における対夷政策について	工藤雅樹	文化27-2	東北大学文学部	S38.7.20
429	天平九年紀四月十四日条一節の試解	新野直吉	出羽路第21号	秋田県文化財保護 協会	S38.12
430	天平宝字三年紀九月二十六日条私解 辺境の建郡と置駅とによせて	新野直吉	続日本紀研究 9 - 12 (通巻 108号)	続日本紀研究会	S37.12.31
431	天保十四年九月二十日	高橋貞房	寺内村記		
432	東北	伊東信雄	新版仏教考古学講座第二卷 寺院(石田茂作監修)	雄山閣	S 52.6.30
433	東北開発史	竹内運平		歷史図書	S53.2
434	東北古瓦図録	原田良雄	(石田茂作監修)	雄山閣	S49.2.15
435	東北古代史の性格 東北古代史の中から	高橋富雄	秋大史学15	秋田大学歷史学研 究会	S43.3.30
436	東北古代城栅に附設せられた 烽櫓跡について	加藤 孝	東北学院大学論集 歴史学 地理学 4 号	東北学院大学文経 法学会	S49.3
437	東北古代史像の形成	工藤雅樹	国史談話会雑誌第15号		S46.11
438	東北古代史と城栅 城栅の虚像と実像	工藤雅樹	日本史研究136		S48.10
439	東北古代城栅の特質	斉藤 忠	日本考古学・古代史論集	吉川弘文館	S49.2.12
440	東北古代城栅の諸問題	佐々木和博	遮光器 8		S49.7
441	東北古代城栅関係史料雑考	佐々木博康	岩手大学教育学部研究年報 35		S 50.10
442	東北古代における城栅と郡界に 関する問題	山田安彦	岩手大学教育学部研究年報		
443	東北人	毎日新聞社地方部		毎日新聞社地方部	S 51.4
444	東北城栅址をめぐる二・三の問題	佐藤宗諄	日本史研究188号	日本史研究会	S53.4.20
445	東北大戦争時代 ―東北の動乱―	平川 南	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S53.1.20
446	東北拓植の進捗	辻善之助	日本文化史II	春秋社	S 25. 2.20
447	東北地方・古代	高橋富雄	地方史研究の現状 I 北海 道/東北/関東編(日本歴 史学会編)	吉川弘文館	S44.9.1
448	東北地方古代城栅官衙の外郭施設	吉川雅清	研究紀要 VI	多賀城跡調査研究 所	S54.3.31
449	東北地方出土の木簡について	平川 南	木簡研究創刊号	木簡学会	S 54.11.25
450	東北地方における郡の成立	服部昌之	史林46の 2		S38.3
451	東北地方における考古学の成果と 蝦夷の種族論	清水潤三	史学33の 2		S36.2
452	東北地方における末期古墳の様相	石附喜三男	古代文化14卷2号		S40.2
453	東北地方の合口埋甕遺構について	斉藤尚巳 沼山源喜治	北奥古代文化第6号	北奥古代文化研究 会	S49.5.30
454	東北地方の沿革	文部省	東北読本下卷		S14.5
455	東北地方の陶硯	工藤雅樹	日本の陶硯	五島美術館	S 53.9
456	東北地方の平瓦桶型作り技法 について	進藤秋輝	東北考古学の諸問題	東出版寧楽社	S51.10.15
457	東北における古城栅研究(中)	池内儀八	東北文化研究1-5		S 4.1
458	東北に於ける上古の城栅遺蹟	池内儀八	東北文化研究2-1		S 4 . 4
459	東北における歴史的フロンティア	山田安彦	日本地誌ゼミナールII	大明堂	S35.10
460	東北日本海沿岸の開拓および 由利郡の創設	亀田町役場	亀田郷土史上巻	亀田町	S 8.12.10

	461	東北日本における律令国家の漸移地 帯	山田安彦	立命館文学169		S 34
		地域構造の推移に関する歴史地理学的研究試論				
	462	東北の風土と歴史(風土と歴史2)	高橋富雄		山川出版社	S51.11.20
	463	東北の歴史と開発	高橋富雄		山川出版社	S48.4.20
	464	東北の原始・古代と「えぞ」	川崎利夫	東北民衆の歴史 日本史を 見直すために 歴史教育者 協議会東北ブロック編	民衆社	S52.8.1
	465	東北の城栅	桑原滋郎	日本古代文化の探求 城	社会思想社	S 52. 6.15
	466	東北の城栅	佐々木博康	歷史公論10	雄山閣	S51.10.1
	467	東北の古城栅	伊東信雄	日本城郭全集 I	7	S36.5
	468	東北の古代窯業遺跡	伊藤玄三	古代文化16巻3号		S41.3
	469	東北の古代文化	伊東信雄	土木学雑誌63-12		S53.12
	470	東北の考古学	伊東信雄	古代文化7卷4号	古代学協会	S36.12
	471	東北辺境	藤岡謙二郎	日本歷史地理総説古代編	吉川弘文館	S43.7.1
	472	東北北部における須恵器の生産	坂詰秀一	立正大学人文科学研究所年 報9号		S46.10.31
	473	東北北部における須恵器の生産	坂詰秀一	北奥の古代文化 平山久夫 編	学生社	S50.1.30
	474	東北歴史考古学の発達	伊東信雄	古代文化16卷 4 号	古代学協会	S41.4.30
	475	土器と城郭	伊藤鉄太郎		伊藤鉄太郎	S48.5.5
7	476	中藤根遺跡	秋田考古学協会		秋田考古学協会	S49.3
行行	477	奈良時代における国運の隆昌	古田良一	概観日本通史上巻	同文書院	S30.10.20
	478	奈良時代陸羽連絡策の研究 ―特に 天平九年の雄勝征伐を中心として―	和島芳男	史学雑誌53編1号	史学会	S17.1.1
	479	奈良朝の戯画瓦について	内藤政恒	日本考古学選集25内藤政恒 集(坂詰秀一編)	築地書館	S48. 9.20
	480	新野直吉先生著作目録 日本古代史関係論著	鎌田幸男	社会科教育研究会誌第3号	秋田大学社会科教 育研究会	S49.3.10
	481	新野先生著作目録について	鎌田幸男	社会科教育研究会誌第4号	秋田大学社会科教 育研究会	S51.6.5
	482	仁賀保町史前編(原案)	增村亮一		仁賀保町公民館	S44.2.1
	483	日本考古学史 日本歴史叢書34	斉藤 忠		吉川弘文館	S49.8.10
	484	日本考古学上の問題点	三宅敏之	日本歴史159	日本歴史学会	S36.9.1
	485	日本考古学の視点(下)	斉藤 忠		日本書籍KK	S44.11.10
	486	日本国語大辞典第1卷(縮刷版)	日本大辞典刊行会 編集		小学館	S54.10.20
	487	日本古代遺跡の研究 総説	斉藤 忠		吉川弘文館	S43.12.3
	488	日本古代史の基礎的研究的制度編	坂本太郎		東京大学出版会	39.10.10
	489	日本古代史の旅	加藤 蕙		新人物往来社	S47.1.5
4 3	490	日本古代地方史制度の研究	新野直吉		吉川弘文館	S49.11.20
	491	日本史小百科I神社	岡田米夫		近藤出版社	S 52.10.25
	492	日本史跡事典 I 東国編	日本史蹟研究会		秋田書店	S52.1.20
	493	日本史年表	日本歴史大辞典編 集委員会		河出書房新社	S 37. 9.10
	494	日本城郭史	大類 伸 鳥羽正雄			S11.11
	495	日本城郭全集 I	大類 伸		人物往来社	S42. 7.31
	496	日本人名大事典(新撰大人名辞典) 第5卷	下中邦彦		平凡社	S18.3.5
	497	日本生活文化史 2 庶民生活と貴族生活	門脇禎二		河出書房新社	S49.5.30
	498	日本全史 3 古代II	藤木邦彦		東京大学出版会	S46.9.15
	499	日本地誌 3 秋田県・青森県・岩手 県,東北地方総論	日本地誌研究所		二宮書店	S50.1.15
	500	日本地名大辞典 (「秋田市」)	渡辺光・中野尊正 山口恵一郎・式正英		朝倉書店	

501	日本の神社と祭	第9回国際宗教学 宗教史会議対策神 道委員会			S33. 8
502	日本文化史年表 上	辻善之助		春秋社	S31.11.20
503		浅香幸雄 木内信蔵 児玉幸多		小学館	S38.4.28
504	日本文化地理大系16東北II	浅香幸雄 木内信蔵		小学館	S38.4.28
505	日本民衆の歴史Ⅰ.民衆史の起点	児玉幸多 甘粕 健 門脇禎二		三省堂	S49.11.10
506	日本歴史大辞典 第1巻	河出孝雄		河出書房新社	S35.11.3
507		藤岡謙二郎		大明堂	S41.5.27
508				弘済出版社	S50.10.1
509		佐藤禎宏	庄内考古学第16号	庄内考古学研究会	S54.8.31
510		秋田考古学協会	and the state of t	秋田考古学協会	S52.3
		門間光夫	秋大史学16	秋田大学歷史学研 究会	S43.12.20
U 512	羽白目遺跡	昭和町教育委員会		昭和町教育委員会	S42.3.31
513	羽白目遺跡出土の布目瓦について	高橋一夫	秋田考古学第25号	秋田考古学協会	S40.5.30
514	羽白目遺跡調査報告	奈良修介 富樫泰時 鍋倉勝夫	秋田考古学第25号	秋田考古学協会	\$40.5.30
515	八森町のむかしといま 郷土誌資料	佐々木正雄		八森町教育委員会 八森町教育研究会	S47.2.1
516	八郎潟町史	八郎潟町史編纂委 員会		八郎潟町	S52.11.3
517	² 発掘された古代の東北	東北歷史資料館 宮城県多賀城跡調 査研究所		東北歴史資料館 多賀城跡調査研究 所	S54.8.1
518	人や竜を描く塼を発見 (考古ニュース)	小松正夫	考古学ジャーナルNa160	ニュー・サイエン ス社	S54.4.30
519	平泉藤原氏と鎌倉政権	塩谷順耳	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S 53. 1.20
520	桧山文化	栗田茂治	秋田考古会々誌2巻2号	秋田考古会	S 4 . 5 .20
521	深沢多市君の追憶	喜田貞吉	秋田考古会々誌3巻	秋田考古会	S10.4.30
522	藤里町誌	藤里町誌編纂委員 会		藤里町教育委員会	S50.8.31
523	俘囚長の動向	新野直吉	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S 53. 1.20
524	藤原保則	大塚徳郎	平安初期の征夷と坂上田村 麻呂	東北出版	S35. 1
525	藤原保則伝における元慶の乱	高橋富雄	秋田地方史の研究 今村教 授退官記念会編	金沢文庫	S48.6.15
526	平安期に於ける上三郡の形成	栗田茂治	秋田史壇1号	深沢多市	S 8 . 4 .18
527	平安初期の奥羽	高橋 崇	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S53.1.20
528	日 平安前期奥羽に於ける 地方豪族の成立について	藤沢義美	岩手史学研究3号	岩手史学会	S24.7
529	平安遷都と東北経略	関 晃	図説日本文化史大系第4巻	小学館	S33.1.25
530		石母田正	日本古代国家論第2部	岩波書店	S48.6.29
531	辺境の長者(-) 一秋田県横手盆地の 歴史地理的一考察―	石母田正	歴史評論92巻		S33. 1
532	2 辺境の長者臼 一 秋田県横手盆地の 歴史地理的一考察―	石母田正	歴史評論96巻		S33. 5
533	補遺幻の由理栅をめぐって	山形尚一	野9号 小松かずゆ編	世代社	S53. 3
534	宝亀六年紀十月十三日癸酉日条一段 の解義	新野直吉	続日本紀研究186号	続日本紀研究会	S51.8.1
535	5 烽の制度とその実態	高橋富雄	東北学院大学東北文化研究 所紀要 3		S46.4

r						
	536	北羽発達史(L)	佐久間舜一郎		秋田県教育会	M41. 9.15
	537	北奥古地名序説	平山久夫	岩手史学研究51号	岩手史学会	S 43.6
	538	北奥史の謎を探る	石橋勝三		伊吉書院	S51.3.5
- 1	539	北奥の古代文化	平山久夫		学生社	S50.1.30
	540	払田棚阯・城輪棚阯	上田三平	史蹟精査報告第3	文部省	S13.7.31
	541	払田 栅跡号		秋田考古会々誌2巻4号	秋田考古会	S 5 .12.30
	542	払田棚跡・最近の発掘調査成果	畠山憲司	秋大史学25	秋田大学歴史学研 究会	S 53. 9.30
	543	払田栅阯に関する考察	上田三平	史学雑誌42編7号	史学会	S 6 . 8 . 1
	544	払田栅址の現況と栅に関わる 若干の考察(F)	新野直吉	古代文化24卷7号		S47.7
	545	払田栅址は河辺府の遺跡	後藤宙外	秋田郷土叢話	秋田図書館協会	S 9.3.5
	546	払田栅と雄勝城	高橋富雄	日本歴史302		S48.7
	547	北方の王者 平泉藤原氏	板橋 源		秀英出版	S51.6.10
	548	北方の古代文化	新野直吉 山田秀三		毎日新聞社	S49.7
	549	本荘市「古雪」と由理栅址	須藤直吉	鶴舞23	本荘市文化財保護 協会	S46.12.13
つっ行	550	埋蔵文化財について 調査の現状とその保護対策	秋田県教育委員会	教育秋田329	秋田県教育委員会	S51.12.10
11	551	増田町郷土史	增田町郷土史編纂 委員会		增田町教育委員会	S47.8.15
	552	まつりと信仰	桜井徳太郎		新人物往来社	S45.8.31
	553	(3)幻の由理栅を求めて 由理郷から由理郡へ	山形尚一	野 第4号 小松かずゆ編	世代社	S53.2.1
	554	(4)幻の由理栅を求めて 古代の出羽駅路	山形尚一	野 第5号 小松かずゆ編	世代社	S53.4
	555	幻の由理栅を求めて 古四王神社と由理栅	山形尚一	野 第7号 小松かずゆ編	世代社	S53.8
	556	みちのくの世界 一文化史的考察—	高橋富雄		角川書店	S40.8
	557	みちのく 風土と心	高橋富雄		社会思想社	S42.7.30
	558	湊城と湊安東氏	土崎知善	土崎郷土史要	土崎読書会	T 9.7.20
	559	港物語	今野賢三		土崎港町史続編 「港物語」刊行会	S27.8.5
	560	ミニガイド文庫49秋田・男鹿	ぐるーぷ・みちのく		昭文社	S 54
	561	南秋田・河辺両郡郷土史	栗田茂治		栗田茂治	
	562	南秋田郡	春日新一	秋田県史全	秋田県史刊行会	S11.1.20
	563	南秋田郡	豊間 凞	秋田県全図	雄文館	T 8.10.5
	564	南秋田郡史	栗田茂治		南秋田郡郷土研究 会	S 26.12.25
	565	南秋田郡誌 第一輯	南秋田郡教育会編		南秋田郡教育会	S15.6.30
	566	南秋田郡若美町海老沢出土の 須恵器に関して	岩見誠夫	秋田考古学第30号	秋田考古学協会	S47.2.20
	567	宮城県史 古代史・中世史	宮城県史編纂委員 会	-	財団法人宮城県史 刊行会	S 32. 3.31
	568	宮城県の歴史(県史シリーズ4)	高橋富雄		山川出版社	S44.9.1
	569	陸奥国徳丹城	岩手県教育委員会		岩手県文化財愛護 協会	S47.12
	570	陸奥・出羽官衙財政について 一いわゆる「征夷」との 関連を中心として―	平川 南	歴史48		S51. 1
	571	陸奥出羽鎮兵考	板橋 源	岩手史学研究8号	岩手史学会	S26.5
	572	陸奥・出羽の官衙遺跡	桑原滋郎	仏教藝術124号	毎日新聞社	S54.5.25
	573	陸奥・出羽の軍制	高橋 崇	史元15	史元会	S47.11.1
	574	ものがたり古代東北	河北新報社		河北新報社	S53.11.25
7	575	矢島町史	矢島町史編纂委員		矢島町	S54.12.25
ヤ行〕			会 矢島町 教育委員会		財団法人秋田青年 会館	S48.8
					L	

	576	矢島史談	土田誠一		矢島郷土史研究会	S 5 . 3 .21
	577	八橋寺内道しるべ	飯塚喜市			
	578	山形県史 資料十一編考古資料	山形県		山形県	S44.3.28
	579	山形県の歴史(県史シリーズ6)	誉田慶恩 横山昭男		山川出版社	S45.9.1
	580	山形の古代内陸駅路によせて	新野直吉	羽陽文化101号	山形県文化財保護 協会	S50.3.15
	581	山本町史	山本町史編纂委員 会	,	山本町	S54.2.20
	582	鑓野目久米蔵コレクション図録 (考古図録第2集)	秋田県立博物館		秋田県立博物館	S52. 1 .15
	583	由利郡中世史考	姉崎岩蔵		矢島町公民館	S45.8.20
	584	由利栅跡を探る	姉崎岩蔵	鶴舞15	本荘市文化財保護 協会	S40.11.10
9	585	律令格式法上の奥羽	新野直吉	岩手史学研究30号		S 34. 2.28
(ラ行)	586	律令行政の諸相	虎尾俊哉	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S53.1.20
	587	律令古代の東北	新野直吉		北望社	S44.7.16
	588	律令国家と蝦夷 若い世代と語る日本の歴史	虎尾俊哉		評論社	S50.7
	589	律令国家の奥羽経営	虎尾俊哉	古代の地方史第6巻奥羽編	朝倉書店	S53.1.20
	590	律令国家の生産と交易	平野邦雄	図説日本文化の歴史 3 奈良	小学館	S54.7.10
	591	律令制と古代東北	虎尾俊哉	古代文化7卷4号	古代学協会	S36.12
	592	律令制と古代東北	虎尾俊哉	古代の日本8 伊東信雄・ 高橋富雄編	角川書店	S52.5.30
	593	令制水駅の実地研究	新野直吉	日本歴史184	日本歴史学会	S38.9.1
	594	歴史散歩 陸奥への道	堤 紫海		文化総合出版	S54.4
,	595	歷史時代	奈良修介	秋田県史 考古編	秋田県	S35.3.31
	596	歴史的考察	大塚定彬 佐々木三次郎	寺内町誌	寺内町誌編纂委員 会	
-	597	歴史ニュース		歴史読本5月号	新人物往来社	S54.5.10
	598	歴史考古学上の新課題	斉藤 忠	日本歴史129	日本歴史学会	S34.3.1
	599	歴史考古学の諸問題	坂詰秀一	歴史教育11-3		S38.3.1
	600	歴史考古学の役割	斉藤 忠	歴史教育10-3		S37.3.1
	601	炉址に土器を伏せた新例	根田信隆	秋田考古学第2号	秋田考古学協会	S30.10.10
9	602	わが郷土 秋田県	清水通良		清水書院	S24.10.15
行	603	脇本埋没家屋第3次調査概報	秋田県教育委員会		秋田県教育委員会	S42.3
					-	
		2				
					,	
			9			
			,			

人 名 別 索 引

あ	青柳柳 光 寿	251(共)
as	秋元松代	362
	秋 山 元 秀	384
	秋田県	71, 72
	秋田県教育委員会	
	秋田県魁編	65, 194, 216, 550, 603 248
		**
	秋田県史蹟名勝天然記念物調査会	160
	秋田県師範学校	68, 378(#)
	秋田県女子師範学校	266, 378 供
	秋田県神社神道史編集委員会	75
	秋田県の歴史散歩編集委員会	89
	秋田県立博物館	583
	秋田考古学協会	409, 476, 510
	秋田魁新報社企画委員会事務局	190
	秋田魁新報社文化部	200, 379
	秋田市観光協会	94(共)
	秋田市教育委員会	112(共), 113(共), 114(共), 115(共), 116(共), 117(共), 118(共), 133 (共), 134(共), 135(共), 136, 137(共), 138(共), 139(共), 140(共), 147, 337
	秋田市文化財保護協会	94(共)
	秋田市役所	93
	秋田城跡発掘調査事務所	112(共), 113(共), 114(共), 115(共), 116(共), 117(共), 118(共), 120 126(共), 133(共), 134(共), 135(共), 137(共), 138(共), 139(共), 140 (共), 150
	浅 香 幸 雄	503(共), 504(共)
	朝日新聞社	201
	足利健亮	287, 304(共)
	阿 田 羆	234
	阿 部 正 巳	264
	阿 部 義 平	250
	甘 粕 健	505(共)
	姉 崎 岩 蔵	403, 583
	安藤 和 風	100(共), 193, 584
1,	飯塚喜市	577
	五十嵐 芳 郎	96
	池内儀八	457, 458
	池 田 長五郎	360
	石井良助	381
	石郷岡 誠 一	110, 125, 152
	石 附 喜三男	451
	石橋勝三	538
	11	530, 531, 532
	板橋源	66, 156, 165, 171, 293, 327, 331, 345, 403, 418, 547 571

,	伊 藤 玄 三	301, 468
	伊藤郷人(鉄太郎)	80, 81, 98, 144, 174, 343, 475
	伊 藤 種 秋	95
	伊 東 信 雄	307, 310, 432, 467, 469, 470, 474
	井 上 隆 明	188
	井 上 通 泰	417
	今 村 義 孝	88, 410, 415
	岩 手 県	212
	岩手県教育委員会	569
	岩見誠夫	208, 280, 348, 422, 566
う	上 田 三 平	339, 540, 543
	上田正昭	274
	羽後町教育委員会	395, 396
	羽後町郷土史編纂委員会	215
	氏 家 和 典	229
	内 田 武 志	364
お	及川 儀右衛門	210, 284
	大 石 直 正	402 (共)
	大 川 清	153, 257
	大久保 盛 政	425
	大 塚 定 彬	596(共)
	大塚史学会	356
	大 塚 徳 郎	224, 317, 321, 524
	大 友 道 恒	172
	大橋良一	60, 181, 289, 398
	大 山 宏	69, 143(共), 146, 154, 159(共), 205, 206, 286
	大 類 伸	104(共), 344(共), 494(共), 496
	大和久 震 平	82 (共)
	岡 部 精 一	370
	岡 田 茂 弘	341, 383
	岡 田 米 夫	491
	小 野 進	195
	小 野 正 人	185, 186, 187, 363, 407
か	改訂新屋郷土誌編纂委員会	247
	柿 崎 隆 興	242, 243, 311
	春日新一	563
	カロ 藤	489
	加藤助吉	408
	加藤孝	85, 132, 436
	加藤稔	263(共)
	門脇植二	230, 497, 505(共)
	狩 野 徳 蔵	73, 74, 163
	河北新報社	574
	L	

	河北新報社編集局	222
	鎌田正苗	183, 184(共), 423
	鎌田幸男	480, 481
	亀 田 隆 之	328
	亀田町役場	460
	唐木順三	202
	川崎利夫	464
	河出孝雄	506
	川西町教育委員会	252
ŧ	木内信蔵	503(共), 504(共)
	岸 俊 男	279
	喜 田 貞 吉	211, 521
	木 村 主一郎	100(共)
	木 村 松 軒	157, 158
	協和村郷土誌編纂委員会	272
<	草 薙 祥 子	91
	工藤雅樹	249, 277, 346, 428, 437, 438, 455
	国 安 寛	267(共)
	ぐる一ぷ・みちのく	560
	桑原滋郎	361, 387, 465, 572
	桑 原 公 徳	304(共)
	栗田茂治	161, 162, 254, 255, 350, 520, 526, 561, 564
	黒 沢 道 形	178
17	経済企画庁	58
2	考古学部会	320
	五城目町教育委員会	70, 209
	古代史談話会	221
	児 玉 幸 多	503(共), 504(共)
	後藤勝彦	382
	後藤宙外	330, 545
	子供のための郷土史研究会	87
	小林清治	421(共)
	小 松 正 夫	59, 63, 86, 107, 108, 119, 121, 123, 151, 334, 353, 518
	根 田 信 隆	227, 424, 601
	今 野 賢 三	97, 406, 559
3	斉 藤 忠	64, 106, 111, 128, 129, 130, 131, 141, 148, 218, 355 439, 483, 485, 487, 598, 600
	斉 藤 尚 巳	453(共)
	斉 藤 暹	412
	斉 藤 陽二郎	101
	坂 田 泉	298
	坂 詰 秀 一	357, 375, 472, 473, 599

	# + + bv	400
	坂本太郎	488 82(共)
	佐 川 良 視 佐久間 舜一郎	
		536
	桜井清彦	374
	桜 井 徳太郎	551
	佐々木 和 博	440
	佐々木 三次郎	325, 596(共)
	佐々木 茂 楨	394
	佐々木 博 康	329, 373, 441, 466
	佐々木 正 雄	515
	佐々木 雷 翁	415
	佐藤清一郎	246
	佐藤宗諄	231, 232, 444
	佐藤 与 市	166, 167, 173, 179, 199
	佐藤 禎 宏	509
L	塩谷順耳	519
	式 正 英	500(共)
	紫田常惠	338
	紫 田 次 雄	267(共)
	清水潤三	451
	清 水 通 良	602
	下 中 邦 彦	283, 369, 496
	庄 司 浩	244, 245
	上 法 香 苗	62, 92, 145, 405
	昭和町教育委員会	511
	神 祇 院	261
	進藤重記	262
	進藤秋輝	456
	新 潮 社	274
9	神英雄	351
	新 村 出	278
す	菅江真澄翁百五十年祭実行委員会	365
	須 藤 直 吉	549
	住 田 正 一	281(共)
せ	関 晃	529
	関 口 明	299
,	第9回国際宗教学宗教史会議村策神道委員会	501
た	第 9 回国際示教子示教史会議对東神道安員会 平 重 道	501 391
	高 井 悌三郎	273
	高垣保吉	
		239
	多賀城跡調査研究所 多智城教育禾昌公	393(共), 517(共)
	多賀城教育委員会 多賀城町	386供 386供
	<i>Σ</i> ⋈ ⋈ □	300 (77)

	竹 内 運 平	433
	竹 内 理 三	251, 368
	高 橋 一 夫	513
	高橋崇	527, 573
	高 橋 貞 房	431
	高橋富雄	176, 207, 213, 220, 226, 290, 291, 312, 400, 435, 447, 462, 463, 525, 535, 546, 556, 557, 568
ち	築山小学校六年四組共同研究	197
っ	辻 善之助	446, 502
	辻 永 佐藤治	204
	土 崎 知 善	558
	土 田 誠 一	576
	堤 紫海	594
	坪 井 清 足	347, 399
て	寺内町役場	77, 265
٤	東京社会教育研究会	270
	東北大学東北文化研究会	223
	東北電力株式会社秋田支店	333
	東北電力株式会社	340
	東北歷史資料館	392, 393(共, 517(共)
-	富樫泰時	78, 180, 397, 514(共)
	戸川安章	271
	戸沢喜市	159
	鳥羽正雄	105 , 344(共) , 494(共)
	豊 島 昻	84(共),122
	豊 田 武	372
	豊間	563
	虎尾俊哉	99, 586, 588, 589, 591, 592
な	内 藤 政 恒	281(共), 332, 389, 479
	中 川 成 夫	352
	中野尊正	500(共)
	奈 良 環之助	164, 175
	奈 良 修 介	67, 83, 84(共), 90, 127, 240, 514(共), 595
	名 取 洋之助	76
	鍋倉勝夫	514(共)
E	新野直吉	57, 149, 155, 191, 228, 236, 241, 258, 259, 276, 295, 300, 302, 303, 305, 313, 314, 315, 31e, 317, 322, 349, 358, 371, 380, 390, 417, 419, 429, 430, 490, 523, 534, 544, 548(典), 580, 585, 587, 593
	西 岡 虎之助	369
	日本史蹟研究会	492
	日本大辞典刊行会編集	486
	日本地誌研究所	499
	日本電信電話公社東北電気通信局	335

	日本歴史大辞典編集委員会	493
ø2	沼 山 源喜治	453(共)
o)	能代市教育委員会	237, 238
		542
は	畠 山 憲 司 八郎潟町史編纂委員会	516
	服部昌之	450
	林 陸 朗	318
	原田良雄	434
	半 田 市太郎	168, 169, 170, 196
v	人見焦雨	184(典)
	日野久	109, 124
	平川南	126供, 292, 296, 297, 385, 388, 413, 445, 449, 570
	平野邦雄	591
	平山久夫	540
.કે.	深沢 多市	143(典), 354
	福山敏男	61
	福田和憲	225
	藤岡一男	182
	藤 岡 謙二郎	282, 304供, 309, 324, 472, 508
	藤木邦彦	499
	藤里町誌編纂委員会	523
	藤沢義美	529
	藤 原 相之助	233, 285
	古 川 雅 清	449
	古田良一	478
	文化財保護委員会	336
ほ	保 角 里 志	421
	堀 井 汀 水	323
	誉 田 慶 恩	580(共)
ま	 毎日新聞社地方部	444
	增田町郷土史編纂委員会	552
	増 村 亮 一	268, 483
2	三 浦 鉄 郎	342, 401
	三上礼子	79
	南秋田郡教育会編	566
	宮城県史編纂委員会	568
	三 森 英 逸	377
	三 宅 宗 議	308
	三 宅 敏 之	485
	三 輪 嘉 久	376
む	武藤一郎	142, 214, 256, 428

	村 尾 次 郎	235
	邨 岡 良 弼	294
	村 越 潔	319
£	茂木久栄	219
	森 嘉兵衛	269
	文 部 省	455
	門間光夫	192, 359, 511
ゃ	矢島町教育委員会	575(共)
	矢島町史編纂委員会	575(共)
	山 形 県	578
	山 形 敝 一	533, 553, 554, 555
	山 形 泰 治(旭嶺)	177
	山 口 恵一郎	500 (共)
	山 田 秀 三	548(共)
	山 田 安 彦	306, 421, 442, 459, 461
	山本町史編纂委員会	581
νΦ	弓 野 正 武	260
ょ	横山昭男	579 (共)
	吉 田 東 伍	253, 411
	読売新聞社	103
	読売新聞社秋田支局編	198
b	和歌森 太郎	366
	和島芳男	478
	渡 辺 光	500(共)
	*	
		*** y**
	·	
	-	
	. %	
		18

文 献 索 引

あ	青森県の文化シリーズ1原始時代	319
	秋田案内	323
	秋田郷土叢話	285, 286, 545
	秋田郷土文化 創刊号	161, 164, 427
	秋田県案内	100
	秋田県史 全	562
	秋田県史 (考古編)	595
	秋田県史蹟調査報告第一号	143
	秋田県全図	563
	秋田考古会々誌	142, 205, 206, 214, 255, 264, 330, 354, 520, 521, 541
	秋田考古学	60, 79, 80, 91, 92, 95, 98, 122, 123, 124, 125, 127, 144, 145, 175, 227, 255, 264, 280, 289, 343, 363, 398, 422, 424, 435, 513, 514, 566, 601
	秋田考古学会報	150, 151, 152, 208
	秋田市案内	157
	秋田史壇	526
	秋田市付近の遺跡	174
	秋田地方史の研究	241, 525
	秋田の城	101
	秋田の歴史	103
	秋田文化	168, 169, 170
63	遺跡とその資料VI	96
	出羽路	81, 166, 167, 173, 179, 199, 311, 407, 418, 429
	岩手史学研究	171, 210, 284, 329, 373, 528, 537, 571, 585
	岩手大学学芸学部紀要	165
	岩手大学学芸学部研究年報	327, 331, 404
	岩手大学教育学部研究年報	421, 441, 442
	岩波講座日本歴史	291
う	羽城	154, 195
,	羽陽文化	580
	羽秋秋田寺内古城之図	217
お	奥羽沿革史論	370
か	概観日本通史上巻	477
	亀田郷土史上巻	460
ŧ	教育秋田	192, 550
~	郷土文化読本	194, 334
,		·
<	久保田豆風土記	197
17	研究紀要	296, 297, 414, 448
	原始古代社会研究Ⅳ	292

	考古学講座	338, 344
	考古学ジャーナル	63, 78, 120, 126, 147, 382, 397, 518
	考古風土記	86
	国史学研究	351
	国史大辞典Iあ~い	106
	国史談話会雑誌	394, 437
	古代史発掘 9	399
	古代城栅官衙遺跡検討会資料	101, 108, 109, 110
	古代の地方史第6巻奥羽編	322, 445, 519, 523, 527, 586, 589
	古代の日本8東北	419, 592
	古代文化	149, 245, 293, 321, 452, 468, 470, 474, 543, 591
	古代文化と地方第2巻	388
L	史学	451
	史学雑誌	234, 374, 375, 376, 543
	史元	225, 371, 573
	史蹟精查報告第三	540
	社会科教育研究会誌	480, 481
	社会科教育研究発表要旨集録	191
	遮光器	440
	史林	61, 232, 274, 303, 450
	秋大史学	258, 348, 359, 410, 511, 542
	庄内考古学	509
	上代歷史地理新考	416
	続日本紀研究	299, 430, 534
	新秋田叢書第3巻	178
	神道学	228
	新版考古学講座	273
	新版仏教考古学講座	432
	人文地理	304
す	 図説日本文化史大系	529
	図説日本文化地理大系	102
	図説日本文化の歴史	590
せ	世界考古学大系	347
7	総合地方史大年表	415
	空からみた歴史景観	384
た	大日本地名辞書	253
ち	地方史研究の現状	447
	地方史マニュアル考古資料の見方	346
	地理学評論	181
2	土崎郷土史要	558
	土崎史談	360

	鶴舞	186, 313, 314, 315, 316, 349, 549, 584
7	 出羽国風土略記262	262
	- 寺内町誌	596
	寺内村旧跡叢書	184
	寺内村記	431
,		
٤	東北学院大学東北文化研究所紀要 東北学院大学論集 歴史学・地理学	535
		436
	東北考古学 東北考古学の諸問題	132
	東北史学会 大会プログラム	121, 250, 361, 456 119, 353
	東北読本下巻	454
	東北文化研究	457, 458
	東北文化研究紀要	213, 298
	東北民衆の歴史	464
	東洋学術研究	277
	土木学雑誌	469
E	日本考古学協会研究発表要旨	85
	日本考古学・古代史論集	312, 439
	日本考古学辞典日本考古学選集	111
	日本考古子選集 日本考古学の視点(F)	479
	日本考古学年報	341 64, 66, 67, 90
	日本古代国家論第2部	530
	日本古代文化の探求 城	465
	日本史研究	438, 444
	日本城郭辞典	105
	日本城郭全集	467
	日本上古史研究	99, 236
	日本地誌ゼミナール	459
	日本地質学会等連合学術大会総会討論会資料	182
	日本の考古学	310
	日本の城	104
	日本の陶硯	455
	日本仏教	317
	日本文化史	446
	日本歴史地理総説	471
	日本歴史	148, 176, 218, 226, 326, 380, 400, 484, 546
0	野	533, 553, 554, 555
in	仏教藝術	573
	文化	229, 372, 389, 429
	文化財情報	336
^	平安初期政治史研究	224

	平安初期の征夷と坂上田村麻呂	524
	平安前期政治史序説	231
II	 北奥古代文化	155, 260, 453
	北奥の古代文化	473
4	 みちのくの歴史	391
'	みちのく歴史散歩	57
,		
£	木簡研究	59, 449
や	山形考古	263, 420
	 矢本町史	308
1)	立正史学	244
	立正大学人文科学研究所年報	472
	立命館文学	230, 461
	律令財政史の研究	235
ħ	棣華	163
	歷史	301, 358, 570
	歷史教育	332, 345, 352, 599, 600
	歷史公論	383, 466
	歴史残花	302
	歴史地理	211, 411
	歴史地理学	287
	歴史手帖 歴史読本	387, 412 597
	歴史と地理	385
	歴史評論	82, 531, 532
	* .	

秋田城跡発掘調查事務所要項

I組織規定

秋田市教育委員会事務局組織規則 抜粋 (昭和37年5月8日 教育規則第3号) 改 正 昭和52年11月21日第11号)

第1条

4. 第3条第4項に掲げる事務を分掌させるため、社会教育課に所属する機関として、秋田 城跡発掘調査事務所を置く。

第3条

- 4. 秋田城跡発掘調査事務所における事務分掌は、おおむね次のとおりにする。
 - 一, 史跡秋田城跡の発掘に関すること。
 - 二, 史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。

II 発掘調査体制

1) 調 查 体 制

秋田市教育委員会 教育長 佐 藤 博 之 社会教育課長 佐 藤 嘉 子

秋田城跡発掘調查事務所

氏	名	í	職名	7		属
佐々木	栄	孝	所 長	秋田市教育委員会社会教育課参事 (兼)		事(兼)
小 松	正	夫	主。事	"	社会教育課 (東	惟)
石郷岡	誠		11	11	- 11 ()	")
日 野	5	久	11	11	11 (1)	(1)
西谷		隆	嘱託	" - 1	11	
安 田	忠	市	調査補佐員	1 12 1		The state of the s
西鳥羽	礼	子	11			
柏谷	光	子	調査補助員			建筑区 党经建

2) 調查指導機関

宫城県多賀城跡調査研究所

